

昭和40年度

# 地力保全基本調査成績

〔日高山脈東山麓地域—大樹町〕

北海道立中央農業試験場

130

# 序

現状における土地生産力は土壌の諸種の阻害要因によつて十分にその地力を発揚できない場合が少なくないのみならず一方では剝脱要因もあつてその地力は消耗低下しつつある。従つてこれら阻害要因を排除して合理的かつ適切な地力保全の対策を推進し、もつて当面の農業構造改善の基盤整備に資するための昭和34年より農林省農政局の助成をえて基本的土壌調査分類を実施している。

本調査成績書は昭和40年度に行なつた15市町村をとりまとめたもので、こゝにこれを公表し営農安定の資に供する次第である。

現地調査の遂行に際して御協力を得た関係市町村、農業協同組合ならびに農業改良普及所の関係各位に対して、深く感謝の意を表する。

昭和41年3月

北海道立中央農業試験場  
三島京治

## 調査並びに取まとめ方法

本調査は、凡そ100ha以上の集団になつている農耕地および付帯地を調査対象とし、調査および取まとめに当つては、夫々下記の資料に基づいた。

1. 土壌断面調査および現地での営農状況は地力保全対策資料第6号(昭和36年9月、農林省振興局農産課)によつた。
2. 土壌統および区の設定並びに土壌生産力可能性等級基準は、地力保全対策資料第12号(昭和40年3月、農林省農政局農産課)及び水田土壌統設定第1次案(昭和38年12月、農技研化学部土壌第3科)によつた。

土壌統および土壌区の設定に当つては、北海道農業試験場農芸化学部土壌第1研究室の土性図を参照した。

### 調査職員氏名

化学部		部長	長谷部	俊雄
"	土壌改良科	科長	後藤	計二
"	"	第1係長	小林	莊司
"	"	研究職員	高尾	欽彌
"	"	"	菊地	晃二
"	"	"	水元	秀彰

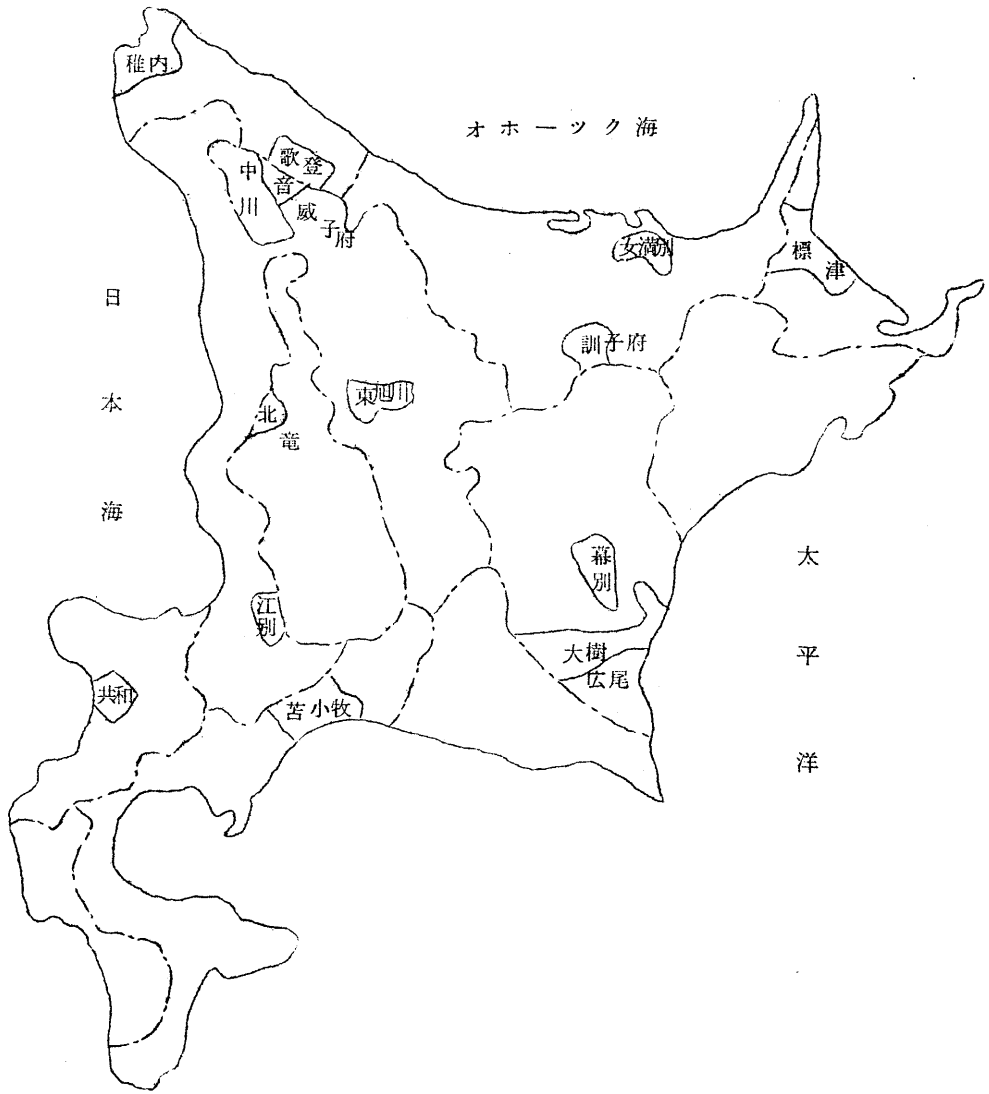
### 主に土壌分析を担当した職員

化学部	土壌改良科	研究職員	谷口	未吉
"	"	"	小野	清子

1. 調査地域一覽

調査地域名	該 当	農 地 面 積 ( 調 査 対 象 面 積 )		既 調 査 面 積		本 年 度 調 査 面 積	
	郡 市 町 村 名	水 田	畑	水 田	畑	水 田	畑
共 和	岩内郡共和村	2,372.0	3,176.0	2,372.0	2,000.0	0	1,176.0
石狩川下流	江別市	3,456.0	4,767.0	0	3,000.0	3,456.0	1,767.0
空知郡北部	雨竜郡北竜町	1,891.0	897.0	1,800.0	0	91.0	897.0
上川中央	旭川市(東旭川町)	4,524.0	1,462.0	4,000.0	0	524.0	1,462.0
北川北部	中川郡音威子府村	64.0	1,590.0	0	1,000.0	64.0	590.0
上川北部	中川郡中川町	81.0	3,833.0	0	1,000.0	81.0	2,833.0
稚 内	稚 内 市	0	2,736.0	0	1,000.0	0	1,736.0
頓 別	枝幸郡歌登町	0	2,987.0	0	1,000.0	0	1,987.0
網走湖畔	網走郡女満別町	923.7	6,420.0	0	4,200.0	923.7	2,220.0
北 見	常呂郡訓子府町	550.0	5,141.0	0	4,000.0	550.0	1,141.0
標 津	標津郡標津町	0	2,740.0	0	1,000.0	0	1,740.0
日高山脈東山麓	広尾郡大樹町	0	1,000.0	0	5,000.0	0	5,000.0
日高山脈東山麓	広尾郡広尾町	0	4,850.0	0	2,000.0	0	2,850.0
十勝中部	中川郡幕別町	328.0	14,900.0	0	5,000.0	328.0	9,900.0
樽前山南山麓	苫小牧市	43.5	2,796.7	0	0	43.5	2,796.7
合 計		14,233.2	68,345.7	8,172.0	30,200.0	6,612.0	38,145.7

調査地区位置図



# 日高山脈東山麓地域 大樹町

## 1 地区の概況

### 1) 位置及び調査面積

(1) 位置 北海道広尾郡大樹町

(2) 調査面積(ha)

郡市町村名	畑 総 面 積				調 査 対 象 面 積				過 年 度 調 査 面 積			
	水 田	普通畑	樹園地	計	水 田	普通畑	樹園地	計	水 田	普通畑	樹園地	計
大 樹 町	0	10,000	0	10,000	0	10,000	0	10,000	0	5,000	0	5,000

本 年 度 調 査 面 積				次 年 度 以 降 調 査 計 画 面 積				備 考
水 田	普通畑	樹園地	計	水 田	普通畑	樹園地	計	
0	5,000	0	5,000	0	0	0	0	完了

### 2) 気 候

東北海道の太平洋沿岸に位置するため、海洋の影響を受ける。夏季は特に海霧の襲来が多く、気温が比較的上らず、一般に冷涼に経過することが多い。秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、一般に初霜が早く、気候的には恵まれていない。

広尾気候観測所に於ける観測成績は次の通りである。

(1925~1950の平均)

項 目		月 別								
		4	5	6	7	8	9	10	11	
気 温 (℃)	平 均	4.6	9.4	12.9	17.4	19.9	18.7	11.2	5.1	
	最高平均	9.5	14.5	17.3	21.4	23.9	20.9	16.4	9.8	
	最低平均	-0.3	4.2	8.4	13.3	15.8	12.7	5.9	0.4	
降水量 (mm)	平 均	103.0	110.9	109.2	131.5	147.5	234.5	153.2	155.0	
	1日最多量	183.8	135.9	197.2	262.8	156.0	313.3	129.0	135.0	
霧 日 数 (広尾)		—	—	15	10	2	—	—	—	
(大津)		—	7	7	9	7	—	—	—	
降 水 日 数 (広尾)		8.7	9.3	9.4	10.8	10.5	12.2	9.8	10.9	
(大津)		7.6	7.5	8.9	9.7	10.1	11.5	7.7	7.1	

晩霜5月9日、初霜10月13日

### 3) 土地条件

#### (1) 地 形

標高20~200mの平坦もしくは緩傾斜を呈するいくつかの段丘台地が大部分を占めている。一部山地に接する地帯は傾斜を呈している。歴舟川、アイボシマ川、紋別川、当緑川等各河川の流域は平坦な沖積地帯を形成している。

#### (2) 地 質

本地区の最表層は少々粗粒な、樽前火山灰b、有珠火山灰bに被覆されている。

下層は砂岩質、凝灰質、或は火山噴出物に由来すると思われる洪積世堆積物からなるものが大部分

であり、各河川の流域は沖積世堆積物から構成されている。アノボシマ川及び当経川の下流域には中間泥炭及び低位泥炭が分布している。

山地に接する傾斜地は扇状堆土となつている。

(3) 侵蝕状況

最表層が軽しような火山灰層から成つているため風水蝕を受けている。特に春季、台地の乾燥地帯は海洋又は山脈からの季節風によつて甚しい風蝕を受けている。又山地に接する傾斜地は融雪期、降雨時に水蝕を受け、緩傾斜地においても軽度の水蝕が見られる。

(4) 交通

町の中央部を道々が貫通し、一部を除いて町道、農道も良く整備されている。冬期間の積雪と春先きの融凍時を除けば交通は便利である。

4) 土地利用及び営農状況

大樹町全体の状況は次の通りである。

a) 経営面積(1戸当平均 $ha$ ) (総戸数826戸)

総面積	田	普通畑	樹園地	その他
20.0	0.0	10.1	0	9.9

b) 作付面積(1戸当平均 $ha$ )

作物	大麦	大豆	菜豆	馬鈴薯	(亜麻) 甜菜	えん麦	牧草
面積	0.45	2.48	1.32	0.65	(0.29) 0.29	0.96	2.32

c) 家畜の種類及び頭数(総戸数826戸)

	馬	乳牛		豚	山羊	綿羊	鶏	肉牛
		成牛	育成牛					
飼育戸数	808	485		202		196	663	47
飼育頭数	2,915	1,468	713	717		373	25,627	295
1戸当平均飼育頭数	3.5	1.8	0.9	0.9		0.45	31.0	0.4
飼養農家1戸当	3.6	3.0	1.5	3.5		1.9	38.6	6.3

d) 農機具及び施設(826戸の総数)

種類	数量	種類	数量
トラクター	18	動力撒粉機	17
トラクター用カルチベーター	5	耕耘機	1
” スプレーヤー	3	畜舎(耐寒)	109
” モア	16	” (非耐寒)	433
” イモ掘機	5	尿溜	162
動力噴霧機	29	サイロ	257

e) 労働の関係(1戸当人数)

家族人員	労働換算	季節雇	臨時雇
6.0人	2.5人	0.07人	23.5人

当町全体の農家戸数は326戸で、このうち専業農家は694戸である。1戸当りの耕地面積は104a、1戸当所有面積は約204aを有し、全道的に見ても経営面積は大きい。

作付状況は大豆、菜豆を主とする荳類が多く耕地面積の大凡50%を占め、その他牧草を主とした飼料作物及び特用作物、馬鈴薯等の作付がなされ、荳類を主体とした穀菽経営が一般に多い。耕地以外の保有地は家畜の放牧地として利用されているが、その利用度は一般に低い。又耕地以外の保有地の一部を山林として所有する農家が多い。

1戸当りの保有面積は大きい、一般に海洋の影響を強く受けるので、農期間が冷涼なため畑作物の収量は低位である。加えて数年に1度の冷害凶作があり、時に風蝕の被害を被るなど、その営農状態は安定なものとは云い難い。この傾向は海岸に近づく程強く現れているのが特徴的である。

このような気象条件下のため、以前は馬の繁殖育成が盛んに行われ、馬産地としての名声が高かったが、昭和30年集約酪農地域に指定され、乳牛を主体とした混同経営、或は主畜経営への切替えを目指して進んで来ている。しかしながら、相次ぐ冷害凶作、他産業との所得較差の増大に伴う経済的問題等、馬産を含めた荳作穀菽経営から乳牛を主体とした酪農経営への急速な転換には諸種の問題が見られる。当町に於ける乳牛飼養頭数5~7頭以上の農家数は全体の20%弱であり、今後これら以外の、主畜経営に転換しつつあるが未だ経済的に安定な規模に至らず伸び悩みの状態にあるものを急速に進展せしめなければならないのが目下の課題である。

## 2 土壌類型区分及び説明

### 1) 土壌統一覧及び土壌区一覧

#### (1) 土壌統一覧

土壌統名	色層序	腐植層序	礫、砂礫層 礫を混在 する砂層	酸化 沈積物	土 性		母 材 堆 積 様 式
					表 土	次 層	
晩 成	YR/ YR	表層腐植層	なし	なし	強粘質	壤質	非固結火成岩 (風積) 非固結水成岩 (残積)
晩成西	"	表層多腐植層	"	"	壤質	壤質	非固結火成岩 (風積) 非固結水成岩 (崩積)
美 成	"	表層腐植層	"	"	"	"	" (風積) 洪積
更 正	"	"	"	"	"	"	"
拓 北	"	"	"	"	壤質	粘質	"
尾 張	"	表層多腐植層	"	"	"	"	"
東 和	"	"	"	"	"	壤質	"
松 山	"	表層腐植層	あり	"	"	"	"
尾 田	"	"	"	"	"	"	"
下大樹	"	"	なし	"	"	"	"
大 和	"	"	"	"	"	粘質	"
光知園	"	表層多腐植層	"	あり	"	強粘質	"
ベタン	"	表層腐植層	あり	なし	強粘質	"	" (風積) 崩積
崩和西	"	"	なし	"	壤質	壤質	"
崩和東	"	"	あり	"	"	"	"

土壌統名	色層序	腐植層序	礫、砂礫層を混在する砂層	酸化沈積物	土性		母材堆積式
					表土	次層	
上大樹	YR/YR	表層腐植層なし	あり	なし	製質	製質	非固結火成岩(沖積)
開進	"	表層多腐植層	なし	"	粘質	強粘質	" "
松山東	"	"	あり	"	製質	粘質	" "
振別	"	表層腐植層	"	"	"	強粘質	" "
平和	"	表層多腐植層	なし	あり	"	"	" "
野塚	YR/Y	表層腐植層	"	なし	"	製質	" "
日方	"	"	"	"	"	粘質	" "
萌和	"	表層多腐植層	"	あり	"	製質	" "
芽武南	YR/Y	表層腐植層	あり	なし	"	粘質	" "
石坂	Y/Y	表層腐植層なし	"	"	粘質	強粘質	" "
日方川	"	表層腐植層	あり	"	製質	製質	" "
当緑川	"	"	なし	あり	強粘質	粘質	" "
当緑	—	—	"	—	—	—	中間泥炭(集積)
アイボシマ	—	—	"	—	—	—	低位泥炭( )

(2) 土壌区一覽

土壌区名	簡略分級式	畑面積(a)	備考 (農耕可能面積)
晩成一晩成	III fne II t d w s	122	240 (4a)
晩成西一晩成西	III n II w f s e	50	90
美成一美成	III ne II f t s	903	1,770
更正一更正	III t ne II (w) f s	719	1,410
拓北一拓北	III f ne II (w)	826	1,620
尾張一尾張	III f n II w s e	50	90
東和一東和	III ne II (w) f	643	1,260
松山一松山	III d f m e II t	1,224	2,400
尾田一尾田	III d n II g (w) f i e	857	1,680
下大樹一下大樹	III f n e	107	210
大和一大和	III g n e II (w) f i	260	510
光和園一光和園	III w II f n e	413	810
ベタン一ベタン	III d i II t p w f n s e	275	540
萌和西一萌和西	III n e II t w f s	65	120
萌和東一萌和東	III f n e II t d i s	50	90
上大樹一上大樹	III t d (w) II g f n i s e	321	630
開進一開進	II p w f n e	551	1,080
松山東一松山東	III d w f n II e	199	390
振別一振別	II g f n e	245	480
平和一平和	III w n f II f e	81	150
野塚一野塚	III n II f e	39	60
日方一日方	III n II w f e	50	90



土 壤 区 名	簡略分級式	畑面積 (ha)	備 考
萌 和 - 萌 和	III wf II ne	842	1,650 (La)
芽 武 南 - 芽 武 南	II t d f ne	168	330
石 坂 - 石 坂	II p w f n	199	390
日 方 川 - 日 方 川	II t d g f i	413	810
当 緑 川 - 当 緑 川	N wa III p f II t n	214	420
当 緑 - 当 緑	N wa III f n II t	643	1,260
アイボンマ - アイボンマ	N wa III f n	65	120

## 2) 土壌統別説明

晩 成 統
-------

### (1) 土壌統の概説

#### A 土壌統の特徴

##### A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15cm内外、腐植含量は7%前後、土性はSLである。色は10YRで彩度2~3、明度2。礫なく、発達弱度の細粒状構造で、ち密度1.0前後で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)は5.8~6.0。下層の境界は明瞭である。(火山灰層)

第2層は厚さ10cm内外で、腐植含量は11%前後、土性はLが主である。色は10YRで彩度3~4、明度2~3。礫なく発達弱度の粒状構造で、ち密度は1.4~1.7で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.9~6.0。下層との境界は波状である。

第3層は10cm内外。腐植含量は6%前後で、土性はLである。色は10YRで彩度3~6、明度4。礫なく、発達弱度の粒状構造を呈し、細孔を含む、ち密度1.4~1.7で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)6.0前後、下層との境界は波状少々明瞭である。

第4層は厚さ15cm内外、腐植含量は2%以下で、土性はCLである。色は10YRで彩度3~4、明度4~5。礫なく、発達弱度の塊状構造で、細孔を含む。ち密度1.7前後で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)6.0前後、下層へは概ね波状漸変する。

第5層は厚さ10cm内外で、腐植含量は2%以下、土性はCのものが多い。色は2.5Y~10YRで彩度2~6、明度6~8である。半風化の小角礫を含み、発達弱度の塊状構造で、細孔を含む。ち密度1.9で中である。pH(H<sub>2</sub>O)5.8前後、下層へは波状漸変する。

第6層は地表から約55cm以下で、腐植を欠き、色は10YRで彩度1~8、明度7~8、ち密度2.5以上の第三紀層に由来する基岩であり、非有効土層となっている(ち密度2.9には至らないが、極めて未風化でやゝ堅密な基岩層であるため植物根は侵入し難い。)

#### 代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大橋町晩成 試坑 No207

第1層	0~13cm	腐植に富む黒褐(10YR2/2)のSL、礫なく、発達弱度の細粒状構造、細孔を含む、ち密度1.0で頗る疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.0 調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭(火山灰層)
第2層	13~32cm	腐植に頗る富む暗褐(10 <sup>3</sup> /4)のSL、礫なく、発達弱度の粒状構造、細孔を含み、ち密度1.4で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.0 調査時の湿りは湿、境界

		波状少々明瞭。
第3層	23~30 cm	腐植に富む褐色(10 YR <sup>4</sup> /6)のL、礫なく、発達弱度の粒状構造、細孔を含み、ち密度17で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.1、調査時の湿り湿、境界波状少々明瞭。
第4層	30~45 cm	腐植を欠く灰黄褐(10 YR <sup>5</sup> /4)のCL、礫なく、発達弱度の細塊状構造、細孔を含み、ち密度19で密、調査時の湿り湿、pH(H <sub>2</sub> O)6.1、境界波状漸変。
第5層	45~55 cm	腐植を欠く淡黄灰色(2.5 YR <sup>8</sup> /2)のLiC、半風化細小角礫を含み、発達弱度の塊状構造。細孔を僅かに含む。pH(H <sub>2</sub> O)5.9、調査時の湿り湿、境界波状少々明瞭。
第6層	55 cm~	淡黄褐灰色(10 YR <sup>8</sup> /1)のC、ち密度25で密、未風化基岩層。

代表的断面の分析成績

層位	深 さ cm	水分 %	粒 径 組 成 %				土 性	現地容積重 g	真 比 重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土						
1	0-13	3.1	28.1	32.7	14.8	24.5	SC	—	—	5.20	0.34	15
2	13-23	8.7	4.8	36.2	48.6	10.3	SiL	57.0	2.65	6.60	0.47	14
3	23-30	9.2	5.4	51.8	40.4	2.3	L	86.1	2.67	3.47	0.31	11
4	30-45	6.3	7.3	26.7	44.6	21.4	CL	—	—	—	—	—
5	45-55	4.6	13.4	14.1	44.7	27.8	LiC	—	—	—	—	—

層位	腐 植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽 和度%	磷酸吸収 係 数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	8.96	5.8	4.5	3.01	18.8	5.6	1.3	0.5	29.7	2.242	tr
2	11.4	6.0	4.7	2.36	22.8	2.6	1.2	0.8	11.5	2.363	tr
3	6.0	6.0	4.9	1.07	15.6	1.1	1.4	0.8	7.0	—	—
4	—	6.1	4.6	2.15	9.7	1.9	1.5	0.4	19.8	—	—
5	—	5.9	4.3	16.75	14.0	0.8	1.9	0.6	2.2	—	—

A-2 他の土層統との関係

本統に隣接する統としては晩成西統、美成統があるが、何れも下層の母材、堆積様式が異なるので、本統と区別される。

A-3 母材 非固結火成岩/半固結水成岩

A-4 堆積様式 風積(火山性土)/残積(第三紀層)

B 地 形

標高50m前後、5~8°の波状傾斜地。

C 気 候

春夏海霧の襲来があり、夏季は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、農業上良好な気象条件ではない。

D 植生及び利用状況

急傾斜地は山林となつているが、傾斜地は耕地に利用され、大麦、えん麦、馬鈴薯、ビート、牧草等が作付られている。

E 農業上の留意事項

傾斜地で、かつ土壌は耐侵蝕性に乏しいため、牧草の導入等、土壌侵蝕を軽減若しくは防止する作付を考える必要がある。

下層は堅密な層となつているため、透水性が悪く、加えて山地からの伏流水等により一時的に過湿になるおそれがあるので、排水渠等の設置も必要であろう。

F 分布

広尾郡大樹町晩成

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡略分級式
晩 成 — 晩 成	III f n e II t d s w

② 土壌区別説明

晩 成 — 晩 成
-----------

示性分級式

土 壤 生 産 力 可 能 性 等 級	表 効 土 層 厚 深 さ	有 効 土 層 含 量	耕 耘 土 質 粘 着 性	耕 耘 土 質 粘 着 性	耕 耘 土 質 粘 着 性	土 質 粘 着 性	透 水 性	保 湿 性	自 然 肥 沃 共	保 固 層	養 分 換 取 性	置 換 性	有 効 磷 量	酸 性 陰 離 子 吸 着 性	酸 性 陰 離 子 吸 着 性	傾 斜 度	傾 斜 度	侵 蝕 度	耐 蝕 性											
III	II	II	I	I	1	1	1	II	2	2	2	III	2	3	3	III	2	3	2	I	1	1	II	2	S	—	III	2	3	3
簡略分級式		III f n e II t d s w																												

A 土壌区の特徴

この土壌区は晩成統に属する。表土の厚さは30cm前後、有効土層は55cm前後で少々浅い。作土は細粒質であるが粘着性弱く、農具の使用に当つて支障はない。下層は細粒質で且つ、地表下55cm以下は堅密な層となつているので透水性が少々悪く、更に伏流水等の影響によつて一時的に過湿となるおそれがある。

保肥力は中庸、磷酸固定力は作土、心土(第2層)共極めて大である。弱酸性ではあるが、作土、心土共石灰飽和度が低く、自然肥沃度は低い方である。

養分は、石灰加里、苦土共に少々中庸に属するが、磷酸が少く、特に作土は磷酸に不足しており、同時に石灰にも不足している。

特殊の障害性は存在しない。

B 植生及び利用状況

急傾斜地は山林となつているが、傾斜地及び緩傾斜地は耕地として利用され、大麦、えん麦、馬鈴

薯、ビート、牧草等が作付されているが、取量はあまり高くない。

C 地力保全上の問題点

傾斜地であり、かつ土壌は耐侵蝕性に乏しいので、牧草の導入等、土壌侵蝕を軽減もしくは防止するような作付方策を考える必要がある。

下層が堅密な基岩層となつているため透水性が悪く、加えて山地からの伏流水等により一時的に過湿となるおそれがあるので、捕水渠等の設置が必要であろう。

D 分布

広尾郡大樹町晩成

調査及び記載責任者 高尾 欽 稍 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

晩 成 西 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ14~18cm、腐植含量は5~6%、土性はSLである。色は10YRで彩度2、明度2。際なく、発達弱度の細粒状構造を呈す。ち密度11~15で疎。pH(H<sub>2</sub>O)5.9~6.2、下層との境界は直線明瞭である(火山灰層)。

第2層は20cm前後で、腐植含量15%前後、土性はLが主である。色は10YRで彩度1~2、明度2である。際なく、発達弱度の粒状構造を呈し、細孔を含む。ち密度14前後で中pH(H<sub>2</sub>O)6.0前後。下層との境界は波状漸変である。

第3層は15cm前後、腐植含量10%内外、土性はLである。色は10YRで彩度3~6、明度2~5である。際なく、均質連結状構造を呈し、細小孔を含む。ち密度16前後で中。pH(H<sub>2</sub>O)5.9前後。下層との境界は波状漸変する。

第4層は地表下約50cm以下で、腐植含量2%以下、土性はCLである。色は10YR~2.5Yで彩度4、明度5~8である。際なく、発達弱度の塊状構造もしくは均質連結状構造を呈し、細孔を含む。ち密度20前後で中。pH(H<sub>2</sub>O)6.4前後。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町晩成 試坑 Na210

第1層	0~14cm	腐植に富む黒褐色(10YR <sup>2</sup> /2)のSL、際なく、発達弱度の細粒状構造、ち密度11で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.2、調査時の湿り半乾、層界直線明瞭(火山灰層)。
第2層	14~37cm	腐植に富む黒褐色(10YR <sup>2</sup> /2)のSiL、際なく、発達弱度の細粒状構造、細孔を含む、ち密度14で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.0調査時の湿り湿、層界波状漸変。
第3層	37~50cm	腐植を含む草褐色(10YR <sup>5</sup> /6)のL、際なく均質連結状構造、細小孔を含み、ち密度、pH(H <sub>2</sub> O)5.9、調査時の湿り湿、層界波状漸変。
第4層	50cm~	腐植を欠く淡黄色(2.5Y <sup>8</sup> /4)のCL、際なく、均質連結状構造、細孔を僅かに含み、ち密度20で中、pH(H <sub>2</sub> O)6.4、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0—14	3.7	40.4	36.6	17.6	5.4	SL	73.4	2.54	3.26	0.30	11
2	14—37	11.8	4.3	33.0	55.9	6.8	SiL	53.8	2.36	9.00	0.60	15
3	37—50	11.9	—	—	—	—	—	54.8	2.57	5.92	0.44	13
4	50—	10.1	—	—	—	—	—	—	—	2.24	0.22	10

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽 和度%	磷酸吸収 係 数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	5.6	6.2	5.2	0.25	16.0	9.8	0.7	0.2	61.0	882	91
2	15.5	6.0	4.9	1.00	37.6	10.0	1.1	0.2	26.5		tr
3	10.2	5.9	4.9	0.75	29.2	4.9	1.0	0.3	16.7		—
4	3.9	6.4	5.4	0.25	12.3	1.6	1.0	0.4	12.6		—

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接又は類似する統としては、晩成統、崩和統等があるが、晩成統とは下層の堆積様式が異なり、崩和統とは下層の母材が異なるので夫々本統と区別される。

A-3 母材 非固結火成岩/非固結水成岩

A-4 堆積様式 風積(火山性)/洪積世堆積

B 地形

標高20~30mの緩傾斜を有する段丘地。

C 気候

海洋の影響を受け、濃霧の襲来がある。一般に冷涼で、農期間の気温は低く、農業上不利な気象条件下にある。

D 植生及び利用状況

山林と耕地からなり、耕地には大麦、えん麦、大豆、菜豆、馬鈴薯等が作付られているが、収量は一般に低い。

E 農業上の留意事項

下層の透水性が少々不良気味のため、一時的に過湿となるおそれがあるから、明渠排水又は暗渠排水の設置は効果がある。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
晩成西—晩成西	III n II w f s e

② 土壌区別説明

晩成西統一晩成西区

示性分級式

土壌	有効	表土	耕土	表土	表土	表土	土壌	透	保	湿	然	保	固	土層	養	置	有	酸	化	物	障	傾	傾	入	侵	耐	耐					
産力	の	層	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の				
可能	性	厚	深	含	難	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性				
級	さ	さ	量	易	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一				
	t	d	g	p			w				f			n						i			s			e						
Ⅲ	I	I	I	I	1	1	1	Ⅱ	2	2	2	Ⅱ	2	2	1	Ⅲ	1	2	3	3	1	Ⅰ	1	1	Ⅱ	2	w	—	Ⅱ	1	3	1
簡略分級式		Ⅲn Ⅱwfse																														

A 土壌区の特徴

この土壌区は晩成西統に属する。作土の厚さは1.4～1.8cmで稍々中庸、有効土層は1mで深い。作土は雌阿岳、樽前山等に由来する火山灰からなり、粗粒質で粘着性弱く農具の使用は容易である。地表下50cm前後まで、黒褐～暗褐色の多腐植層で、その下は稍々粘質な層からなり、透水性が稍々悪い。一時的に過湿となることがある。

保肥力は作土は中庸で心土は大、燐酸固定力は作土は中庸であるが心土の多腐植層は強大である。塩基状態は作土は稍々良好と思われるが、心土は不良である。

養分は石灰、苦土は稍々中庸であるが、燐酸、加里の含量が少く、心土は特に燐酸、加里に欠乏している。

特殊の障害性は存在しないが、下層の透水性が稍々不良のため、土壌水分が多く、又一時的に過湿となるおそれがある。

B 植生及び利用状況

本区の面積の半ばは耕地として利用され、大麦、えん麦、大豆、菜豆、馬鈴薯等が作付られているが、収量は一般に低い。

C 地力保全上の問題点

下層の透水性が稍々悪い。過湿となるおそれがあるから、明渠或は暗渠排水の設置が望ましい。一般に土壌水分が多く、加えて初夏まで海霧の襲来等があるため地温の上昇が緩慢であり、作物は徒長による倒伏、出来遅れ等の傾向をたどり勝ちである。更に土壌中の有効態の加里含量が少く、苦土含量も必ずしも多くはないので、加里、燐酸、苦土の施肥量を増加して結実の促進を図り、窒素質肥料は初期生育の促進程度にとどめる等、施肥の合理化が必要である。

D 分布

広尾郡大樹町晩成

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

美 成 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ13~18cm、腐植含量5~6%、土性はSLが主である。色は10YRで彩度2~4、明度2である。礫を含まず、発達弱度の細粒状構造を呈し、ち密度1.0~1.6で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.5~6.2、下層との境界は概ね明瞭である(火山灰層)。

第2層は厚さ10cm前後で、腐植含量10%内外、土性はLが主である。色は10YRで彩度2~4、明度3~4、疎なく、発達弱度の粒状構造を呈し、細孔を含む。ち密度1.4~1.8で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)6.0前後、下層との境界は波状少々明瞭である。

第3層は厚さ10~20cm、腐植含量は5%以下で、土性はLが主である。色は10YRで彩度4~6である。礫を含まず、発達弱度の粒状構造と細塊状構造の複合構造を呈するものが多く、細、中孔を含む。ち密度1.6~1.8で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)6.0前後、下層との境界は波状漸変する。

第4層は厚さ15~30cm、腐植含量2%以下で、土性はL~CLである。色は10YRで彩度6~8、明度4~7である。礫を含まず、発達中程度の細塊状と塊状の複合構造を呈し、細孔を含む。ち密度1.6~2.2で疎~中である。pH(H<sub>2</sub>O)6.0前後、下層との境界は波状漸変する。

第5層は厚さ10~30cm、腐植を含まず、土性はL~CLである。色は10YRで彩度6~8、明度6~8である。礫を含まず、発達弱度の塊状構造を呈するものが多い。細孔を僅かに含み、ち密度1.9~2.4で中である。下層との境界は概ね波状明瞭なものが多い。

第6層は地表下60~90cm以下で、概ね火山降下物の堆積物からなるが、一部は礫層となつているところがある。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 広尾郡大樹町字美成 試坑 No.110

第1層	0~14cm	腐植に富む黒褐色(10YR 2/3)のSL、疎なく、発達弱度の細粒状構造、ち密度1.4で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.2前後、調査時の湿り半乾、境界直線明瞭(火山灰層)。
第2層	14~23cm	腐植に富む暗褐色(10YR 3/4)のSiL、疎なく、発達弱度の粒状構造、細孔を含み、ち密度1.4で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.9調査時の湿り半乾、境界波状少々明瞭。
第3層	23~35cm	腐植を含む灰黄褐色(10YR 5/4)のL、疎なく、発達弱度の粒状構造と細塊状構造の複合構造、細孔を含み、ち密度1.4で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.0、調査時の湿り湿、境界波状漸変。
第4層	35~50cm	腐植を欠く灰黄橙色(10YR 6/4)のL、疎なく、発達中程度の塊状構造、細孔を含み、ち密度1.6で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.0、調査時の湿り湿、境界波状漸変。
第5層	50~70cm	腐植を欠く明黄褐色(10YR 6/6)のCL、疎なく、発達中~強度の塊状構造、細孔を僅かに含み、ち密度2.1で中、調査時の湿り湿、境界波状明瞭。
第6層	70cm~	腐植を欠く橙色(7.5YR 8/8)のS~SL、疎なく単粒状構造ち密度2.1で中、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-14	2.7	37.6	46.6	11.4	4.4	SL	85.4	2.46	3.45	0.24	14
2	14-23	9.1	5.5	30.9	57.5	6.0	SiL	68.8	2.19	6.02	0.43	14
3	23-50	8.0	4.7	53.1	42.2	0	L	68.9	2.66	2.73	0.23	12
4	50-70	6.8	2.7	53.7	28.8	14.7	CL	91.7	2.66	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	磷酸吸収 係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	5.8	6.2	5.1	0.38	10.0	4.2	0.3	1.0	42.2	7.37	5.3
2	9.4	5.9	4.8	1.29	28.6	3.1	0.1	0.8	10.8	—	0.9
3	4.7	6.0	5.0	0.25	19.0	1.8	0.7	0.3	9.7	—	—
4	—	5.9	4.8	1.93	14.9	1.0	1.0	0.4	6.4	—	—

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接又は類似する統としては、崩和統、更正統、当縁統、松山統、松山東統等があるが、崩和統、松山東統、当縁統とは下層の堆積様式が異り、更正統は下層の母材（更正統は凝灰質物）が異り、又松山統は下層に礫層が出現するので夫々本統と区別される。

A-3 母材 非固結火成岩／非固結水成岩（砂岩質風化物）

A-4 堆積様式 風積（火山性）／洪積世堆積

B 地形

標高20～70mの略々平坦もしくは緩傾斜を呈する段丘性台地。

C 気候

春夏海霧の襲来があり、夏季は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、農業上良好な気象条件ではない。

D 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大麦、えん麦、大豆、菜豆、馬鈴薯、ビート、牧草等が栽培されている。収量は一般に低い方である。

E 農業上の留意事項

表土は軽しような火山灰土からなっているため耐侵蝕性に乏しく、特に季節風による風蝕の被害を受けているから、防風林の完備（幹線防風林の整備、計画的な伐採及び耕地防風林の設置、育成等）が必要である。風蝕により表土が一般に浅くなっているため、堆肥、緑肥を施用しながら逐次深耕して、作土層を深くすることが望ましい。

D 分布

広尾郡大樹町美成

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌（北海道立中央農業試験場）

昭和39年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
美 成 統 — 美 成 区	III ne II t s f



② 土壌区別説明

美成統一美成区

示性分級式

土	表	有	表	耕	(	(	土	(	(	自	(	(	養	(	(	障	(	傾	(	(	侵	(	(	耐	耐	
製	効	土	表	表	表	透	保	湿	保	固	土	置	有	酸	化	物	自	傾	人	侵	耐	耐	風	水	風	風
生	土	土	土	土	土	然	層	分	換	の	性	態	学	理	的	的	斜	為	水	風	風	風	風	風	風	
産	土	土	土	土	土	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
力	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
可	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
能	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
性	厚	含	難	土	着	乾	沃	状	豊	含	量	度	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性
等	深	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性
級	さ	さ	量	易	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	t	d	g	p		W		f		n						i	S	S	e							
Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	E	—	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	
簡略分級式	Ⅲ ne Ⅱ ts f																									

A 土壌区の特徴

この土壌区は美成統に属する。作土の厚さは12~15cmで少々浅い。有効土層は1m以上である。表土は粗粒質で、粘着性弱く農具の使用は容易であるが、反面耐侵蝕性に乏しく、風蝕を受けている。保肥力は心土は大きい、作土は比較的小さく、磷酸固定力も極めて大きく、作土は中庸である。作土の塩基状態は中庸であるが、下層土のそれは不良であり、自然肥沃度は低い方である。養肥分は石灰は中庸、加里は少々多いが、苦土、磷酸に欠乏している。心土は何れの養分も少い。特殊の隘害性は存在しない。

B 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大麦、えん麦、大豆、菜豆、馬鈴薯、ビート、牧草等が作付けられている。収量は中庸もしくは低位である。

C 地力保全上の問題点

土壌は粗粒、軽しようで、下層の透水性も良好なため春季一時的に表土が乾燥し、季節風の襲来によつてしばしば風蝕を受けるから幹線防風林の完備、耕地防風林の育成整備等の風蝕防止対策が必要である。

作土は粗粒のため保肥力が少々小さく、養肥分の流亡損失し易い土壌と考えられるので堆厩肥、緑肥等有機物の施用を行いつつ逐次深耕して作土層を深くすることが望ましい。

この場合下層は磷酸、石灰、苦土等に欠乏しているため、これらの施用量を増加する必要がある。尚、トラクター等による急激な深耕は一時収量が低減するおそれがあるので注意を要する。

D 分布

広尾郡大樹町美成、晩成  
 調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)  
 昭和39年3月31日

更 正 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ12~18cmで、腐植含量5%内外、土性はSLである。色は10YRで彩度2~3、明度2~3である。礫を含まず、発達弱度の細粒状構造或は単粒構造を呈す。ち密度7~10で頗る疎、pH(H<sub>2</sub>O)5.5~6.3。下層と境界は直線明瞭である(火山灰層)。

第2層は、風蝕の被害の大きいところは欠除しているが、厚さ8~10cm。腐植含量7%内外、土性はLが主である。色は10YRで彩度2~4、明度3で、礫を含まず、発達弱度の粒状構造と細塊状の複合構造を呈す。ち密度15~18で疎、pH(H<sub>2</sub>O)5.8前後。下層との境界は波状時々明瞭である。

第3層は(第2層は風蝕により欠除しているところは作土直下に存在し第2層となる)。厚さ10~20cmで、腐植2%以下土性はL~SLである。色は10YRで彩度4~6、明度3~6である。礫を含まず、発達弱度の塊状構造を呈す。ち密度15前後で疎、pH(H<sub>2</sub>O)6.0前後。下層の境界は波状漸変する。

第4層(第2層が風蝕により欠除しているところは第3層となる)は厚さ13~25cmで、腐植を含まず、土性はSL~Sである。色は10YRで彩度6~8、明度5~7である。礫なく、発達弱度の塊状構造を呈し、ち密度15~18で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)6.0~6.5、下層との境界は波状明瞭である。

第5層は(第2層が風蝕により欠除しているところは第4層)地表下50~70cm以下で、腐植を欠き、土性はSである。色は7.5YRで彩度6、明度7である。礫なく、単粒状構造を呈し、ち密度は20~24で中である。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 広尾郡大樹町字更正 試坑 No.75

第1層	0~18cm	腐植を含む~富む、暗褐色(10YR <sup>3</sup> /3)のSL、礫なく、発達弱度の細粒状構造及び単粒構造、細孔に富む、ち密度12で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.2、調査時の湿り乾、層界直線明瞭(火山灰層)。
第2層	18~28cm	腐植に富む暗褐色(10YR <sup>3</sup> /4)のL、礫なく、発達弱度の粒状構造と細塊状構造の複合構造、細孔に富み、ち密度16で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.9、調査時の湿り半乾、層界波状時々明瞭。
第3層	28~37cm	腐植を欠く灰黄褐色(10YR <sup>5</sup> /4)のSL、礫なく、発達弱度の細塊状構造、細孔に富み、ち密度14で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.0、調査時の湿り湿、層界波状漸変。
第4層	37~50cm	腐植を欠く黄褐色(10YR <sup>5</sup> /8)のLS、礫なく、発達弱度の塊状構造、細小孔を含む、ち密度15で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.5、調査時の湿り湿、層界波状明瞭。
第5層	50cm~	腐植を欠く明黄橙色(7.5YR <sup>7</sup> /6)のS、単粒状構造ち密度20で中。

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0—18	3.3	30.5	46.3	14.1	9.2	SL	70.6	2.43	2.93	0.21	14
2	18—25	8.2	12.3	50.1	37.6	0	L	64.6	2.42	4.57	0.32	14
3	25—37	6.4	13.2	53.0	33.8	0	SL	—	—	1.20	0.15	8
4	37—50	10.0	27.1	69.1	3.7	0	LS	—	—	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度	置換容量	置換性塩基me/100g			石灰飽 和度%	磷酸吸収 係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl	Y <sub>1</sub>	me/100g	CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	5.1	6.2	5.2	0.50	10.6	3.4	0.5	0.2	32.0	8.42	2.8
2	7.9	5.9	4.9	0.75	19.0	2.4	0.4	0.3	12.6	—	tr
3	2.1	6.0	4.9	0.75	12.9	1.6	0.4	0.2	12.4	—	—
4	—	6.5	5.1	0.50	18.4	0.6	0.7	0.2	3.0	—	—

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接又は類似する統としては当緑統、芽武南統、崩和統、美成統等があるが、当緑統は低位泥炭であり、芽武南統は下層が河川沖積であり、崩和統は下層の堆積様式並びに腐植層序の相違により夫々本統と区別される。又美成統とは、堆積様式を同じくするが、下層の母材が異なるので本統と区別される。

A-3 母材 非固結火成岩/非固結水成岩(凝灰質)

A-4 堆積様式 風積(火山性)/洪積世堆積

B 地形

標高20~70mの緩波状性傾斜を有する段丘性台地。

C 気候

春夏海霧の襲来があり、夏は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、農業上好ましくない気象条件下にある。

D 植生及び利用状況

一部植林地となつているが、大部分は耕地として利用され、大麦、えん麦、大豆、菜豆、小豆、馬鈴薯、ビート、牧草その他の飼料作物が作付られている。

E 農業上の留意事項

前述の美成統にも増して風蝕を受けるので、幹線防風林、耕地防風林の一層の完備が必要である。特に沿岸地域は防風防霧林としての山林の保護が大切である。

本統は元来表土の比較的浅いところであるが、風蝕の影響によつて極端に浅くなつているところもかなり見受けられるので、堆厩肥、緑肥等有機物の施入による地力の増進が肝要と思われる。

F 分布

広尾郡大樹町更正

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
更正統一更正区	III t n e II W f s

② 土壤区別説明

更正統一更正区

示性分級式

土	表	有	表	耕	(	(	土	(	(	自	(	(	養	(	(	(	障	(	傾	(	侵	(	(	
壤	効	効	土	土	表	表	土	透	保	湿	然	保	固	土	置	有	酸	化	物	自	傾	人	侵	耐
生	土	土	土	土	土	土	地												学	理	斜	為	水	
産	の	の	の	の	の	の	風	水	水	潤	肥	肥	定	塩	の	石	苦	加	磷	害	的	的	然	風
力	の	の	の	の	の	の	乾	水	水	沃	沃	沃	状	基	灰	土	里	酸	害	障	障	傾	傾	蝕
可	の	の	の	の	の	の	乾																	蝕
能	厚	深	性	性	性	性	性	性	性	度	力	力	態	量	"	"	"	度	性	性	斜	向	斜	性
性	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等
級	さ	さ	量	易	易	易	湿	湿	湿	度	度	度	否	否	否	否	否	否	性	性	斜	斜	蝕	
	t	d	g	p			W			f			n				i		S		N		e	
	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	(Ⅰ)	Ⅰ	Ⅰ	(2)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ
	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	(Ⅰ)	Ⅰ	Ⅰ	(2)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	
簡略分級式	Ⅲ t n e											Ⅱ(W) f s												

A 土壤区の特徴

この土壤区は更正統一に属する。作土は風蝕を受けて一般に浅く15 cm以下のところが多い。有効土層は1 m以上で深い。表土は粗粒質の火山灰土からなり、粘着性弱く農具の使用は容易である。下層土は凝灰質物に由来し、中粒質もしくは粗粒質で、透水性は良好である。このため一時的に表土が乾燥し風蝕の被害を受けている。

作土は保肥力稍々小さく、磷酸固定力中庸で、塩基状態は中庸以下である。心土は保肥力中庸であるが一般に磷酸固定力が大きく、塩基状態も不良である。

養肥分は作土、心土共、石灰、苦土、磷酸、加里が少く、瘠薄な土壤である。

特殊な障害性はない。

B 植生及び利用状況

一部山林又は採草放牧地となつているが、大部分は耕地として利用され、大麦、えん麦、馬鈴薯、大豆、菜豆、小豆、亜麻、ビート、牧草等の飼料作物が作付られている。

一般に粗放経営なので、収量は高くない。

C 地力保全上の問題点

本土壤区は本調査地区中風蝕の被害を最も大きく受けるところである。このため幹線防風林の整備強化は勿論のこと、耕地防風林の完備育成が必要であり、特に海岸線一帯は防霧林をも含めた防風林の育成、保護が必要である。

風害による作土の飛散によつて、一般に表土が薄く、甚だしいところは灰黄褐色の下層土が相当部分作土に混入され、低位生産の原因となつている。加えて作土は自然肥沃度の稍々低い粗粒質火山灰土であり、下層も地味瘠薄な凝灰質物からなつているため、堆厩肥、緑肥等有機物の施用、施肥の合理化、経営形態の転換による作付体系の再検討等によつて、良好な作土の造成と地力の増進に努めることが望ましい。

このためには良好な牧草畑の造成、拡大。堆厩肥、緑肥等有機物を附加しながら漸次深耕して作土

層の深化を図ること（この場合は急激な深耕を行うと一時減収を招くおそれがあるので注意を要する）。この場合下層は燐酸固定力が大きく、苦土にも欠乏しているので熔成燐肥、苦土入燐酸肥料の施用が望ましい。なお当地区調査時苦土欠乏症状を呈する作物が相当見られ、特に海岸地帯に向う程多い傾向にあつた。

D 分布

広尾郡大樹町更正、芽武、萌和、美成

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌（北海道立中央農業試験場）

昭和39年3月31日

拓	北	統
---	---	---

(1) 土壌統概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15cm内外、土性はSLである。腐植含量3.2%、色は10YRで彩度2、明度2である。礫なく、単粒状構造、孔隙なし、ち密度1.5で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.9下層との境界は判然である。

第2層は厚さ7cm内外、土性はLである。腐植含量7.9%、色は10YRで彩度3、明度2である。礫なく、発達弱度の塊状構造、細孔あり、ち密度1.7で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.9、下層との境界は判然である。

第3層は厚さ8cm内外、土性はCLである。腐植含量2.6%、色は10YRで彩度4、明度3である。礫なく発達弱度の塊状構造、細孔あり、ち密度1.5で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.7、下層との境界は漸変である。

第4層は厚さ15cm内外、土性はSLである。腐植を欠き、色は10YRで彩度6、明度4である。礫なく発達弱度の塊状構造、細孔あり、ち密度1.7で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.7、下層との境界は漸変である。

第5層は15cm内外、土性はSLである。腐植を欠き、色は10YRで彩度6、明度6である。礫なく、発達中程度の塊状構造あり、ち密度2.4で中である。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町拓北 試坑 N1227

第1層	0~15cm	腐植あり、黒褐(10YR <sup>3</sup> /2)のSL、単粒状構造、孔隙なし、ち密度1.5で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.9、層界判然。
第2層	15~22cm	腐植を含む黒褐(10YR <sup>2</sup> /3)のL、礫なく、発達弱度の塊状構造、細孔あり、ち密度1.7で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.9、層界判然。
第3層	22~30cm	腐植あり、暗褐(10YR <sup>3</sup> /4)のCL、礫なく発達弱度の塊状構造、細孔あり、ち密度1.5で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.7、層界漸変。
第4層	30~45cm	腐植を欠く、褐(10YR <sup>4</sup> /6)のSL、礫なく発達弱度の塊状構造、細孔あり、ち密度1.7で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.7、層界漸変。
第5層	45~60cm	腐植を欠く、明黄褐(10YR <sup>6</sup> /5)のSL、礫なく発達中程度の塊状構造、ち密度2.4で中。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 $\rho$	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0—15	3.2	50.1	33.8	12.5	3.6	SL	—	—	18.6	0.15	12
2	15—22	7.7	6.1	42.2	37.5	13.9	L	—	—	4.56	0.36	13
3	22—30	6.4	6.1	52.1	23.9	17.9	CL	—	—	1.50	0.26	8
4	30—45	6.4	22.4	45.5	18.5	13.6	SL	—	—	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収 係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	3.2	5.9	4.9	0.75	7.2	2.92	0.52	0.31	40.4	603	tr
2	7.9	5.9	5.0	0.50	17.9	3.44	0.54	0.54	19.2	1975	0.6
3	2.6	5.7	4.6	1.50	14.1	1.42	0.53	0.36	10.1	1709	tr
4	—	5.7	4.5	3.50	13.1	0.72	1.42	0.38	5.5	1553	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては大和統、尾田統、平和統等があるが母材、堆積様式が異なるのでそれぞれ本統と区分される。

A-3 母材 非固結火成岩

A-4 堆積様式 風積

B 地形

平坦～緩傾斜

C 気候

夏の気温は冷涼で、春夏濃霧の影響を受ける。秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、農業上不利な気候条件下にある。

D 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、豆類、馬鈴薯、ビート、牧草等が栽培されている。収量はやや低い方である。

E 農業上の留意事項

表土は軽しような火山性土からなっているため耐侵蝕性に乏しく、特に季節風による風蝕の被害を受けているから、防風林の完備（幹線防風林の整備、計画的な伐採及び耕地防風林の設置、育成等）が必要である。風蝕により表土が一般に浅くなっているため、堆肥、緑肥を施用しながら逐次深耕して、作土層を深くすることが望ましい。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 菊地 晃二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覽

土 壤 区 名	簡略分級式
拓北統一拓北区	III f n e II (IV)

② 土壌区別説明

拓北統一拓北区

示 性 分 級 式 (畑)

土	表	有	表	耕	土	自	養	障	災	傾	侵																								
製	効	表	表	表	透	保	湿	保	固	土	置																								
生	土	土	土	土	然	層	分	換	効	有	微																								
産	土	土	土	土	の	性	態	量	有	物	增																								
力	の	肩	の	の	乾	水	潤	肥	定	塩	の																								
可	の	際	粘	土	沃	基	灰	土	里	酸	要																								
能	の	土	土	土	沃	基	灰	土	里	酸	要																								
性	厚	含	難	着	硬	沃	状	豊	含	素	度																								
等	深	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性																								
級	さ	さ	量	易	湿	度	否	性	性	斜	蝕																								
Ⅲ	t	d	g	p	(w)	f	n	i	a	S	e																								
	I	I	I	I	1	1	1	2	Ⅲ	3	2	2	Ⅲ	3	2	1	3	-	2	I	1	1	I	1	1	I	1	-	-	Ⅲ	2	1	3		
簡略分級式		Ⅲ f n e		Ⅱ(w)																															

A 土製区の特徴

この土製区は拓北統に属する。表土の厚さは25cm以上、有効土層は1m以上で深い。土性は壤質で農具の使用は容易である。透水性大、保水性中で過干のおそれがある。保肥力小、固定力小、自然肥沃度は低い。石灰、苦土、加里、磷酸少ない。酸度は中、養分は少ない。障害性はない、風蝕のおそれが多い。地形は平坦～波状性緩傾斜地である。

B 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大麦、えん麦、大豆、菜豆、馬鈴薯、ビート、牧草等が栽培されている。収量は一般に低い方である。

C 地力保全上の問題点

土製は粗粒、軽しうで、下層の透水性も良好なため春季一時的に表土が乾燥し、季節風の襲来によつてしばしば風蝕を受けるから幹線防風林の完備、耕地防風林の育成整備等の風蝕防止対策が必要である。

作土は粗粒のため保肥力が稍々小さく、養肥分の流亡損失し易い土製と考えられるので堆肥、緑肥等有機物の施用を行いつつ逐次深耕して作土層を深くすることが望ましい。

この場合下層は磷酸、石灰、苦土等に欠乏しているの、これらの施用量を増加する必要がある。尚、トラクター等による急激な深耕は一時収量が低減するおそれがあるので注意を要する。

D 分布

広尾郡大樹町拓北、興農

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

尾 張 統

(1) 土製統の概説

A 土製統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20cm内外、土性はS Lである。腐植含量3%、色はY Rで彩度2、明度2～3であ

る。礫なく、単粒状構造、孔隙なし、ち密度1.2で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.7、下層との境界は明瞭である。

第2層は厚さ10cm内外、土性はCLである。腐植含量14.3%、色はYRで彩度2、明度1である。礫なく発達中度の粒状構造あり、細孔、小孔あり、ち密度1.6で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.5、下層との境界は判然である。

第3層は厚さ15cm内外で、土性はLである。腐植含量14.2%、色はYRで彩度4、明度3、礫なく発達弱度の粒状構造あり、細孔、小孔あり、ち密度1.6で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.6、下層との境界は漸変である。

第4層は厚さ25cm内外で土性はSLである。腐植を欠き、色はYRで、彩度8、明度5である。礫なく発達中度の塊状構造あり、細孔含み、小孔あり、ち密度1.9で中、下層との境界は漸変である。

### 代表的断面形態

(所在地) 広尾郡広尾町尾張 試坑 No.115

第1層	0~20cm	腐植あり黄褐灰(10YR <sup>4</sup> /2)のSL礫なく、単粒状構造、孔隙なし、ち密度1.2で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.7、層界明瞭。
第2層	20~30cm	腐植に富む、黒褐(10YR <sup>1</sup> /2)のCL、礫なく発達中の粒状構造、細孔、小孔あり、ち密度1.6で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.5、層界判然。
第3層	30~45cm	腐植に富む暗褐(10YR <sup>3</sup> /4)のL、礫なく発達弱度の粒状構造、細孔、小孔あり、ち密度1.6で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.6、層界漸変。
第4層	45~70cm	腐植を欠く明褐(7.5YR <sup>5</sup> /8)のSL、礫なく発達中度の塊状構造、細孔、小孔あり、ち密度1.9で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.8、層界漸変。

### 代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-20	2.2	57.6	22.7	17.0	2.7	SL	68.3	2.40	1.72	0.15	11
2	20-30	9.0	5.1	31.6	44.8	18.5	CL	46.5	2.35	8.25	0.56	15
3	30-45	10.4	7.6	50.4	34.6	7.4	L	47.8	2.39	5.73	0.46	13
4	45-70	6.4	20.1	53.9	16.9	9.1	SL	59.7	2.58	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	燐酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	3.0	5.7	4.6	1.75	6.9	1.53	0.63	0.29	22.1	647	0.8
2	14.3	5.5	4.4	4.25	34.9	4.20	2.02	0.33	12.0	2598	tr
3	10.2	5.6	4.6	2.00	28.2	0.93	0.94	0.32	3.2	2730	tr
4	—	5.8	4.8	0.75	19.5	0.53	1.60	0.32	2.7	1777	tr

#### A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては中紋別統、尾張南統、松山統らがあるが尾張南統、松山統とは母材、堆積積層式が異なり、中紋別統とは土壌の乾湿が異なるので区分される。

#### A-3 母材 非固結火成岩

#### A-4 堆積様式 風積

#### B 地形 平坦～緩傾斜



C 気 候

夏季海霧があり一般に冷涼である。秋季は比較的好天に恵まれるが同時に気温の低下の較差が大きくしばしば冷害をうける。

D 植生及び利用状況

一部分林地、放牧地として利用されている。耕地化されているところでは牧草、えん麦、ビート、馬鈴薯が作付けられている。収量は中庸である。

E 農業上の留意事項

養分が少ないから塩基や堆厩肥の補給が大切である。また深耕時には下層の磷酸固定力が大きいから磷酸肥料の多施が必要である。風蝕のおそれも大きいから防風林の完備も必要である。

F 分 布

広尾郡大樹町尾張

調査及び記載責任者 菊 地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
尾張統一尾張区	III f n II w s e

② 土壌区別説明

尾 張 統 一 尾 張 区

示 性 分 級 式 (畑)

土表有表耕	土	自	養	障	災	傾	侵
壤 効土 表表表 透保湿 保固土 置 有微酸 有物 増地 自傾人 侵耐耐	生土 紜土土の地 然 層分換 " " 効 害理 冠す 斜 為 水風	産土 の の 乾の水水潤肥定塩の石苦加磷 害質 害の の 蝕	力の層 のの 粘 基 灰土里酸要 の 障 の 傾方傾 蝕蝕	能 の 土 沃 状 豊含 " " 素度 無性 度度 斜向斜 度性性	性 厚 含難 着の乾 沃 状 豊含 " " 素度 無性 度度 斜向斜 度性性	等 深 性性 さ 性性度 力力態 量 " " 素度 無性 度度 斜向斜 度性性	級 さ さ 量 易 湿 度 否 性 性 斜 蝕
III	t d g p	w	f	n	i	a	S e
	I I I I	1 1 1	I I 2 2	III 3 1 3	III 3 2 2 3	— 2 I 1 1 I 1 1	II 2 — II 2 2 2
簡略分級式		III f n II w s e					

A 土壌区の特徴

この土壌区は尾張統に属する。表土の厚さは2.5 cm以上、有効土層は1 m以上で深い。表土の土性は壤質で農具の使用に当つて抵抗は少ない。透水性中、保水力中で過湿のおそれがある。保肥力小、固定力小、自然肥沃度は低い。石灰、磷酸、苦土、加里中、酸度中で養分は少ない。障害性はない。

B 植生及び利用状況

一部林地、放牧地として利用されている。耕地化されているところでは、牧草、えん麦、ビート、馬鈴薯が作付けられている。収量は中庸である。

C 地力保全上の問題点

養分が少なく塩基や堆厩肥の補給が大切である。また深耕時には下層の磷酸固定力が大きいから磷

肥料の多施が必要である。風蝕のおそれ大きいから防風林の完備が必要である。

D 分布

広尾郡大樹町開進

調査及び記載責任者 菊地 晃二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

東 和 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20cm内外、土性はSLである。腐植含量8.2%、色は10YRで、明度2、彩度2である。礫なく単粒状構造あり、孔隙なし、ち密度20で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.6、下層との境界は判然である。

第2層は厚さ10cm内外、土性はLである。腐植含量4.3%、色は10YRで彩度1、明度2である。礫なく発達中度の粒状構造あり、細孔あり、ち密度18で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.5、下層との境界は漸変である。

第3層は厚さは20cm内外、土性はLである。腐植含量10.0%、色は10YRで彩度3、明度3である。礫なく発達弱の塊状構造あり、細孔あり、ち密度18で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.5%、下層との境界は漸変である。

第4層は厚さ20cm内外、土性はLSである。腐植を欠く、色は7.5YRで彩度6、明度5である。礫なく発達弱度の塊状構造あり、細孔あり、ち密度18で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.5、下層との境界は漸変である。

第5層は70cm以下で、土性はLSである。腐植を欠き、色は10YRで明度6、彩度6である。礫なく発達中度の塊状構造、細孔、小孔あり、ち密度24で中、細孔、小孔あり、ち密度24で中である。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町東和 試坑 No.217

第1層	0~20cm	腐植を含む黒褐(10YR <sup>2</sup> / <sub>2</sub> )のSL、礫なく単粒状構造、孔隙なし、ち密度20で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.6、層界判然。
第2層	20~30cm	腐植に富む、黒褐(10YR <sup>2</sup> / <sub>1</sub> )のL、礫なく発達中度の粒状構造、細孔あり、ち密度18で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.5、層界漸変。
第3層	30~50cm	腐植に富む、暗褐(10YR <sup>3</sup> / <sub>3</sub> )のL、礫なく発達弱度の塊状構造、細孔あり、ち密度18で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.5、層界漸変。
第4層	50~70cm	腐植を欠く、明褐(7.5YR <sup>5</sup> / <sub>6</sub> )のLS、礫なく発達弱度の塊状構造、細孔あり、ち密度18で中、pH(H <sub>2</sub> O)6.0、層界漸変。
第5層	70cm~	腐植を欠く、明黄褐(10YR <sup>6</sup> / <sub>6</sub> )のLS、礫なく、発達弱度の塊状構造、細孔、小孔あり、ち密度24で中。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒 径 組 成 %				土 性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土						
1	0—20	3.7	6.0	60.8	23.1	10.1	S L	56.1	2.04	4.73	0.34	14
2	20—30	5.7	17.9	37.2	35.4	9.5	L	49.1	2.41	12.64	0.83	15
3	30—50	10.1	7.1	46.8	34.3	11.8	L	—	—	6.29	0.50	13
4	50—70	8.0	34.2	52.5	3.9	9.4	L S	—	—	—	—	—

層位	腐 植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽 和度%	磷酸吸収 係 数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	8.2	5.6	4.5	2.50	14.6	4.03	0.31	0.12	27.6	878	4.8
2	21.8	5.5	4.5	5.00	41.0	4.15	0.57	0.24	10.1	2,691	tr
3	10.0	5.5	4.7	17.5	23.1	1.85	0.56	0.23	8.0	2,540	tr
4	—	6.0	5.3	0.25	13.1	3.63	0.59	0.37	27.7	2,157	2.8

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては大和統、更正統、崩和統等があるが大和統、崩和統とは母材、堆積様式が異なり、更正統とは腐植含量の差があるので本統と区分される。

A-3 母材 非固結火成岩

A-4 堆積様式 風積

B 地 形 平坦

C 気 候

春夏海霧があり、夏季は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが同時に気温が低下し、農業上良好な気象条件ではない。

D 植生及び利用状況

大部分が耕地として利用され、大麦、えん麦、ビート、豆類、馬鈴薯、牧草等が栽培されている。収量は中庸である。

E 農業上の留意事項

作土、心土共に養分含量少く、作土は粗粒質で保肥もあまり大きくないため、養肥分が流亡損失し易いと考えられる。加えて風蝕により作土の一部が飛散しているところもあるので堆肥等の有機物を投入しつつ漸次深耕して、作土層を深めることが望ましく、更に加里、苦土等の施肥量を増量することが必要である。尙急激な深耕は一時的に減収を招くおそれがあるので改良資材（磷酸、石灰）の投入、施肥量の増加等の注意が必要である。

F 分 布

広尾郡大樹町東和

調査及び記載責任者 菊 地 晃 二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
東和統一東和区	II me II(w) f

② 土壌区別説明

東 和 統 一 東 和 区

示 性 分 級 式 (畑)

土表有表耕	土	自	養	障	災	傾	侵	
襲効土表表	透保湿	保固土	置	有微酸	有物	増地	自傾人	侵耐
生土	耘土	地	然	層分換	効	害理冠	す	斜
産土の	風	の	性	態量	物的	水	然	為
力の層	の乾	の水水	潤肥肥定	塩の石苦加	磷	害質障	の	蝕
可の	疎	粘土	基	灰土里	酸要	の	危危	傾方傾
能厚	含難	着硬乾	沃	状豊含	素度	無性	度度	斜向斜
性等	深	性性	性性	度力力	態量	素度	無性	度度
等	性性	性性	度力力	態量	素度	無性	度度	斜向斜
級さ	さ量	易	湿	度	否	性	性	斜
III	t d g p	(W)	f	n	i	a	S	e
I	I I I I	1 1 1	II 2 2(2)	II 2 2 3	III 2 3 3 2	- 2 I 1 1	I 1 1 I 1	1 1 — III 2 1 3
簡略分級式		III n e		II(w) f				

A 土壌区の特徴

この土壌区は東和統に属する。表土の厚さは25cm以上、有効土層は1m以上で深い。土性は壤質で農具の使用は容易である。透水性大、保水力小で過干のおそれがある。保肥力中、固定力小、自然肥沃度は中庸である。石灰、磷酸中、加里、苦土小、酸度中、養分は少ない。障害性はない。風蝕のおそれは大きい。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大麦、えん麦、ビート、豆類、馬鈴薯、牧草等が栽培されている。収量は中庸である。

C 地力保全上の問題点

作土、心土共養分含量少く作土は粗粒質で保肥力あまり大きくないため、養分が流亡損失し易いと考えられる。加えて風蝕により作土の一部が飛散しているところもあるので、堆厩肥、緑肥等有機物の投入を図りつつ漸次深耕して、作土層を深めることが望ましく、更に加里、苦土等の施肥量を増量することが必要である。

尚、急激な深耕は一時的に減収を招くおそれがあるので、改良資材(磷酸、石灰)の投入、施肥量の増加等の注意が必要である。

D 分布

広尾郡大樹町東和

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

松 山 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ14~18cm、腐植含量6%内外、土性はSLである。色は10YRで彩度2~3、明度2~3である。礫は含まず、発達弱度の細粒状構造を呈し、ち密度8~18で頗る疎~疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.7~6.1、下層との境界は直線明瞭である(火山灰層)。

第2層は厚さ5~10 cmで、腐植含量7%内外、土性はSL~Lである。色は10 YRで彩度1~3、明度1~3である。礫なく、発達弱度の粒状構造で、細小孔を含む、ち密度15~18で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.9前後。下層との境界は波状少々明瞭である。

第3層は厚さ15~25 cmで、腐植含量3%内外、土性はLが主である。色は10 YRで彩度4~6、明度3~5である。礫なく、発達弱度の細塊状構造を呈し、細小孔を含む、ち密度15~18で疎。pH(H<sub>2</sub>O)6.0前後。下層との境界は波状漸変である。

第4層は厚さ10~15 cmで、腐植含量は2%以下、土性はLが主である。色は10 YRで彩度4~8、明度4~6である。未風化細小円礫を含み、発達弱度の塊状構造を呈す。細小孔を含み、ち密度16~21で疎~中である。pH(H<sub>2</sub>O)6.1前後。下層との境界は不規則漸変である。

第5層は概ね45~50 cm以下で、巨礫、大中小円礫を主体とする礫層である。

### 代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町字松山 試坑 No.12

第1層	0~18 cm	腐植に富む黒褐色(10 YR <sup>3</sup> /2)のSL、礫なく、発達弱度の細粒状構造、ち密度13で疎。pH(H <sub>2</sub> O)6.0、調査時の湿り乾、層界直線明瞭(火山灰層)。
第2層	18~23 cm	腐植に富む黒褐色(10 YR <sup>3</sup> /2)のSL、礫なく、発達弱度の細粒状構造、細小孔を含む、ち密度15で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.9、調査時の湿り半乾。層界波状少々明瞭。
第3層	23~40 cm	腐植を含む褐色(10 YR <sup>4</sup> /4)のL、礫なく、発達弱度の細塊状構造、細小孔を含む、ち密度18で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.1、調査時の湿り半湿、層界波状漸変。
第4層	40~50 cm	腐植を欠く灰黄橙(10 YR <sup>6</sup> /4)のL、未風化細小円礫を含み、発達弱度の塊状構造、細小孔を含む、ち密度21で中、pH(H <sub>2</sub> O)6.1、調査時の湿り湿、層界不規則漸変。
第5層	50 cm~	未風化巨大中小円礫を主体とする礫層。

### 代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-18	3.9	28.4	42.1	22.9	6.6	SL	77.9	2.59	3.65	0.25	15
2	18-23	4.3	27.5	43.4	23.8	5.3	SL	82.9	2.61	3.86	0.27	14
3	23-40	5.2	9.4	50.3	37.0	3.2	L	75.6	2.75	1.86	0.17	11
4	40-50	3.7	16.3	37.1	31.9	14.7	L	111.7	2.76	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽 和度%	磷酸吸収 係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	6.3	6.0	4.9	1.25	12.9	3.4	0.4	0.4	26.6	98.2	16.2
2	6.7	5.9	4.8	1.50	13.9	3.2	0.1	0.3	23.3	—	6.6
3	3.2	6.0	4.9	0.75	13.6	1.6	0.4	0.5	11.5	—	—
4	—	6.1	4.6	2.50	10.4	1.3	0.4	0.3	13.4	—	—

### A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接又は類似する統としては、松山東統、日方川統、崩和統、美成統等があるが、松山東統、日方川統、芽武西統は下層が沖積のため堆積様式が異なるので本統と区別され、崩和統は堆積様式、腐植層序が本統と異なる。美成統は下層が凝灰質物からなり、美成統とは礫層の有無により夫々区別される。

### A-3 母材 非固結火成岩／非固結水成岩

### A-4 堆積様式 風積(火山性)／洪積世堆積

### B 地形

標高 30～60m の略々平坦な段丘性台地。

### C 気候

春夏海霧の影響を被り、夏季は冷涼である。秋季は比較的好天となるが、同時に気温が低下し、農業上不利な気象条件下にある。

### D 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大豆、菜豆、小豆、馬鈴薯、ビート、亜麻、牧草等が栽培されている。収量は稍々中庸が低位である。

### E 農業上の留意事項

現在耕地防風林の設置により、風害はかなり軽減されているが、一部耕地防風林の不完全なところがあるので、その整備が必要である。

以前の風蝕により表土の浅いところがあり又、一般に作土はあまり深くなく、有機物が稍々不足しているため、堆肥、緑肥等有機物の施用を行いつつ漸次深耕して作土層の深化を図り、地力増進に努めることが望ましい。

### F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

### (2) 土壌統の細分

#### ① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
松山統一松山区	III d f n e II t

#### ② 土壌区別説明

松 山 統 一 松 山 区

示性分級式

土壌生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	耕作層の深さ	表土の転層	表土の風乾	表土の粘着性	表土の硬さ	透水性	保湿度	自然肥度	固定力	養分含量	置換性	苦土含量	加里含量	酸化障害	物理的障害	傾斜	人為的傾斜	侵入的傾斜	耐風耐水耐蝕性								
Ⅲ	t	d	g	p		W	f		n		i	S		e															
	Ⅱ	Ⅲ	I	I	1	1	1	I	1	1	Ⅲ	2	2	3	Ⅲ	3	3	2	I	1	1	I	1	—	—	Ⅲ	2	3	3
簡略分級式		Ⅲ d f n e Ⅱ t																											

A 土壌区の特徴

この土壌区は松山統に属する。作土の厚さは12~18cmで中庸もしくは少々浅く、有効土層は50cm以下で浅い。

表土は主として粗粒質の火山灰からなり、粘着性弱く農具の使用は容易である。下層は砂岩質風化物で粗粒質乃至中粒質を呈し、地表下50cm以下の最下層は礫層となつているため気水の透過は良好である。一部に地表近く巨~大円礫が散在し、耕起の際支障を来すところがある。

保肥力、固定力共に中庸であるが、一般に石灰飽和度低く、土層の塩基状態は不良である。石灰、磷酸、苦土、加里等の養分含量が低く、本地区調査時農作物に苦土欠乏症状が多く見られ、特に苦土の不足が目立っている。

特殊の障害性はないが、部分的に地表近く巨~大円礫が散在し、耕起の際障害を受けることがある。

B 植生及び利用状況

大部分が耕地として利用され、大豆、菜豆、小豆、馬鈴薯、亜麻、ビート、牧草等が栽培されている。

C 地力保全上の問題点

風蝕により作土の一部が飛散し、一般に表土が浅く、有機物も少々不足している。又一般に養分含量も低い。

堆厩肥、緑肥等の有機物を施用し、漸次深耕して作土層を深めるなど作土の地力を増進する方向へ持つて行くことが望ましく、更に苦土、加里の増施を中心とした施肥の合理化が必要と思われる。

尚、漸次深耕して行く場合 下層土は特に養分含量が低いので、施肥量を若干増量して行くことが望ましい。

防風林の整備不十分なところは早急に完備が必要である。

D 分布

広尾郡大樹町松山、中島、上大樹

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

尾 田 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ18 cm内外、腐植含量は5.5%内外、土性はSMである。色は10 YR、彩度2、明度2である。礫なく発達弱度の細粒状構造、ち密度1.5内外で中、pH(H<sub>2</sub>O)6.1前後。下層との境界は判然である。

第2層は厚さ12 cm内外、腐植含量は9.2%内外、土性はLである。色は10 YR、彩度2、明度4である。礫なく発達弱度の塊状構造で細孔あり、ち密度1.7前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.7前後。下層との境界は漸変である。

第3層は厚さ15 cm内外、腐植を欠き、土性はSLである。色は10 YR、彩度4、明度5である。礫なく発達弱度の塊状構造で細孔あり、ち密度1.8前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.7前後である。下層との境界は不規則明瞭である。

第4層は45 cm内外以下で円礫の礫層よりなる。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町尾田 試坑 No.230

第1層	0~18 cm	腐植に富む黒褐(10 YR <sup>2</sup> /2)のSL、礫なく発達弱度の細粒状構造、ち密度1.5内外で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)6.1前後、境界判然。
第2層	18~30 cm	腐植に富む黄褐灰(10 YR <sup>4</sup> /2)のL、礫なく発達弱度の塊状構造で、細孔あり、ち密度1.7前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.7前後、境界漸変。
第3層	30~45 cm	腐植に欠く灰黄褐(10 YR <sup>5</sup> /4)のSL、礫なく発達弱度の塊状構造で細孔あり、ち密度は1.8前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.7前後、境界不規則明瞭。
第4層	45 cm~	円礫層

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒 径 組 成 %				土 性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭 素 率
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土						
1	0-18	2.8	41.0	35.8	16.1	7.1	SL	6.92	2.42	3.17	0.24	13
2	18-30	6.2	9.9	47.4	39.6	3.1	L	—	—	5.34	0.35	15
3	30-45	6.3	10.6	59.3	23.2	6.9	SL	—	—	—	—	—

層位	腐 植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係 数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	5.5	6.1	5.1	0.25	10.3	5.2	0.25	0.22	52.1	7.45	tr
2	9.2	5.7	4.7	1.50	21.2	2.5	1.30	1.00	11.8	21.52	tr
3	—	5.7	4.7	1.25	15.6	1.9	0.18	0.27	10.6	1.991	tr



A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては拓北統、松山統、松山東統、芽武南統があるが拓北統、松山東統、芽武南統とは母材、堆積様式が異なり、松山統とは作土を構成する火山灰の種類が異なるので本統と区分される。

A-3 母材 非固結火成岩／非固結水成岩

A-4 堆積様式 風積／水積（洪積）

B 地形 平坦

C 気候

春夏海霧があり、夏季は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが同時に気温が低下し、農業上良好な気象条件ではない。

D 植生及び利用状況

大半は耕地化されているが一部林地、牧野として残っている。耕地になつているところでは、豆類、ビート、えん麦、馬鈴薯、牧草が作付けられている。収量は中庸かやゝ低位である。

E 農業上の留意事項

現在耕地防風林の設置により、風害はかなり軽減されているが、一部耕地防風林の不完全なところがあるので、その整備が必要である。風蝕により表土の浅いところがあり、又一般に作土はあまり深くなく、有機物含量が少ない。従つて堆肥、緑肥等有機物を施用しつつ漸次深耕すべきである。また苦土、加里の増肥を中心とした施肥の合理化が必要と思われる。礫が表層から出現しているところもあるので注意を要する。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 （北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
尾田統一尾田区	III d n II g(w) f i e

② 土壌区別説明

尾田統一尾田区

示性分級式（畑）

土	表	有	表	耕	土	自	養	陸	災	傾	侵														
壊	効	土	表	表	透	保	固	土	量	有	微	酸	有	物	増	地	自	傾	人	侵	耐				
生	土	耘	土	土	地	然	層	分	換	"	"	効	害	理	冠	す	斜								
産	土	の	の	風	の	性	態	量	物	的	水	り	害	の	の										
刀	の	層	の	乾	の	水	潤	肥	肥	塩	の	石	苦	加	燐	害	質	害	の						
可	能	の	粘	土	基	灰	土	里	酸	要	の	陸	危	危	傾	方	傾								
性	厚	含	難	着	乾	沃	状	豊	含	"	"	"	害	有	險	險									
等	性	深	性	性	さ	性	性	度	力	刀	態	量	"	"	素	度	無	性	度	度	斜	斜	度	性	性
級	さ	さ	量	易	湿	度	否	性	性	斜	蝕														
III t d g p (w) f n i a S e																									
I III II I 1 1 1 II 1 1 (2) II 2 2 1 III 2 3 2 3 -1 II 1 2 I 1 1 I 1 - - II 2 1 2																									
簡略分級式 III d n II g(w) f i e																									

### A 土壌区の特徴

この土壌区は尾田統に属する。表土の厚さは25cm以上で深い。有効土層は25～50cmである。土性は良質で農具の使用は容易である。透水性は大きく、保水力は小さいので過干のおそれがある。保肥力中、固定力小、自然肥沃度は中庸である。石灰、加里中、苦土、燐酸少で養分は少ない。除去や、困難な物理的障害があり、地形は平坦である。

### B 植生及び利用状況

大半は耕地化されているがまだ一部林地、牧野として残っている。耕地になつているところは豆類、ビート、えん麦、馬鈴薯、牧草が作付けられている。収量は中庸かやゝ低位である。

### C 地力保全上の問題点

風害の害が大きいから防風林の不完全なところはその整備が必要である。一般に作土はあまり深くなく、有機物含量も少ないので堆厩肥、緑肥等の有機物を施用しつつ漸次深耕し作土層を深めるべきである。しかし隙が表層から出現するところもあるので注意を要する。

### D 分布

広尾郡大樹町尾田

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

下 大 樹 統
---------

### (1) 土壌統の概説

#### A 土壌統の特徴

##### A-1 断面の特徴

第1層は厚さ18cm内外、土性はSLである。腐植含量5.7%、色は10YRで彩度1、明度1である。隙なく、単粒状構造、孔隙なし、ち密度1.1で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.9、下層との境界は明瞭である。

第2層は厚さ7cm内外、土性はLである。腐植含量10.6%、色は10YRで彩度4、明度3である。隙なく発達弱度の粒状、細塊状構造あり、細孔あり、ち密度2.1で中、pH(H<sub>2</sub>O)6.1、下層との境界は判然である。

第3層は厚さ27cm内外、土性はLである。腐植含量4.3%、色は10YRで彩度6、明度6である。隙なく発達弱度の塊状構造あり、細孔、小孔あり、ち密度1.5で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.9、下層との境界は漸変である。

第4層は厚さ33cm内外、土性はLである。腐植含量1.2%、色は2.5YRで彩度4、明度6である。小円隙あり、発達弱度の塊状構造あり、細孔あり、ち密度1.9で中、下層との境界は不規則明瞭である。

第5層は円隙層である。

### 代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町松山 試坑No.19

第1層	0～18cm	腐植を含む黒褐(10YR <sup>3</sup> / <sub>1</sub> )のSL、隙なく、単粒状構造、孔隙なし、ち密度1.1で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.9、層界明瞭。
第2層	18～25cm	腐植に富む暗褐(10YR <sup>3</sup> / <sub>4</sub> )のL、隙なく、発達弱度の粒状、塊状構造、細孔あり、ち密度2.1で中、層界判然。
第3層	25～52cm	腐植あり、明黄褐(10YR <sup>6</sup> / <sub>6</sub> )のL、隙なく発達弱度の塊状構造、

		細孔、小孔あり、ち密度15で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.9、層界漸変。
第4層	5.2~8.5cm	腐植を欠く灰黄褐(2.5Y <sup>6</sup> /4)のL、小円礫あり、発達弱度の塊状構造、細孔あり、ち密度19で中、pH(H <sub>2</sub> O)6.5、層界不規則明瞭。
第5層	8.5cm~	円礫層である。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-18	3.0	48.5	31.0	17.1	3.4	S L	72.8	2.48	3.32	0.23	14
2	18-25	5.7	17.9	37.2	35.4	9.5	L	68.7	2.44	5.97	0.34	16
3	25-52	6.4	3.8	58.4	37.8	0.0	L	65.4	2.75	2.50	0.22	14
4	52-85	3.3	2.4	45.6	37.1	14.9	L	115.9	2.69	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度%	燐酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	5.7	5.9	4.9	0.50	11.2	3.3	0.4	0.3	29.4	687	13.2
2	10.6	6.1	4.9	0.50	20.8	5.0	0.3	0.7	24.0	2,074	tr
3	4.3	5.9	4.9	0.75	14.8	2.5	0.1	0.2	16.5	1,859	—
4	1.2	6.5	4.8	1.75	9.5	2.1	0.1	0.2	21.7	924	—

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては松山統、崩和統があるが崩和統とは母材、堆積様式が異なり、また松山統とは礫層の浅深が異なることから本統と区分される。

A-3 母材 非固結火成岩/非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積(洪積世)

B 地形 平坦

C 気候

春夏海霧の襲来があり、夏季は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、農業上良好な気象条件ではない。

D 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大麦、えん麦、大豆、菜豆、ビート、馬鈴薯、牧草等が栽培されている。収量はあま 高くない。

E 農業上の留意事項

風蝕の発生があるので、防風林の設置完備等によつて被害の防止に努めなければならない。作土、心土共養分含量少く、作土は粗粒質で保肥力もあまり大きくないため、養分が流亡損失し易いと考えられる。加えて風蝕により作土の一部が飛散しているところもあるので、堆厩肥、緑肥等有機物の投入を図りつつ漸次深耕して作土層を深めることが望ましく、更に加里、苦土等の施肥量を増量することが必要である。

尚、急激な深耕は一時的に減収を招くおそれがあるので、改良資材(燐酸、石灰)の投入、施肥量の増加等の注意が必要である。

F 分布

広尾郡大樹町松山

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覽

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
下大樹統一下大樹区	III f n e II t

② 土壌区別説明

下大樹統一下大樹区

示 性 分 級 式 (畑)

	土 壤	表 土	表 土	表 土	透 透	保 保	湿 湿	固 固	土 土	置 置	有 有	微 微	酸 酸	有 有	物 物	增 增	地 地	自 自	傾 傾	侵 侵
	効 効	土 土	土 土	土 土	然 然	層 層	換 換	効 効	害 害	理 理	冠 冠	す す	斜 斜	為 為	風 風	耐 耐	耐 耐	耐 耐	耐 耐	耐 耐
	産 産	土 土	の の	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的
	刀 刀	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的
	可 可	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的
	能 能	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的	の 的
	性 性	厚 厚	含 含	難 難	着 着	硬 硬	乾 乾	沃 沃	状 状	豐 豐	含 含	素 素	度 度	無 無	性 性	度 度	度 度	斜 斜	向 向	斜 斜
	等 等	深 深	性 性	性 性	性 性	性 性	度 度	刀 刀	刀 刀	態 態	量 量	量 量	量 量	量 量	量 量	量 量	量 量	量 量	量 量	量 量
	級 級	さ さ	さ さ	量 量	易 易	湿 湿	度 度	否 否	性 性	性 性	性 性	性 性	性 性	性 性	性 性	性 性	性 性	性 性	性 性	性 性
III	t d g p	w	f	n	i	a	S	e												
	II I I I	I I I I	I I I I	III 2 2 3	III 3 3 2 3	- 2 I 1 1 -	I 1 - -	III 2 3 3												
簡略分級式	III f n e II t																			

A 土壌区の特徴

この土壌区は下大樹統に属する。表土の厚さは1.5~2.5cmでやや深い。有効土層は1m以上で深い。土性は壤質で農具の使用は容易である。透水性中、保水性が中で過湿、過干のおそれは少ない。保肥力中、固定力小、自然肥沃度は低い。石灰、苦土、燐酸少、加里中、酸度中、養分は少ない。風蝕のおそれがある。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大麦、えん麦、大豆、菜豆、ビート、馬鈴薯、牧草等が栽培されている。収量はあまり高くない。

C 地力保全上の問題点

風蝕の発生があるので、防風林の設置完備等によつて被害の防止に努めなければならない。

作土、心土共養分含量少く、作土は粗粒質で保肥力もあまり大きくないため、養分が流亡損失し易いと考えられる。加えて風蝕により作土の一部が飛散しているところもあるので、堆厩肥、緑肥等有機物の投入を図りつつ漸次深耕して、作土層を進めることが望ましく、更に加里、苦土等の施肥量を増量することが必要である。

尚、急激な深耕は一時的に減収を招くおそれがあるので、改良資材(燐酸、石灰)の投入、施肥量の増加等の注意が必要である。

D 分布

広尾郡大樹町松山

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

大 和 統

(1) 土壌統概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ14cm内外、土性はSLである。腐植含量5.5%、色は10YRで彩度2、明度3である。礫なく、単粒状構造、孔隙なし、ち密度14で中、pH(H<sub>2</sub>O)6.1、下層との境界は判然である。

第2層は厚さ10cm内外、土性はCLである。腐植含量4.7%、色は10YRで彩度4、明度4である。礫なく発達弱度の粒状構造、細孔あり、ち密度21で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.8、下層との境界は漸変である。

第3層は厚さ22cm内外、土性はSLである。腐植を欠く、色は10YRで彩度6、明度4である。礫なく発達弱度の塊状構造、細孔あり、ち密度17で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.7、下層との境界は明瞭である。

第4層は厚さ21cm内外、土性はSLである。腐植を欠く、色は2.5Yで、彩度4、明度5、pH(H<sub>2</sub>O)5.6、下層との境界は不規則明瞭である。

第5層は56cm以下で円礫層である。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町大和 試坑 №221

第1層	0~14cm	腐植を含む黒褐(10YR <sup>3</sup> /2)のSL、礫なく単粒状構造、孔隙なし、ち密度14で中、pH(H <sub>2</sub> O)6.1、層界判然。
第2層	14~23cm	腐植あり、褐(10YR <sup>4</sup> /4)のCL、礫なく発達弱度の粒状構造、細孔あり、ち密度21で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.8、層界漸変。
第3層	23~35cm	腐植を欠く褐(10YR <sup>4</sup> /6)のSL、礫なく発達弱度の塊状構造、細孔あり、ち密度17で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.7、層界明瞭。
第4層	35~56cm	腐植を欠く、黄褐(2.5Y <sup>5</sup> /4)のSL、小円礫あり、発達中度の塊状構造、細孔あり、ち密度23で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.6、層界不規則明瞭。
第5層	56cm~	円礫層である。

体表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-14	2.8	41.0	35.8	16.1	7.1	SL	69.2	2.46	3.17	0.24	13
2	14-23	6.8	8.2	45.8	28.9	17.2	CL	—	—	2.74	0.28	10
3	23-35	5.5	7.5	57.8	21.6	13.4	SL	—	—	—	—	—
4	35-56	4.5	6.1	65.1	16.3	12.5	SL	—	—	—	—	—

層位	腐植%	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	燐酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	5.5	6.1	5.1	0.25	10.3	5.16	0.25	0.22	50.1	7.45	tr
2	4.7	5.8	4.8	1.00	14.8	1.60	0.35	0.32	10.8	1.741	0.4
3	—	5.7	4.6	1.50	11.9	1.80	0.50	0.22	15.1	1.492	0.2
4	—	5.6	4.5	3.00	11.0	2.10	0.35	0.24	19.1	1.242	1.5

#### A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては拓北統、更正統、東和統、松山東統等があるが母材、堆積様式が異なるので本統と区分される。

#### A-3 母材 非固結火成岩/非固結水成岩

#### A-4 堆積様式 風積/水積(洪積)

#### B 地形 平坦

#### C 気候

春夏海霧の襲来があり、夏は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、農業上好ましくない気象条件下にある。

#### D 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大麦、えん麦、大豆、菜豆、ビート、牧草等が作付けられている。収量は中庸～低位である。

#### E 農業上の留意事項

表土が軽しような火山性土であり、下層の透水性が良好なため、一時表土が乾燥すると同時に季節風の襲来と相まって風蝕が発生し、被害を受けることがあるから、防風林の整備、耕地防風林の設置育成により、被害の防止に努めることが必要である。

作土は粗粒質で、保肥力も少々小さいから、堆肥、緑肥等の有機物を施用しつつ漸次深耕して作土層の深化を図ることが望ましい。同時に作土、心土とも養分が比較的少ないから加里、苦土の施肥量を増加する方向へ持つて行くことが必要と思われる。又、深耕により心土の一部を作土に混合する場合は加里、苦土の外に燐酸、石灰等を更に施用することが望ましい。

#### F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

#### (2) 土壌統の細分

##### ① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
大和統一大和区	III g n e II (w) f i

##### ② 土壌区別説明

大 和 統 一 大 和 区

示 性 分 級 式 (畑)

土	表	有	表	耕	土	自	養	陸	災	傾	侵																							
壤	効	土	表	表	透	保	湿	固	土	位	有	微	酸	有	物	増	地	自	傾	入	侵	耐												
生	土	土	土	土	然	層	分	換	"	"	効	害	理	冠	す	斜	為	水	風															
産	土	の	の	の																														
刀	の	層	の	粘	土	乾	の	水	水	潤	肥	肥	定	塩	の	石	苦	加	磷	害	質	障	害	の	の	の	蝕							
可	能	厚	含	難	硬	乾	沃	状	豊	含	"	"	素	度	無	性	度	斜	向	斜	度	性	性											
等	級	さ	さ	量	量	湿	度	否	性	性	斜	蝕																						
Ⅲ	t	d	g	p	W	f	n	i	a	S	e																							
	I	III	I	I	1	1	(D)	1	1	(2)	II	2	2	1	III	2	3	2	3	-	1	II	1	2	I	1	1	I	1	—	III	2	1	3
簡略分級式				III	g	n	e	II	(w)	f	i																							

A 土製区の特徴

この土製区は大和統に属する。表土の厚さは25cm以上で深い。有効土層は25～50cmで浅い。土性は壤質で農具の使用は容易である。透水性大、保水力小で過干のおそれがある。保肥力中、固定力小、自然肥沃度は中庸である。石灰、加里中、苦土、磷酸少、酸度は弱い、養分は少ない。除去や、困難な物理的障害があり、風蝕のおそれが多い。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大麦、えん麦、大豆、菜豆、馬鈴薯、ビート、牧草等が作付けられている。収量は中庸もしくは低位である。

C 地力保全上の問題点

土製は粗粒、軽しようで、下層の透水性も良好なため春季一時的に表土が乾燥し、季節風の襲来によつてしばしば風蝕を受けるから幹線防風林の完備、耕地防風林の育成整備等の風蝕防止対策が必要である。

作土は粗粒のため保肥力が少々小さく、養肥分の流亡損失し易い土製と考えられるので堆厩肥、緑肥等有機物の施用を行いつつ逐次深耕して作土層を深くすることが望ましい。

この場合下層は磷酸、石灰、苦土等に欠乏しているため、これらの施用量を増加する必要がある。尚、トラクター等による急激な深耕は一時収量が低減するおそれがあるため注意を要する。

D 分布

広尾郡大樹町大和

調査及び記載責任者 菊地晃二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

光 知 園 統

(1) 土製統概説

A 土製統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ19cm内外、土性はSLである。腐植含量5.5%、色は10YRで彩度2、明度2で

である。礫なく、単粒状構造、孔隙なし、ち密度10で疎、pH(H<sub>2</sub>O)5.6、下層との境界は判然である。

第2層は厚さ6cm内外、土性はLiCである。腐植含量10.9%、色は10YRで彩度1、明度1である。礫なく発達中度の粒状構造、細孔あり、ち密度17で中、pH(H<sub>2</sub>O)4.9、下層との境界は判然である。

第3層は厚さ7cm内外、土性はLである。腐植含量3.8%、色は10YRで彩度2、明度2である。礫なく発達弱～中度の粒状構造、細孔あり、ち密度18で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.2、下層との境界は漸変である。

第4層は厚さ20cm内外、土性はSLである。腐植を欠き、色は7.5YRで彩度6、明度5である。礫なく発達弱度の塊状構造、ち密度15で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.4、下層との境界は漸変である。

第5層は5.2cm以下で、腐植を欠き色は10YRで明度6、彩度6である。斑紋あり、発達中度の塊状構造あり、ち密度23で中である。

### 代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町光知園 試坑 No.252

第1層	0～19cm	腐植を含む黒褐(10YR <sup>2</sup> /2)のSL、礫なく単粒状構造、孔隙なし、ち密度10で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.6、層界判然。
第2層	19～25cm	腐植に富む黒(10YR <sup>1</sup> /1)のLiC、礫なく発達中度の粒状構造、細孔あり、ち密度17で中、pH(H <sub>2</sub> O)4.9、層界判然。
第3層	25～32cm	腐植あり黒褐(10YR <sup>2</sup> /2)のL、礫なく発達弱～中度の粒状構造、細孔あり、ち密度18で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.2、層界漸変。
第4層	32～52cm	腐植を欠く明褐(7.5YR <sup>5</sup> /6)のSCL、礫なく発達弱度の塊状構造、ち密度15で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.4、層界漸変。
第5層	5.2cm～	腐植を欠く、明黄褐(10YR <sup>6</sup> /6)礫なく発達中度の塊状構造、斑紋あり、ち密度23で中。

### 代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0—19	2.6	47.5	30.0	16.1	6.4	SL	81.7	2.25	3.20	0.29	11
2	19—25	7.5	2.6	26.9	43.1	27.4	LiC	62.3	2.09	6.33	0.52	12
3	25—32	7.9	10.8	53.9	21.3	14.0	L	78.6	2.43	2.20	0.21	10
4	32—52	6.7	10.9	57.7	16.0	15.4	SCL	—	—	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	磷酸吸収 係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	5.5	5.6	4.8	0.75	12.3	5.13	0.69	1.16	41.6	8.32	9.9
2	10.9	4.9	4.3	9.50	32.3	3.96	0.74	0.94	8.2	2.248	0.9
3	3.8	5.2	4.4	5.50	17.9	1.36	0.84	0.75	7.5	2.174	tr
4	—	5.4	4.3	7.50	16.3	1.61	1.96	0.57	9.9	1.910	tr

#### A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては振別統があるが堆積様式が異なるので本統と区分される。

#### A-3 母材 非固結火成岩/非固結水成岩



A-4 堆積様式 風積/水積

B 地形 緩傾斜地。

C 気候

春夏海霧があり、夏季は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、農業上良好な気象条件ではない。

D 植生及び利用状況

一部林地、放牧地となつているが大部分は耕地化され、牧草、飼料作物等が栽培されている。収量は中庸かやや低位である。

E 農業上の留意事項

下層に不透水層が存在するので排水不良地となつている。従つて明渠、暗渠の設置が必要である。又土層の塩基状態も不良で酸性を呈しているため、酸性矯正の必要がある。心土の磷酸固定力が強大であるから深耕時には磷酸肥料の多施が必要である。

F 分布

広尾郡大樹町光知園

調査及び記載責任者 菊 地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
光知園統一光知園区	III w II f n e

② 土壌区別説明

光 知 園 一 光 知 園

示 性 分 級 式 (畑)

土 表 有 表 耕 土 自 養 陸 災 傾 侵 効 土 表 表 透 保 湿 保 固 土 質 有 微 酸 有 物 増 地 自 傾 人 侵 耐 耐 生 土 耘 土 土 地 然 層 分 換 効 害 理 冠 す 斜 為 水 風 産 土 の の 風 の 性 態 量 物 的 水 べ り 然 為 水 風 力 の 層 の の 乾 の 水 水 潤 肥 肥 定 塩 の 石 苦 加 磷 害 質 害 の の 蝕 可 の 礫 の の 粘 土 基 灰 土 里 酸 要 の 陸 危 危 傾 方 蝕 蝕 能 厚 の 含 難 土 着 の 乾 沃 状 豊 含 素 度 無 性 度 度 斜 向 斜 度 性 性 性 深 性 等 深 性 級 さ さ 量 易 湿 度 否 性 性 斜 蝕
III t d g p W f n i a S e I I I I 1 1 1 1 III 3 3 3 3 II 2 2 2 2 II 2 2 1 2 - 2 I 1 1 I 1 1 I 1 - II 2 1 2
簡略分級式 III w II f n e

A 土壌区の特徴

この土壌区は光知園統に属する。表土の厚さは25cm以上、有効土層は1m以上で深い。土性は壤質で農具の使用は容易である。透水性小、保水力大で過湿のおそれが多い。保肥力中、固定力小、塩基の状態は中庸である。石灰、苦土、磷酸中、加里多、酸度は中、養分は中位である。障害性はない。

B 植生及び利用状況

一部林地、放牧地となつているが大部分は耕地化され、牧草、飼料作物等が栽培されている。収量

は中庸～やや低位である。

C 地力保全上の問題点

排水不良であるので明渠、暗渠の設置が必要である。又土層の塩基状態も不良で酸性を呈している  
ので酸性矯正が必要である。心土の磷酸固定力が強大であるから深耕時には磷酸肥料の多施が必要で  
ある。

D 分布

広尾郡大樹町光知園、坂下。

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

ベ タ ン 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌区の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ10～14cm、腐植含量7～8%、土性はCが主である。色は10YRで彩度1～3、  
明度2である。半風化小中半角礫を含む場合がある。発達弱度の細粒状構造を呈し、ち密度8～13  
で頗る疎～疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.5前後。下層との境界は直線明瞭である。

第2層は厚さ7～15cmで、腐植含量10%内外、土性はCである。色は10YR～2.5Yで、彩  
度2、明度2である。半風化細小中半角礫を含み、発達弱度の粒状構造を呈するものが多い。細孔を  
含む。ち密度14～16で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.3。下層との境界は不規則漸変である。

第3層は地表下概ね20～30cmで、未風化角礫層になっているものが多い。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町字上崩和(ベタン) 試坑 No.181

第1層	0～14cm	腐植に富む黒褐色(10YR <sup>2</sup> / <sub>2</sub> )のLiC、発達弱度の細粒状構造、 ち密度5で頗る疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.5、調査時の湿り湿、層界波状明瞭。
第2層	14～21cm	腐植に頗る富む黒褐色(10YR <sup>2</sup> / <sub>2</sub> )のC、半風化細小中半角礫を含 む。発達弱度の粒状構造、ち密度16で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.3、調査時の 湿り湿、層界不規則漸変。
第3層	21cm～	未風化角礫層。

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-14	5.8	33.3	19.3	22.4	25.0	LiC	—	—	4.51	0.51	9
2	14-21	6.3	21.6	23.5	25.3	29.5	LiC	—	—	6.19	0.56	11

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽 和度%	磷酸吸収 係 数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	7.8	5.5	4.4	4.07	27.9	11.2	3.0	1.3	39.9	1.026	36.4
2	10.7	5.3	4.2	9.72	28.1	9.4	3.4	2.0	33.5	1.063	15.6



### A 土壌区の特徴

この土壌区はベタン統に属する。表土の厚さは20cm前後で中庸であるが、有効土層は50cm以内で浅い。下層は角礫層のため透水性は良いが、斜面からの伏流水により過湿のおそれのあるところがある。

保肥力大、燐酸固定力中庸で、塩基状態も稍々中庸に属する。

養肥力も中庸以上である。

未風化大中小角礫層が浅いため物理的障害を受ける。

### B 植生及び利用状況

耕地は大豆、小豆、菜豆、馬鈴薯、ビート、えん麦等が作付けされている。収量は中庸もしくはそれ以下である。

### C 地力保全上の問題点

融雪時、集中強雨の際は山地からの流水により土壌侵蝕を受ける、又伏流水により過湿になるおそれがあるから、捕水渠、明渠排水等の設置によつて一時的な流水の防止と、伏流水をしや断すべきである。牧草栽培、緑作帯の設置等も望ましい。

稍々酸性を呈するので、酸性矯正が望ましい(炭カル250Kg前後/10a)

### D 分布

広尾郡大樹町館山、振別、幸栄、大全。

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

## 崩 和 西 統

### (1) 土壌統の概説

#### A 土壌統の特徴

##### A-1 断面の特徴

第1層は13~15cmで、腐植含量5%内外、土性はSLである。色は10YRで彩度3、明度3である。礫を含まず、発達弱度の細粒状構造を呈し、ち密度10前後で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.9前後。下層との境界は直線明瞭である(火山灰層)。

第2層は厚さ15~20cm、腐植含量16%内外、土性はSiLが主である。色は7.5YRで彩度4、明度3である。礫は存在せず、発達弱度の細塊状構造もしくは均質連結状構造を呈し、細小孔を含む。ち密度13~15で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.6前後。下層との境界は波状漸変である。

第3層は厚さ15~18cmで、腐植含量5~6%、土性はLが主である。色は10YRで彩度3~4、明度5である。未風化中小円礫の存在するところがある。発達弱度の塊状構造を呈し、細孔を含む。ち密度14~16で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.7前後。下層との境界は波状漸変である。一部は未風化細小中円礫に頗る富む層になつている。

第4層は地表下55~60cmで、腐植を欠き土性はSL~Lである。色は10YRで彩度6、明度7である。均質連結状構造を呈し、細孔を僅かに含む。ち密度21前後で中である。調査時の湿り湿。一部は未風化円礫層となつている。

### 代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町字崩和 試坑 No.174

第1層	0~13cm	腐植を含む暗褐色(10YR 3/3)のSL、礫なく、発達弱度の細粒状構造、ち密度10で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.9、調査時の湿り湿、層界直線明瞭(火山灰層)。
-----	--------	--

第2層	13~40 cm	腐植に頗る富む黒褐色(7.5 <sup>3</sup> /4)のSiL、礫なく、均質連結状構造、細小孔を含む、ち密度1.3で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.6、調査時の湿り湿、層界波状稍々明瞭。
第3層	40~55 cm	腐植を含む灰黄褐色(10YR <sup>5</sup> /4)のL、礫なく、発達弱度の塊状構造、細孔を含む、ち密度1.4で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.7、調査時の湿り湿、層界波状漸変。
第4層	55 cm~	腐植を欠く明黄褐色(10YR <sup>7</sup> /6)のSL、礫なく、均質連結状構造、細孔を僅かに含む、ち密度2.1で中、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-19	3.3	33.9	43.2	17.2	5.7	SL	—	—	2.91	0.23	13
2	19-40	10.2	2.9	33.6	50.6	12.8	SiL	—	—	9.36	0.56	17
3	40-55	5.5	4.0	50.9	35.4	9.8	L	—	—	2.19	0.17	13

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	5.0	5.9	4.8	1.29	10.0	4.3	1.1	1.1	43.3	880	5.7
2	16.1	5.6	4.4	9.66	21.2	3.2	1.8	1.0	15.3	—	tr
3	3.8	5.7	4.4	6.44	14.8	0.8	0.5	0.7	47.9	—	—

A-2 他の土壌区との関係

本統に隣接又は類似する統としては、崩和統、崩和東統、ペタン統等があるが、崩和統とは堆積様式が異り、崩和東統、ペタン統とは腐植層序が異なるので夫々本統と区別される。

A-3 母材 非固結火成岩/非固結水成岩

A-4 堆積様式 風積(火山性)/扇状堆土

B 地形

標高70~80 cmの傾斜地。

C 気候

夏季の気候冷涼、濃霧の影響を受ける。秋季は比較的好天となるが、同時に気温が低下し、農業上不利な気象条件下にある。

D 植生及び利用状況

面積の半ば以上は耕地として利用され、大豆、菜豆、えん麦、牧草その他飼料作物等の作物が栽培され、収量は中庸かもしくは低位である。

E 農業上の留意事項

融雪時、集中強雨時には水侵を受けるから牧草の導入緑作帯の設置等、水蝕防止対策を講ずる必要がある。一部過湿のおそれがあるのでかかる場所は排水渠を設置することが望ましい。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

(2) 土壌の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
崩和西統一崩和西区	III ne II tw fs

② 土壌区別説明

崩和西統一崩和西区

示 性 分 級 式

土	表	有	表	耕	(	(	土	(	(	自	(	(	養	(	(	障	(	傾	(	侵	(	(	
裂	効	効	土	表	表	表	透	保	湿	然	固	土	置	有	酸	化	物	自	傾	人	侵	耐	耐
生	土	土	土	土	土	土	地																
産	土	土	土	土	土	土	地																
力	の	の	の	の	の	の	水	水	潤	肥	肥	定	塩	の	石	苦	加	燐					
可	腐	腐	腐	腐	腐	腐	水	水	潤	肥	肥	定	塩	の	石	苦	加	燐					
能	の	の	の	の	の	の	水	水	潤	肥	肥	定	塩	の	石	苦	加	燐					
性	厚	深	含	難	土	着	乾			沃		基	灰	土	里	酸							
等	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性
級	さ	さ	量	易	一	一	湿	一	一	度	一	一	否	一	一	一	一	性	一	斜	一	一	
	t	d	g	p			w			f			n				i		s			e	
III	II	I	I	I	I	I	II	2	1	2	II	2	2	2	III	2	2	1	3	2	I	1	1
簡略分級式	III ne II tw fs																						

A 土壌区の特徴

この土壌区は崩和西統一崩和西区に属する。作土の厚さは13~15cmで少々浅く、有効土層は50cm~1mで中庸である。表層40cmまで多腐植層で、その下部は透水性少々中庸であるが、局部的に伏流水の影響を受け、過湿のおそれのあるところがある。

係肥力少々中庸、燐酸固定力は作土は中庸であるが、心土は強大である。塩基状態も作土は中庸であるが心土は不良である。

養肥分は石灰、苦土は中庸、加里は少々多いようであるが、燐酸含量が低い。

特殊の障害性は存在しない。

B 植生及び利用状況

耕地として利用されているところが多く、大豆、菜豆、えん麦、牧草その他の飼料作物が栽培されている。収量は中庸もしくは低位である。

C 地力保全上の問題点

融雪的或は降雨時には水蝕の被害を受けるので、牧草栽培、緑作帯の設置等により防止すべきである。又伏流水の影響によりしばしば過湿になることがあるから、このようなところは排水渠の設置が望ましい。

粗粒火山灰層が一部耕土となつて作土直下に存在するところがあるので、この様なところは作土と混和することが望ましい。

D 分布

広尾郡大樹町崩和

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

崩 和 東 統

(1) 土層統の概説

A 土層区の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は13~15 cm、腐植含量5~6%、土性はSLである。色は10YRで彩度1~3、明度2である。風化細小円礫を含むところあり、主として単粒構造を呈し、ち密度12~15で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.8前後。下層との境界は直線明瞭である。

第2層は厚さ10~20 cm、腐植含量7%内外、土性はSLである。色は10YR~2.5Yで彩度2~4、明度3である。半風化、風化細小円礫を含む~富む。発達弱度の粒状構造もしくは単粒構造を呈し、ち密度16~19で疎~中である。pH(H<sub>2</sub>O)5.5前後。下層との境界は波状漸変である。

第3層は厚さ13~30 cmで、腐植含量3%内外、土性はSLが主である。色は10YRで彩度4~6、明度3~6である。半風化、風化細小円礫を含む~富む。単粒状構造を呈し、ち密度16前後で疎、pH(H<sub>2</sub>O)5.8前後。下層との境界は波状漸変である。

第4層は地表下38~50 cmで、腐植を欠く、半風化、風化細小中円礫に頗る富むか又は礫層である。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町字上崩和 試坑 No168

第1層	0~13 cm	腐植に富む黒褐色(10YR <sup>2</sup> /3)のSL、半風化、風化細小円礫を僅かに含む、単粒状構造、ち密度12で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.8、調査時の湿り半乾、層界直線明瞭。
第2層	13~23 cm	腐植に富む暗褐色(10YR <sup>3</sup> /4)のSL、半風化、風化細小円礫を含む、単粒状、ち密度17で疎、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.5、層界波状漸変。
第3層	23~38 cm	腐植を含む明黄褐色(10YR <sup>6</sup> /6)のSL、半風化、風化細小円礫を含む~富む、単粒状構造、ち密度16で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.8、調査時の湿り半乾、層界波状漸変。
第4層	38 cm~	腐植を欠く黄橙色(10YR <sup>7</sup> /8)のS、半風化細小上円礫に頗る富む、単粒構造、調査時の湿り半乾。

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-13	5.3	32.3	38.7	22.5	6.5	SL	74.6	2.56	3.10	0.29	11
2	13-23	6.4	30.5	43.1	22.7	3.6	SL	85.0	2.68	3.99	0.31	13
3	23-38	5.0	42.8	36.8	17.6	3.4	SL	—	—	1.71	0.16	11

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	磷酸吸収 係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	5.3	5.8	4.6	3.44	14.0	2.7	0.5	0.9	19.5	770	4.4
2	6.9	5.5	4.6	4.30	16.1	1.4	1.9	1.3	8.6	—	1.5
3	3.0	5.8	4.7	2.79	10.8	1.2	0.5	0.6	10.7	—	—





B 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大豆、小豆、菜豆、えん麦、牧草その他が作付られている。

C 地力保全上の問題点

土壌の耐侵蝕性が乏しく、傾斜を有するため、主として水蝕を受けるから牧草の作付、緑作帯の設置等による。同時に養肥分の流亡損失も多いと思われるので、堆厩肥等有機物を施用して地力の維持に努めることが必要である。

D 分布

広尾郡大樹町南和

調査及び記載責任者 高 尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

上 大 樹 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ12cm内外、腐植含量は3.8%内外、土性はSLである。色は10YR、彩度3、明度2である。際なく発達弱～中度の粒状構造で細孔あり、ち密度1.2前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.3前後。下層との境界は判然である。

第2層は厚さ8cm内外、腐植を欠き、土性はSLである。色は10YR、彩度3、明度5である。際なく単粒状構造、ち密度1.5前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.6前後。下層との境界は不規則明瞭である。

第3層は20cm内外以下で隠層である。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町上大樹 試坑 No.2661

第1層	0~12cm	腐植を含む黒褐(10YR <sup>2/3</sup> )のSL、際なく発達弱～中度の粒状構造で細孔あり、ち密度1.2前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.3前後、境界判然。
第2層	12~20cm	腐植を欠く灰黄褐(10YR <sup>5/3</sup> )のSL、際なく単粒状構造、ち密度1.5前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.6前後、境界不規則明瞭。
第3層	20cm~	隠層。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒 径 組 成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-12	1.9	15.0	54.9	17.9	12.2	SL	110.3	2.50	2.20	0.26	8
2	12-20	1.8	11.2	68.1	12.1	8.6	SL	111.3	2.64	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	3.8	5.3	4.4	3.75	12.8	4.25	0.51	0.43	35.4	7.05	5.9
2	—	5.6	4.5	3.00	7.8	2.37	0.17	0.35	30.4	5.29	3.1

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては拓北統、松山統、芽武南統、開進統等があるが拓北統、松山統とは堆積様式が異なり、芽武南統、開進統とは表層火山灰層の有無により本統と区分される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積(沖積)

B 地形 平坦

C 気候

春夏海霧があり、夏季は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが同時に気温が低下し、農業上良好な気象条件ではない。

D 植生及び利用状況

礫層が極端に近い場合を除いては耕地として利用されている。豆類、ビート、馬鈴薯、牧草等が作付されており、収量は高い方に入る。

E 農業上の留意事項

巨、大円礫が地表に散在し、農耕上支障となつていいるから、このようなところでは除礫が必要である。一部礫が浅く土性は砂質で且つ腐植含量が少ないところがあるので埴質土壌の客入、又は緑肥の栽培、堆肥の施用等により保水力、保肥力の増大を図る必要がある。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
上大樹統一上大樹区	III td(w) II g f n i d e

② 土壌区別説明

上大樹統一上大樹区

示 性 分 級 式 (畑)

土	表	有	表	耕	土	自	養	陸	災	傾	侵											
壊	効	土	表	表	透	保	固	土	質	有	微	酸	有	物	増	地	自	傾	入	侵	耐	
生	土	耘	土	土	地	然	層	分	換	効	害	理	冠	す	斜	為	水	風	水	風	蝕	
力	の	層	の	の	風	の	水	水	潤	肥	定	塩	の	石	苦	加	燐	害	質	害	の	蝕
能	厚	の	難	土	粘	土	乾	沃	基	灰	土	里	酸	要	の	監	危	危	傾	方	蝕	
性	等	深	性	性	性	性	度	力	刀	態	量	素	度	無	性	度	度	斜	向	斜	度	
級	さ	さ	易	湿	度	否	性	性	斜	蝕	性	性	斜	蝕	性	性	斜	蝕	性	性	性	
III	td	g	p	w	f	n	i	a	s	e												
III	II	I	1	1	(II)	1	(3)	II	2	2	2	II	2	2	1	2	—	2	II	1	2	II
簡略分級式	III td(w) II g f n i a s e																					

A 土壌区の特徴

この土壌区は上大樹統に属する。表土の厚さは15 cm内外で浅い。有効土層は25~50 cm内外で

浅い。土性は豊質で農具の使用は容易であるが一部礫が出現しているのでかなりの抵抗を感じる場合もある。透水性は大きく、保水力は小さいので過干のおそれが多い。保肥力中、固定力小で自然肥沃度は中庸である。石灰、苦土、燐酸中、加里多、酸度は中で養分は中庸である。除去や、困難な物理的障害あり、一時的に増冠水を受ける危険性ある。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

大部分が耕地として利用されている。豆類、ビート、馬鈴薯、牧草等が作付けられており、収量は高い方である。

C 地力保全上の問題点

巨、大円礫が地表から散在し、農耕上支障となつている。このようなところでは除礫が必要である。一部礫が浅く土性が砂質で且つ腐植含量が少なくかんばつを受けるようなところでは堆質土壌の客入、又は緑肥の栽培、堆肥の施用等により保水性、保肥力の増大を図る必要がある。

D 分布

広尾郡大樹町上大樹、大全。

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

開 進 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15cm内外、腐植含量は8.5%内外、土性はSCLである。色は10YR、彩度2、明度2である。礫なく発達弱度の細粒状構造、ち密度1.2前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.6前後。下層との境界は判然である。

第2層は厚さ10cm内外、腐植含量は13.9%内外、土性はLiCである。色は10YR、彩度1、明度2である。礫なく発達中度の粒状構造で細孔あり、ち密度1.7前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.3前後。下層との境界は判然である。

第3層は厚さ25cm内外、腐植含量は8.7%内外、土性はLiCである。色は10YR、彩度2、明度2である。礫なく発達中度の粒状構造で細孔、小孔あり、ち密度2.0前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.2前後。下層との境界は判然である。

第4層は厚さ15cm内外、腐植含量は4.6%内外、土性はSiCである。色は10YR、彩度3、明度2である。礫なく発達中度の粒状構造で細孔含む、ち密度2.2前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.2前後、下層との境界は判然である。

第5層は65cm内外以下、腐植を欠き、土性はLiCである。色は2.5Y、彩度4、明度4である。礫なく発達弱度の塊状構造で細孔あり、ち密度2.1前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.1前後。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町開進 試坑 No.269

第1層	0~15cm	腐植に富む黒褐色(10YR2/2)のSCL、礫なく発達弱度の細粒状構造、ち密度1.2前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.6前後、境界判然。
-----	--------	---

第2層	15~25cm	腐植に頗る富む黒(10YR <sup>2</sup> /1)のLiC、際なく発達中度の粒状構造で細孔あり、ち密度17前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.3前後、境界判然
第3層	25~50cm	腐植に富む黒褐(10YR <sup>2</sup> /2)のLiC、際なく発達中度の粒状構造で細孔、小孔あり、ち密度20前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.2前後、境界判然。
第4層	50~65cm	腐植を含む黒褐(10YR <sup>2</sup> /3)のSiC、際なく発達中度の粒状構造で細孔含む、ち密度22前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.2前後、境界判然。
第5層	65cm~	腐植を欠く暗黄褐(2.5Y <sup>4</sup> /4)のLiC、際なく発達弱度の塊状構造あり、ち密度21前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.1前後。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒 径 組 成 %				土 性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭 素 率
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土						
1	0-15	2.9	31.4	31.2	19.8	17.6	SCL	87.4	2.20	4.95	0.39	13
2	15-25	5.9	4.0	25.0	39.1	39.1	LiC	81.2	2.26	8.06	0.63	13
3	25-50	5.0	0.6	29.1	41.9	28.4	LiC	—	—	5.07	0.44	12
4	50-65	4.9	0.4	32.6	45.2	21.8	SiC	—	—	2.65	0.25	11
5	65-—	5.4	4.0	22.2	37.4	36.4	LiC	—	—	—	—	—

層位	腐 植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽 和度%	磷酸吸収 係 数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	8.5	5.6	4.5	2.00	19.3	7.38	1.03	0.36	40.2	9.11	3.9
2	13.9	5.3	4.2	6.75	38.9	1.70	1.90	0.76	4.6	1.586	1.3
3	8.7	5.2	4.2	13.25	28.0	4.40	0.71	0.46	1.57	1.710	1.1
4	4.6	5.2	4.2	17.25	21.8	2.45	1.41	0.20	1.2	1.485	1.1
5	—	5.1	4.1	23.25	27.9	2.46	1.24	0.30	8.8	1.674	0.4

#### A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては、松山統、ベタン統、振別統、日方統、石坂統があるが松山統、ベタン統とは母材、堆積様式が異なり、石坂統とは表層の火山灰層の有無により、また振別統、日方統とは土性、腐植含量が異なるので本統と区分される。

#### A-3 母材 非固結火成岩/非固結水成岩

#### A-4 堆積様式 風積/水積

#### B 地 形 平坦

#### C 気 候

春夏海霧があり、夏季に一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、農業上良好な気象条件ではない。

#### D 植生及び利用状況

大部分が耕地として利用されビート、豆類、馬鈴薯、牧草等が作付けられている。収量は高い方である。

E 農業上の留意事項

作土が火山灰土、心土が沖積土であるから深耕により作土、心土が混合することが望ましい。また塩基状態も悪く酸性を呈しているので石灰を加え矯正する必要がある。

F 分布

広尾郡大樹町開進

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覽

土 壤 区 名	簡略分級式
開進統一開進区	II p w f n e

② 土壌区別説明

開 進 統 一 開 進 区

示 性 分 級 式 (畑)

土表有表耕	土	自	養	障	災	傾	侵	
壤 効土 表表土 透保湿 保固土 暨 有微酸 有物 増地 自傾人 侵耐耐	生土 耘土土の地 然 層分換 " " 効 害理 冠す 斜 為 水風	刀 土の の風 の性 態量 物的 水り 然 為 水風	可 隙 のの 乾の水水潤肥肥定塩の石苦加磷 害質 害のの の 蝕	能 厚 含難 土着硬 乾 沃 状豊含 " " 素度 無性 度度 斜向斜 度性性	性 等 深 性性さ 性性度 力力態 量 " " 素度 無性 度度 斜向斜 度性性	級 ささ量易 湿 斥 否 性 性 斜 蝕		
II	t d g p	w	f	n	i	a	s e	
	I I I I	2 2 2	H 1 1 2	II 2 2 2	II 1 2 1 2	-2 I 1 1 I 1 1 I 1 1	— II 1 1 2	
簡略分級式	II p w f n e							

A 土壌区の特徴

この土壌区は開進統に属する。表土の厚さは25cm以上で深い、有効土層は1m以上で深い。表土の土性は粘質で農具の使用にあたってやゝ抵抗を感じる。透水性小、保水力中で過湿のおそれがある。保肥力中、固定力小、自然肥沃度は中庸である。石灰、加里多、苦土、磷酸中、酸度強く養分は中位である。障害性はない。

B 植生及び利用状況

大部分が耕地として利用されビート、豆類、馬鈴薯、牧草等が作付けられている。収量は高い方である。

C 地力保全上の問題点

作土が火山灰土、心土が沖積土であるから深耕又は混層耕により作土、心土を混合することが望ましい。また酸性も呈するので矯正が必要である。

D 分布

広尾郡大樹町開進、石坂、中島

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

松 山 東 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A~1 断面の特徴

第1層は厚さ17~18cm、腐植含量10%内外、土性はSLである。色は10YRで彩度1、明度1~2である。疎なく、発達弱度の細粒状構造を呈し、ち密度10前後で頗る疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.5~5.7、下層との境界は直線明瞭である(火山灰層)。

第2層は厚さ15~20cmで、腐植含量20%内外、土性はSiCLが主である。色は10YRで彩度1、明度1である。疎なく、発達弱度の細塊状構造を呈し、細孔を含む。ち密度14~16で疎、pH(H<sub>2</sub>O)5.3前後。下層との境界は波状漸変である。

第3層は厚さ15~20cm、腐植含量10%内外、土性はL~OLである。色は10YRで彩度3~4、明度2~5である。未風化細、小、中円礫を含み、発達弱度の塊状構造を呈す。

細孔を僅かに含む、ち密度15~17で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.5前後。下層との境界は不規則である。

第4層は概ね50cm以下で、円礫層となっている。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町字松山 試坑 No.14

層位	深さ cm	特徴
第1層	0~17 cm	腐植に頗る富む黒色(10YR <sup>1</sup> /1)のSL、発達弱度の細粒状構造、ち密度10で頗る疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.5、調査時の湿り半乾、層界直線明瞭(火山灰層)。
第2層	17~32 cm	腐植に頗る富む黒色(10YR <sup>1</sup> /1)のSiCL、疎なく、発達弱度の細塊状構造、細孔を含む、ち密度16で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.3、調査時の湿り湿、層界波状漸変。
第3層	32~47 cm	腐植に頗る富む黒褐色(10YR <sup>2</sup> /3)のSiL、未風化細、小中円礫を含む、発達弱度の塊状構造、細孔を僅かに含む、ち密度18で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.5、調査時の湿り湿~潤、層界不規則漸変。
第4層	47 cm~	未風化円礫層。

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-17	4.7	44.1	27.6	16.1	12.1	SL	57.5	2.47	6.09	0.43	14
2	17-32	12.8	8.7	22.5	50.3	18.5	SiCL	44.4	2.31	13.88	0.85	16
3	32-47	10.9	12.2	35.3	49.2	3.3	SiL	—	—	7.62	0.53	14

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	10.5	5.5	4.6	2.71	25.7	6.8	1.0	1.0	26.5	1.139	8.1
2	23.9	5.3	4.6	9.04	52.3	3.2	10.3	0.5	6.1	—	7.1
3	13.1	5.5	4.8	3.62	33.2	0.6	0.4	0.4	1.69	—	—

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては当縁統、松山統、美成統、崩和統があるが、当縁統は低位泥炭であり、松山統、美成統とは下層の堆積様式が異り、又崩和統とは礫層の有無により区別される。

A-3 母材 非固結火成岩／非固結水成岩（凝灰質物）

A-4 堆積様式（火山性）／水積（河成堆積）

B 地形

標高50m前後の段丘上の平坦地

C 気候

春夏濃霧の影響があり、夏季は冷涼、秋季は好天となるが気温が低下し、初霜が早い。

D 植生及び利用状況

山林が多く、一部耕地に利用されて、えん麦、馬鈴薯、菜豆その他が作付けられているが、排水不完全のためその収量は低い。

E 農業上の留意事項

小河川の流域に分布し、近くに小山があつてこれの伏流水の影響も加わり排水不良となつている。捕水渠によつて伏流水をしゃ断し、明渠排水の設置等によつて、土壌の乾燥を凶らなければならない。土壌は酸性を呈するから排水後石灰の施用が必要である。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌（北海道立中央農業試験場）

昭和39年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡略分級式
松山東統一松山東区	III d w f n II e

② 土壌区別説明

松山東統一松山東区

示性分級式

土 壤	有 効	表 土	耕 耘	表 土	表 土	表 土	透 地	自 然	保 湿	保 固	土 層	養 分	置 換	有 酸	障 碍	傾 倒	傾 倒	侵 入	耐 風	耐 風
生 産	土 層	土 層	の 風	の 乾	の 水	の 水	潤 肥	肥 定	塩 基	の 石	苦 加	燐 害	学 理	的 的	傾 倒	傾 倒	傾 倒	傾 倒	傾 倒	傾 倒
可 能	厚 深	含 難	土 着	硬 乾	性 性	性 性	度 度	刀 刀	態 態	量 量	" "	" "	" "	度 度	性 性	斜 斜	斜 斜	斜 斜	斜 斜	斜 斜
等 級	さ さ	量 易	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —
III	t d g p			w		f		n		i	S		e							
I	III I I	1 1 1	1 1 1	III	2 2 3	III	1 2 3	III	2 2 1 3	2	I	1 1 I	— — —	II	1 2 1					
簡略分級式 III d w f n II e																				

## A 土壌区の特徴

この土壌区は松山東統に属する。作土の厚さは17～18 cmで中庸である。有効土層は概ね50 cm以下で浅い。作土は火山灰からなり粗粒質で、粘着性弱く農具の使用は容易である。地表下50 cm前後の礫層に達するまでの間は黒色～黒褐色の腐植に頗る富む層からなり、中には腐植含量20%以上の黒泥土に類似した層を挟むところもある。透水性は右程悪くないが、小河川の流域で、川底が稍高く、又、山からの伏流水も加わって排水不良となつている。

保肥力は作土が大で、心土は更に強大であり、燐酸固定力は作土は中庸であるが、心土は強大である。土層の塩基状態は作土、心土共不良で、酸性を呈す。

養分は燐酸が不足し、その他の養分も多い方ではない。

特殊の障害性は存在しない。

## B 植生及び利用状況

山林が多く、一部分耕地として利用され、えん麦、馬鈴薯、菜豆その他が作付けられているが、収量は低い。

## C 地力保全上の問題点

明渠排水或は暗渠排水の設置及び山からの伏流水しや断のため排水渠等の設置等が必要であるが、一部川底が浅いため十分な排水が困難なところも存在する。

排水効果の期待出来得るところは排水溝設置後、酸性矯正のため炭カル10a当り250～300 kgの施用が必要である。

## D 分布

広尾郡大樹町松山、中大樹、大和。

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌（北海道立中央農業試験場）

昭和39年3月31日

振 別 統
-------

### (1) 土壌統の概況

#### A 土壌の特徴

##### A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20 cm内外、腐植含量は4.7%内外、土性はSLである。色は10YR、彩度2、明度2である。礫はなく発達弱度の細粒状構造、ち密度20前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.3前後。下層との境界は判然。

第2層は厚さ10 cm内外、腐植含量は6.1%内外、土性はLiCである。色は10YR、彩度1、明度1である。小中円礫あり、発達中度の粒状構造、細孔あり、ち密度21で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.1、下層との境界は判然である。

第3層は厚さ18 cm内外、腐植を欠く、土性はLSである。色は2.5Yで彩度4、明度1、小中円礫含む、単粒状構造、孔隙なし、ち密度18前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.5、下層との境界は漸変である。

第4層は厚さ12 cm内外、土性はSiC、腐植を欠き土は2.5Yで彩度2、明度4である。礫なく、単粒状構造、細孔あり、ち密度16で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.4、下層との境界は明瞭である。

第5層は厚さ20 cm内外、土性はLiC、腐植含量7.7%、色は10YRで彩度1、明度1である。小円礫あり、発達弱～中度の粒状構造、細孔あり、ち密度20で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.5、下層との境界は判然である。



代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町振別 試坑 No.2.6.3

第1層	0~20 cm	腐植あり黒褐(10YR <sup>2</sup> / <sub>2</sub> )のSL、礫なく発達弱度の粒状構造、ち密度20で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.3前後、層界判然。
第2層	20~30 cm	腐植を含む黒(10YR <sup>1</sup> / <sub>1</sub> )のLiC、小中円礫あり、発達中度の粒状構造、細孔あり。ち密度21で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.1、層界判然。
第3層	30~48 cm	腐植を欠く黄褐(2.5Y <sup>5</sup> / <sub>4</sub> )のLS、小中円礫含む、単粒状構造、孔隙なし、ち密度18で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.5、層界漸変。
第4層	48~60 cm	腐植を欠く黄褐灰(2.5Y <sup>4</sup> / <sub>2</sub> )のSiC、礫なく、単粒状構造、細孔あり、ち密度16で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.4、層界判然。
第5層	60~81 cm	腐植を含む黒(10YR <sup>1</sup> / <sub>1</sub> )のLiC、小円礫あり、発達中度の粒状構造、細孔あり、ち密度20で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.5、層界判然。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	組砂	シルト	粘土						
1	0-20	2.0	36.7	36.2	16.2	10.9	SL	102.7	2.08	2.70	0.24	11
2	20-30	3.9	25.3	26.6	22.7	25.4	LiC	87.0	2.51	3.56	0.36	10
3	30-48	2.0	52.4	33.3	7.2	7.1	LS	119.5	2.55	—	—	—
4	48-60	4.2	5.5	20.9	47.0	26.6	SiC	69.7	2.25	—	—	—
5	60-81	5.8	11.9	23.3	37.6	27.2	LiC	—	—	4.48	0.49	9

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	4.7	5.3	4.3	4.50	13.5	3.43	0.86	0.56	25.4	622	6.9
2	6.1	5.1	4.2	5.75	25.6	8.35	0.76	0.67	32.6	1195	1.9
3	—	5.5	4.2	5.00	9.35	2.72	0.67	0.21	28.1	465	1.4
4	—	5.4	4.2	6.75	2.48	9.75	2.05	0.22	39.3	1128	0.8
5	7.7	5.5	4.3	5.25	3.91	12.00	2.55	0.19	30.7	1742	1.1

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては日方統、上大樹統、ペタン統等があるがペタン統とは堆積様式が異なり、日方統、上大樹統とは堆積年代が異なるので区分した。

A-3 母材 非固結火成岩/非固結水成岩

A-4 堆積 風積/水積

B 地形 平坦

C 気候

春夏海霧があり、夏季は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、農業上良好な気象条件ではない。

D 植生及び利用状況

大部分が耕地として利用され、ビート、馬鈴薯、えん麦、大豆、小豆、菜豆、牧草等が作付けられている。収量は高い方である。

E 農業上の留意事項

地力は高い方である。しかし塩基の状態が悪く酸性を呈していること、腐植含量が少ないことが問題になるので、堆厩肥、石灰を施し漸次深耕し作土層を深くして行くことが大切である。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 菊地 晃 二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡略分級式
振別統一振別区	IIgfne

② 土壌区別説明

振別統一振別区

示性分級式（畑）

	土表有表耕	土透保湿	自保固土	養層分換	酸微有物	障有物	災増地	傾自傾人	侵耐
	効土	表表表	然	の性	効	害理	冠す	斜	水風
	土	土の	の風	の性	量	物的	水べり	然為	水風
	産土	のの	乾の	の性	量	害質	害の	の	蝕
	刀	の屑	の水	潤肥	定塩	の石	苦加	の	蝕
	可	の屑	の乾	沃	状豊	含	要	の	蝕
	能	の土	粘	沃	状豊	含	要	の	蝕
	厚	含難	着硬	沃	状豊	含	要	の	蝕
	性	深	性性	性性	刀刀	態量	素度	無性	度度
	等		性性	性性	刀刀	態量	素度	無性	度度
	級	ささ	量易	湿	度	否	性	性	斜
II	tdgp	w	f	n	i	a	S	e	
	I I I	I 1 1	I 1 2 2	II 2 1 3	II 3 2 1 2	-2	I 1 1	I 1 1	I 1 - - II 2 1 2
簡略分級式		IIgfne							

A 土壌区の特徴

この土壌区は振別統に属する。表土の厚さは25cm以上、有効土層は1m以上で深い。土性は壤質で農具の使用は容易である。透水性中、保水力中で過湿、過干のおそれが少ない。保肥力中、固定力小で自然肥沃度は中庸である。石灰少、苦土、磷酸中、加里多で養分は中庸である。障害性は無い。

B 植生及び利用状況

大部分が耕地として利用され、ビート、馬鈴薯、えん麦、豆類、牧草等が作付けられている。収量は高い方である。

C 地力保全上の問題点

地力は高い方である。しかし塩基の状態が悪く酸性を呈している。また腐植含量も少ない。従って堆厩肥、石灰を施用し漸次深耕し作土層を深くして行くべきである。

D 分布

広尾郡大樹町振別、坂下

調査及び記載責任者 菊地 晃 二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

平 和 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15cm内外、土性はSLである。腐植含量7.1%、色は10YRで彩度2、明度2である。礫なく、単粒状構造、孔隙なし、ち密度1.0で疎、pH(H<sub>2</sub>O)5.4との境界は明瞭である。

第2層は厚さ11cm内外、土性はLiCである。腐植含量32.2%、色は10YRで彩度1、明度1である。礫なく、発達弱度の粒状構造、細孔あり、ち密度1.3で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.3、下層との境界は判然である。

第3層は厚さ14cm内外、土性はLiCである。腐植含量16.8%、色は10YRで彩度3、明度2である。礫なく、均質連結状構造、細孔あり、ち密度1.6で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.4、下層との境界は漸変である。

第4層は40cm以下で70cmから湧水する。腐植を欠き、色は2.5YRで彩度2、明度4である。礫なく、均質連結状構造、細孔あり、黄褐の斑紋あり、ち密度1.4で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.8である。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町拓北 試坑 No.231

第1層	0~15cm	腐植を含む黒褐(10YR <sup>2</sup> /2)のSL、礫なく、単粒状構造、孔隙なし、ち密度1.0で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.4、層界明瞭。
第2層	15~25cm	腐植にすこぶる富む黒(10YR <sup>1</sup> /1)のLiC、礫なく発達弱度の粒状構造、細孔あり、ち密度1.3で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.3、層界判然。
第3層	26~40cm	腐植に富む黒褐(10YR <sup>2</sup> /3)のLiC、礫なく、均質連結状構造、細孔あり、ち密度1.6で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.4、層界漸変。
第4層	40cm~	腐植を欠く黄褐灰(2.5Y <sup>4</sup> /2)のCL、礫なく、均質連結状、細孔あり、黄褐の斑紋あり、ち密度1.4で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.8、70cmから湧水。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-15	3.5	49.9	31.0	12.4	6.7	SL	62.1	2.04	4.14	0.33	13
2	15-26	10.3	9.5	19.0	34.5	37.0	LiC	45.4	1.72	18.70	1.16	16
3	26-40	8.6	2.2	31.3	27.2	39.3	LiC	53.1	2.12	9.74	0.67	15
4	40-	8.0	3.1	49.5	32.2	5.4	CL	-	-	-	-	-

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	7.1	5.4	4.5	1.75	14.5	5.17	0.35	0.26	35.7	783	3.3
2	32.2	5.3	4.2	6.25	66.6	18.10	1.45	0.75	27.2	2,374	0.2
3	16.8	5.4	4.3	7.50	44.2	5.30	1.09	0.35	12.0	2,472	0.4
4	-	5.8	4.6	2.25	44.4	44.30	1.38	0.70	10.0	2,239	8.7

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては拓北統があるが母材、堆積様式が異なるので本統と区分される。

A-3 母材 非固結火成岩/非固結水成岩

A-4 堆積様式 風積/水積(沖積)

B 地形 平坦~傾斜

C 気候

春夏海霧があり、夏季は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、農業上良好な気象条件ではない。

D 植生及び利用状況

山林が多く、一部耕地に利用され、えん麦、牧草、大豆等が作付けられている。排水不完全のためその収量は低い。

E 農業上の留意事項

小河川の流域に分布し、また台地からの伏流水も加わり排水不良となつている。補水渠により伏流水の設置によつて土壌の乾燥を図らなければならない。又酸性も呈するので石灰の施用が必要である。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土壌区名	簡略分級式
平和統一平和区	III w n II f a e

② 土壌区別説明

平和統一平和区

示性分級式(畑)

土表有表耕	土	目	養	陸	災	傾	侵		
製効土	表表表	透保湿	保固土	置	有微酸	有物	増地	自傾入	侵耐耐
生土	耘土土	地	然	層分換	" "	効	害理	冠す	斜
産土の	の風			の性	態量	物的	水べ	然為	水風
力の層	のの	乾の	水水潤肥肥定塩の	石苦加	磷	害質	害の	の	蝕
可の	の粘	土		基	灰土里酸要	の陸	危危	傾方傾	蝕蝕
能厚	含難	着乾	沃	状豊	含	有	害	險險	
性等	深	性性	さ	性性	度	刀刀	態量	" "	素度
等		性性	さ	性性	度	刀刀	態量	" "	素度
級	さ	量	易	湿	度	否	性	性	斜
III	t d g p	w	f	n	i	a	S	e	
	I I I I	1 1 1	III 3 3 3	II 2 2 2	III 2 3 2 3	- 2	I 1 1	II 2 1	I 1
									— II 2 2 1
	簡略分級式 III w n II f a e								

A 土壌区の特徴

この土壌区は平和統に属する。表土の厚さは25cm以上、有効土層は1m以上で深い。表土の土性は壤質で農具の使用は容易である。透水性小、保水力大で過湿のおそれが多い。保肥力中、固定力小、自然肥沃度は中庸である。

石灰、加里中、苦土、磷酸少、酸度中、養分は少ない。増冠水を受ける危険性が多少ある。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

山林が多く、一部耕地に利用され、えん麦、牧草、大豆等が作付けられている。排水不良のため収量は低い。

C 地力保全上の問題点

小河川の流域に分布した台地からの伏流水も加わり排水不良となつている。従つて補水渠により伏流水をおさえ、明渠排水、暗渠排水を設置してその効果を上げる必要がある。

D 分布

広尾郡大樹町拓北

調査及び記載責任者 菊地 晃二（北海道立中央農業試験場）

昭和41年3月31日

野 塚 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ10~20cm、腐植含量7.4%内外、土性はSLである。色は10YRで彩度2し明度2で小円礫あり、構造は無構造、ち密度1.5~1.9で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.6前後、下層との層界は直線明瞭である。

第2層は腐植含量少なく、土性はSLである。色は2.5Yで彩度6、明度5で小円礫あり、発達弱度の粒状構造、塊状構造、ち密度1.5~1.7で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.9前後、下層との層界は不規則明瞭である。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡広尾町 試坑 No.3

第1層	0~14cm	腐植を含む黒褐(10YR2/2)のSL、小円礫あり、無構造、細孔あり、ち密度1.9で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.6、調査時の湿り半乾、層界直線明瞭。
第2層	14~60cm	腐植を欠く、明黄褐(2.5Y5/6)のSL、小円礫含み、発達弱度の粒状塊状構造、細孔あり、ち密度1.7で中、pH(H <sub>2</sub> O)5.9、調査時の湿り半乾、層界不規則明瞭。

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-14	3.5	22.9	45.5	22.2	9.3	SL	97.0	2.29	4.48	0.29	1.5
2	14-60	2.3	8.4	75.1	11.9	4.5	SL	102.7	2.68	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	7.45	5.6	4.4	4.00	1.59	3.4	0.4	1.7	2.11	1.277	3.9
2	—	5.9	4.5	3.00	7.4	0.5	0.3	0.2	6.9	6.69	2.2

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては、香福統、香福南統とがあるが、香福統とは成因、堆積様式が異なる。  
香福南統とは礫層の有無により本統と区分される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積（河成堆積）

B 地形

標高50~70mで平坦。

C 気候

夏季海霧があり、一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、かつ較差が大きく、しばしば冷害をうける気象条件下にある。

D 植生及び利用状況

大部分が放牧地、林地、荒地になつており、耕地として利用されているのは少ない。主に牧草、えん麦などの飼料作物が作付けられている。

E 農業上の留意事項

地力が劣るので堆肥の補給が大切である。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌（北海道立中央農業試験場）

昭和39年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 分	簡略分級式
野塚統一野塚	III n f II e

② 土壌区別説明

野 塚 統 一 野 塚 区

示 性 分 級 式（畑）

土 壤 生 産 力 可 能 性 等 級	表 効 土 土 産 力 可 能 性 等 級	表 耘 土 土 産 力 可 能 性 等 級	表 表 土 土 産 力 可 能 性 等 級	表 表 土 土 産 力 可 能 性 等 級	土 透 水 性 湿 度	自 保 潤 肥 沃 度	自 保 固 定 刀 刀 度	養 置 換 性 石 灰 量	有 酸 性 燐 量	隨 化 学 的 的 害 害	傾 自 然 傾 斜	傾 人 為 傾 斜	侵 入 為 傾 斜	耐 風 水 蝕 蝕 性 耐 性	
III	t d g p	w	f	n	i	s	e								
	I I I I	2 1 1 I	1 2 1 III	2 1 3 III	3 3 1 2 2 I	1 1 I 1	— — II 1 2 1								
簡略分級式		III n f II e													

A 土壤区の特徴

この土壤区は野塚統に属する。表土の厚さは14~20cm内外、有効土層は70~100cmでやゝ深い。砂質で極小の小円礫があるが、農具の使用に当つて抵抗は少ない。保肥力中、磷酸固定力は作土、心土共に小さい。塩基の状態は不良である。養肥分は石灰、苦土含量は少ないが加里含量は多い。磷酸は中庸である。地形は平坦であるが河川に接しているために、多雨や融雪時に一時的に水蝕のおそれがある。特殊な障害はない。

B 植生及び利用状況

大部分放牧地、林地として利用され、耕地として利用されているのは少ない。主に牧草、えん麦等の飼料作物が作付けられている。

C 地力保全上の問題点

地力が劣るので塩基と堆厩肥の補給が必要である。

D 分布

広尾郡大樹町興農。

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

日	方	統
---	---	---

(1) 土壤統の概説

A 土壤の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15cm内外、腐植含量は5.8%内外、土性はSLである。色は10YR、彩度2、明度2である。礫なく、単粒状構造、ち密度20前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.5前後。下層との境界は判然である。

第2層は厚さ10cm内外、腐植は2.6%内外、土性はCLである。色は2.5Y、彩度2、明度4である。礫なく発達弱度の粒状構造および塊状構造で、細孔および中孔あり、ち密度は20前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)は5.5前後。下層との境界は波状漸変する。

第3層は2.5cm以下、腐植を欠き、土性はSLである。色は2.5Y、彩度4、明度4である。礫はなく発達弱度の塊状構造で細孔あり、ち密度は17前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.6前後。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町日方 試坑 No.276

第1層	0~15cm	腐植に富む黒褐(10YR <sup>2</sup> /2)のSL、礫はない。単粒状構造、ち密度20前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.5前後、境界判然。
第2層	15~25cm	腐植を含む黄褐灰(2.5Y <sup>4</sup> /2)のBL、礫なく発達弱度の粒状および塊状構造で細孔、中孔あり、ち密度20前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.5前後。境界波状漸変。
第3層	2.5cm~	腐植を欠く暗黄褐(2.5Y <sup>4</sup> /4)のSL、礫なく発達弱度の塊状構造で細孔あり、ち密度17前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.6前後。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0—15	2.4	21.0	44.8	22.3	11.9	SL	93.4	2.38	3.36	0.30	11
2	15—25	3.0	0.5	51.0	32.8	15.7	CL	102.6	2.19	1.51	0.20	8
3	25—	1.9	0.9	72.4	16.2	10.5	SL	107.6	2.66	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度 %	リン酸吸収 係数	有効態リン酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	5.8	5.5	4.4	4.50	14.2	3.08	0.17	0.47	21.7	7.87	3.3
2	2.6	5.5	4.4	7.50	12.6	1.21	0.52	0.33	9.6	1.144	0.4
3	—	5.6	4.4	5.50	8.5	1.02	0.17	0.29	12.0	7.74	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては松山統、振別統があるが松山統とは母材、堆積様式が異なり、振別統とは腐植含量が異なるので本統と区別される。

A-3 母材 非固結火成岩/非固結水成岩

A-4 堆積様式 風積/水積

E 地形 平坦

C 気候

春夏海霧があり、夏季は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが、同時に気温が低下し、農業上良好な気候ではない。

D 植生及び利用状況

大部分が耕地として利用され、ビート、馬鈴薯、豆類、牧草等が作付けられている。収量は中庸である。

E 農業上の留意事項

地力は中庸である。塩基含量少く、土壌は酸性を呈している。また腐植含量も少ない。従つて堆厩肥、緑肥、塩基を補給しつつ漸次深耕して作土層を深めて行くべきである。

F 分布

広尾郡大樹町日方

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡略分級式
日方統一日方区	III n II w f e

② 土壌区別説明

日 方 統 一 日 方 区



示 性 分 級 式 (畑)

土表有表耕	土	自	養	障	炭	傾	侵
壤効土表表表透保湿保固土置有微酸有物増地自傾人侵耐耐	生土耘土土の地然層分換	効	害理冠す	斜	為	水風	
産土のの風の性態量物的水べ然斜	刀の層のの乾の水水潤肥肥定塩の石苦加磷	害質障	害のの	傾	傾	蝕	
可の礫粘土の乾沃状豊含	能厚含難土着硬	基灰土里酸要	の害危危傾方傾蝕蝕	有	險		
等性深	性性さ性性度力力態量	素度無性度度斜向斜度性性					
級ささ量易	湿	度	否	性	性	斜	蝕
Ⅲ t d g p	w	f	n	i	a	s	e
I I I I 1 1 1	II 1 2 2	II 2 2 3	III 3 3 1 2	— 2	I 1 1	I 1 1	I 1 — II 1 1 2
簡略分級式		III n II w f e					

A 土壤区の特徴

この土壤区は日方統に属する。表土の厚さは25cm以上で深い。有効土層は1m以上で深い。土性は壤質で農具の使用は容易である。透水性中、保水力で過湿のおそれがある。保肥力中、固定力小で自然肥沃度は中庸である。石灰、苦土少なく、燐酸中、加里が多く酸度は中である。養分は少ない。障害性はない。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

大部分が耕地として利用され、ビート、馬鈴薯、豆類、牧草等が作付けられている。収益は中庸である。

C 地力保全上の問題点

地力は中庸である。塩基含量少なく、土壌は酸性を呈している。また腐植含量も少ない。従つて堆厩肥、緑肥、塩基を補しつつ漸次深耕して作土層を深めて行くべきである。

F 分布

広尾郡大樹町日方。

調査及び記載責任者 菊地 晃 二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

崩 和 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ12~15cm、腐植含量10%内外、土性はSLである。色は10YRで彩度1~3、明度1~3である。礫なく、発達弱度の細粒状構造を呈し、ち密度11~15で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.4~5.8。下層の境界は直線明瞭である。(火山灰層)。

第2層は厚さ5cm前後。腐植含量5~8%、土性はSLが主である。色は10YRで彩度1~4、明度1~3である。礫なく単粒構造もしくは発達弱度の細粒状構造を呈し、細孔を含む。ち密度12~17で疎。pH(H<sub>2</sub>O)5.4前後。下層との境界は直線明瞭である(本層は粗粒火山灰とその上の多腐植層を合せたもので、作土層の深いところは、この粗粒火山層は作土に混合されている)。

第3層は厚さ15~25cmで(第2層を欠く場合は第2層となる)、腐植含量15~20%、土性はCL~Cである。色は10YR~2.5Yで彩度0~3、明度1~2である。疎なく、発達中程度の粒状構造と細塊状構造を呈し、細小孔を含む。ち密度1.4~1.6で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.2前後。下層との境界は波状漸変する。

第4層は厚さ10~40cmで、腐植含量5%内外、土性はCL~Cである。色は10YR~2.5Yで彩度2~6である。疎なく、発達弱度の塊状構造もしくは均質連結状構造を呈し、細小中孔を含む。ち密度1.5~2.0で疎~中である。微弱なグライを呈するか、脈状、斑状の酸化沈積物を含むところがある。pH(H<sub>2</sub>O)5.6前後。下層との境界は波状少々明瞭である。

第5層は地表下60~80cm以下で、腐植含量2%以下、土性はSL~CLである。色は10YR~7.5Yとかなり幅があり、彩度2~6、明度5~7である。疎なく、発達弱度の塊状構造もしくは均質連結状を呈し、細小孔を含む。弱グライを呈するか、膜状、斑状の酸化沈積物に含む~富むものが多く、ち密度1.5~2.2で疎~中である。

### 代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町字萌和 試坑 No.156

第1層	0~12cm	腐植に頗る富む黒色(10YR <sup>2</sup> / <sub>1</sub> )のSL、疎なく、発達弱度の細粒状構造、ち密度1.1で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.5、調査時の湿り半乾、層界直線明瞭(火山灰層)。
第2層	12~20cm	腐植を含む黒色(10YR <sup>2</sup> / <sub>1</sub> )のSL、疎なく、発達弱度の細粒状構造、細孔を含む、ち密度1.4で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.4、調査時の湿り半乾、層界波状少々明瞭。
第3層	20~40cm	腐植に頗る富む黒色(2.5Y <sup>1</sup> / <sub>0</sub> )のHC、疎なく、発達弱度の粒状構造と細塊状構造の複合構造、細小孔を含む。ち密度1.4で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.2、調査時の湿り湿、層界波状漸変。
第4層	40~80cm	腐植に富む灰黄褐色(2.5Y <sup>4</sup> / <sub>2</sub> )のHC、疎なく、均質連結状構造を呈し、ち密度1.5で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.6、調査時の湿り湿、層界波状少々明瞭。
第5層	80cm~	腐植を欠く黄灰色(7.5Y <sup>5</sup> / <sub>2</sub> )のSL、疎なく、均質連結構造、ち密度1.5で疎、膜状、斑状の酸化沈積物に富む。調査時の湿り潤。

### 代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒徑組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-12	4.9	43.8	28.1	15.4	12.6	SL	66.0	2.44	5.58	0.41	14
2	12-20	3.7	53.1	27.2	13.0	6.7	SL	88.5	2.43	3.38	0.26	13
3	20-40	9.9	2.1	12.4	38.8	46.8	HC	54.2	2.20	11.93	0.88	14
4	40-80	7.5	1.3	19.5	31.5	47.7	HC	70.2	2.62	3.44	0.30	11

層位	腐植 %	pH		置換酸度		置換容量		置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	燐酸吸収係数	有効態燐酸mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl	Y <sub>1</sub>	me/100g	CaO	MgO	K <sub>2</sub> O					
1	9.6	5.4	4.5	4.97	17.5	4.0	0.6	0.5	2.29	932	15.4		
2	5.8	5.4	4.6	3.84	11.3	1.6	0.5	0.4	13.8	—	7.1		
3	20.6	5.2	4.2	12.43	35.5	8.5	0.9	1.2	24.1	—	—		
4	5.9	5.6	4.4	6.33	26.5	2.6	0.5	0.7	9.8	—	—		

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接又は類似する統としては、更正統、崩和東統、美成統、松山統、晩成西統があるが、更正統、美成統、松山統とは下層の堆積様式並びに腐植層序の相違により本統と区別される。崩和東統、崩和西統は崩積、扇状堆積物からなるため、又、晩成西統とは堆積様式が異なるので夫々本統と区別される。

A-3 母材 非固結火成岩／非固結水成岩

A-4 堆積様式 風積（火山性）／水積（河成堆積）

B 地形

標高20～70mの段丘上の平坦地で、小河川の流域に分布している。

C 気候

濃霧の襲来があり、農期間は冷涼、秋季は比較的好天となるが、同時に気温が低下する等農業上不利な気候下にある。

D 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大豆、菜豆、小豆、馬鈴薯、ビート、えん麦、牧草等の作物が作付けられている。本調査区内では収量は少々高い方であるが、排水不完全なところは低収量である。

E 農業上の留意事項

本統内に流下する小河川の川底が浅いこと、又河川の蛇行により、或は山地からの伏流水の影響等によつて、地下水位が高く一般に排水不良となつている。現在、芽武附近まで河川改修工事が実施されて来ている。これの進捗に伴つて排水が可能となるので、明渠排水、暗渠排水、又伏流水のあるところは捕水渠等の設置により排水を行うことが第一番に必要である。

土壌は酸性を呈するので、排水後石灰施用が必要である。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌（北海道立中央農業試験場）

昭和39年3月31日

(1) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡略分級式
崩 和 統 一 崩 和 区	III wf II ne

② 土壌区別説明

崩 和 統 一 崩 和 区
---------------

示 性 分 級 式

土 壤 生 産 力 可 能 性 等 級	有 効 土 層 の 厚 さ	表 土 層 の 深 さ	耕 耘 土 層 の 容 易 さ	表 土 の 粘 着 性	表 土 の 乾 硬 さ	土 地 の 水 乾 湿	透 水 性	保 湿 性	自 然 沃 土 度	保 固 力	土 層 換 換 率	養 分 含 量	置 換 性	苦 土 含 量	加 里 含 量	燐 酸 含 量	障 害 障 害	化 学 的 障 害	理 学 的 障 害	傾 斜 傾 斜	傾 斜 傾 斜	人 為 傾 斜	侵 蝕 侵 蝕	耐 風 蝕 耐 水 蝕	
Ⅲ I I I I 1 1 Ⅲ 2 2 3 Ⅲ 2 2 3 Ⅱ 2 2 2 2 2 I 1 1 I 1 — — Ⅱ 1 3 1																									
簡 略 分 級 式	Ⅲ w f		Ⅱ n e																						

A 土 壤 区 の 特 徴

この土壌区は崩和統に属する。作土の厚さは12～15cmで少々浅い。有効土層は1m以上で深い。作土は粗粒火山灰土からなり、粘着性弱く農具の使用は容易である。作土の下は腐植に頗る富む多腐植層が地表下60～80cmまで続き、細粒質で、透水性は少々悪く、地下水の影響を受けて排水不良な土壌である。

保肥力は中庸、燐酸固定力は作土は中庸であるが、下層は強力で、塩基状態も不良である。

養分は石灰、苦土、加里は少々少い方であり、燐酸含量が少い。

特殊の障害性は存在しないが、排水不良のため湿害を受けることがある。

B 植 生 及 び 利 用 状 況

大部分耕地として利用され、大豆、菜豆、小豆、馬鈴薯、ビート、牧草その他の作物が作付けられている。

C 地 力 保 全 上 の 問 題 点

河川の川底が浅く、又川が蛇行しているため、或は伏流水の影響により排水不良となつているので、明渠又は暗渠排水による土地の排水が必要である。

川底が浅いため排水に困難性を伴うところがかかなりあるが、そのようなところは、現在下流から実施して来ている河川改修工事の進捗を待たなければならない。

伏流水の影響が強いは捕水渠の設置が必要と思われる。

酸性を呈するので、炭カルの施用(10a当り350～400Kg)による酸性矯正が望ましい。

一部作土直下に粗粒火山灰が未耕土となつて存在するところがあるが、かかるところは深耕して粗粒火山灰層を作土に混層することが望ましい。

一般に加里、苦土等の養分含量が少々少いので、施肥は加里、苦土を中心とすることが望ましい。

D 分 布

広尾郡大樹町生苗、美成、崩和。

調査及び記載責任者名 高 尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

芽 武 南 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ10~17 cm、腐植含量5~6%、土性はSLである。色は10YRで彩度1~3、明度2~3である。礫なく、発達弱度の細粒状構造を呈し、ち密度7~14で疎~頗る疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.9~6.2。下層との境界は直線明瞭である(火山灰層)。

第2層は10~20 cm、腐植含量5%内外、土性はL~CLである。色は2.5Yで彩度2~3、明度2~4である。礫を含まず、発達弱度~中度の細塊状構造を呈し、細孔を含む。ち密度14~17で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.9前後。下層との境界は波状漸変である。

第3層は厚さ10~20 cm、腐植含量2%以下、土性はSL~Lである。色は2.5Yが主で彩度4~6、明度4~5である。礫を含まず、発達弱度の細塊状、塊状構造を呈し、ち密度14~17で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)6.0前後。下層との境界は波状漸変する。

第4層は厚さ15~20 cmで、腐植含量2%以下、土性はSLが主である。色は2.5Yのものが多く彩度4~6、明度4~5である。未風化細小中円礫を含む~富むところが一部ある。発達弱度の塊状構造を呈し、ち密度14~18で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)6.1前後。下層との境界は不規則漸変である。

第5層は概ね地表下50~60 cm以下であるが、局部的に地表下30 cm前後のところもあり、未風化円礫層となつている。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町字芽武 試坑 No.41

層位	深 さ cm	説 明
第1層	0~16 cm	腐植に富む黒色(10YR <sup>2</sup> /1)のSL、礫なく、発達弱度の細粒状構造、ち密度12で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.0、調査時の湿り半乾。境界直線明瞭(火山灰層)。
第2層	16~25 cm	腐植を含む黒褐色(2.5Y <sup>2</sup> /2)のCL、礫なく、発達弱度の細塊状構造、細孔を含む、ち密度14で疎、pH(H <sub>2</sub> O)5.9、調査時の湿り半乾。層界波状漸変。
第3層	25~35 cm	腐植を欠く黄褐色(2.5Y <sup>5</sup> /4)のSL、礫なく、発達弱度の細塊状構造、細孔を含む、ち密度14で疎。調査時の湿り半乾。層界波状漸変。
第4層	35~60 cm	腐植を欠く黄褐色(2.5Y <sup>5</sup> /4)のSL、礫なく、発達弱度の細塊状構造、細孔を含む、ち密度14で疎。調査時の湿り湿。層界不規則漸変。
第5層	60 cm ~	未風化円礫層。

代表的断面の分析成績

層位	深 さ cm	水分 %	粒 径 組 成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土						
1	0-16	2.9	36.0	40.3	15.4	8.3	SL	85.6	2.50	3.31	0.26	13
2	16-25	3.8	12.6	49.2	22.0	16.1	CL	105.3	2.62	2.85	0.21	14
3	25-35	1.9	20.0	64.5	5.5	10.0	SL	118.6	2.63	—	—	—
4	35-60	2.5	5.6	62.3	22.2	10.2	SL	108.8	2.78	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	5.7	6.0	4.8	1.13	1.19	5.6	0.5	0.6	46.6	646	23.0
2	4.9	5.9	4.5	4.97	13.2	4.2	0.6	0.5	31.5	—	3.5
3	—	6.0	4.5	4.29	6.8	1.7	0.4	0.5	25.4	—	—
4	—	6.1	4.4	5.65	9.3	2.5	0.8	0.7	26.4	—	—

#### A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては、更正統、松山統、日方川統、芽武西統があるが、更正統、松山統とは下層の堆積様式の差異により、日方川統は最表層から河成沖積物からなり、芽武西統とは腐植層序の相違により夫々本統と区別される。

#### A-3 母材 非固結火成岩 / 非固結水成岩

#### A-4 堆積様式 風積(火山性) / 水積(河成堆積)

#### B 地形

標高10~20mの平坦な河岸段丘地。

#### C 気候

農期間は冷涼で、海霧の影響を受ける。秋は比較的好天となるが同時に気温が低く、農業上不利な条件下にある。

#### D 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大豆、菜豆、小豆、馬鈴薯、ビート、牧草等が栽培されており、収量は中庸である。

#### E 農業上の留意事項

一般に作土が浅いから漸次深耕して作土層を深めることが望ましい。又一部作土直下に粗粒火山灰層が未耕土となつているところは、これを作土層と混和する必要がある。

#### F 分布

広尾郡大樹町芽武、興農。

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

#### (2) 土壌統の細分

##### ① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
芽武南統一芽武南区	II t d f n e

##### ② 土壌区別説明

芽武南統一芽武南区

示性分級式

土	表	有	表	耕	(	(	(	土	(	(	(	目	(	(	(	養	(	(	(	(	障	(	(	傾	(	(	侵	(	(
壤	効	土	表	表	表	透	保	湿	保	固	土	置	有	酸	化	物	学	理	的	的	障	障	障	障	障	障	障	障	障
生	土	土	土	土	土	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然	然
産	土	土	土	土	土	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
力	の	の	の	の	の	風	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾
可	層	の	の	の	の	粘	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土
能	の	の	の	の	の	着	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬	硬
性	厚	深	深	深	深	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性
等	量	易	易	易	易	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿	湿
級	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ
Ⅱ	t	d	g	p		w		f		n		i		s		e													
	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ
簡略分級式		Ⅱ t d f n e																											

A 土壌区の特徴

この土壌区は芽武兩統に属する。作土の厚さは10～17cmで一般に少々浅い。有効土層は中庸か、少々浅いところがある。

最表層は火山灰土からなり、粗粒質で粘着性弱く農具の使用は容易である。

保肥力中庸、磷酸固定力小で、土層の塩基状態も少々中庸であるが、下層は少々不良である。

養肥分は少々中庸である。

特殊の障害性は存在しない。

B 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大豆、菜豆、小豆、馬鈴薯、ビート、牧草等が栽培されている。収量は中庸である。

C 地力保全上の問題点

一般に作土層が浅いので、漸次深耕して作土層の深化を図ることが望ましい。

作土層直下に粗粒火山灰層の未耕土となつて存在しているところは作土層との混和が必要である。

D 分布

広尾郡大樹町芽武、興農

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

石 坂 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ16cm内外、土性はCLである。色は2.5Y、彩度2、明度4である。疎なく発達強度の粒状構造、ち密度1.3前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.3前後。下層との境界は判然である。

第2層は厚さ24cm内外、腐植含量2.5%内外、土性はLiCである。色は2.5Y、彩度2、明度4である。疎なく発達強度の塊状構造で細孔、小孔あり、ち密度1.7前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)5.9前後。下層との境界は漸変。

第3層は厚さ20cm内外、腐植を欠き、土性CLである。色は2.5Y、彩度2、明度4である。礫なく発達弱度の塊状構造で細孔、小孔あり、ち密度20前後で中、pH(H<sub>2</sub>O)6.0前後。下層との境界は不規則明瞭である。

第4層は60cm以下で円礫層である。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町石坂 試坑 No.272

第1層	0~16cm	腐植を含む黄褐灰(2.5Y <sup>4</sup> /2)のCL、礫なく発達弱度の粒状構造、ち密度13前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.3前後、境界漸変。
第2層	16~40cm	腐植を含む黄褐灰(2.5Y <sup>4</sup> /2)のLiC、礫なく発達弱度の塊状構造で細孔、小孔あり、ち密度17前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)5.9前後、境界漸変。
第3層	40~60cm	腐植を欠く黄褐灰(2.5Y <sup>4</sup> /2)のCL、礫なく発達弱度の塊状構造で細孔、小孔あり、ち密度20前後で中、調査時の湿り半乾、pH(H <sub>2</sub> O)6.0前後、境界不規則明瞭。
第4層	60cm~	円礫層。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-16	2.7	17.2	28.3	32.4	22.1	CL	110.3	2.27	2.17	0.27	8
2	16-40	3.3	0.5	25.4	44.2	29.9	LiC	103.6	2.48	1.43	1.43	6
3	40-60	2.4	3.8	38.4	37.6	20.2	CL	—	—	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	3.7	5.3	4.3	2.75	17.0	8.23	0.68	1.27	48.4	804	9.9
2	2.5	5.9	4.7	0.50	21.7	14.7	1.86	0.60	67.8	1,017	6.2
3	—	6.0	4.6	1.00	16.7	11.6	2.05	0.40	69.5	759	3.9

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては開進統があるが本統は作土、心土共に沖積土であるが開進統は作土が粗粒状火山灰土、心土が沖積土で堆積様式が異なるので本統と区分した。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積

B 地形 平坦

C 気候

春夏海霧があり、夏季は一般に冷涼、秋季は比較的好天に恵まれるが同時に気温が低下し農業上良好な気象条件ではない。

D 植生及び利用状況

肥沃な土壌である。殆んど大部分が耕地化され、ビート、馬鈴薯、豆類、牧草等が作付けられている。収量は高い。



E 農業上の留意事項

肥沃な土壌であるが更に地力を維持して行くために堆厩肥を増施し、石灰を施こして漸次深耕を行い作土層を深くすることが望ましい。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 菊地 晃二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡略分級式
石坂統一石坂区	II p w f n

② 土壌区別説明

石坂統一石坂区

示性分級式 (畑)

土	表	表	耕	土	自	養	障	災	傾	侵													
壤	効	表	表	透	保	湿	保	固	土	置	有	微	酸	有	物	増	地	自	傾	人	侵	耐	
生	土	耘	土	土	の	地	然	層	分	換	"	"	効	害	理	冠	す	斜	為	水	風		
産	土	の	風	の	乾	の	水	水	潤	肥	定	塩	の	石	苦	加	燐	害	質	害	の	の	蝕
刀	の	層	の	粘	土	の	沃	基	灰	土	里	酸	要	の	障	の	危	危	傾	傾	方	蝕	
可	能	厚	性	深	含	難	着	硬	沃	状	豊	含	"	"	"	"	素	度	無	性	度	度	蝕
等	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性
級	さ	さ	量	易	湿	度	否	性	性	斜	蝕												
II	t	d	g	p	w	f	n	i	a	s	e												
I	I	I	II	2	2	2	II	2	2	2	2	II	1	2	1	2	-	2	I	1	1	I	1
I	1	1	I	1	1	I	1	1	1	1	1	I	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
簡略分級式		II p w f n																					

A 土壌区の特徴

この土壌区は石灰統に属する。表土の厚さは25cm以上、有効土層は1m以上で深い。土性は粘質で農具の使用に当つてかなりの抵抗がある。透水性中、保水力大で過湿のおそれがある。保肥力中、固定刀小で自然肥沃度は中庸である。石灰、加里多、苦土、燐酸中、酸度中で養分は中庸である。障害性はない。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

大部分が耕地として利用され、ビート、馬鈴薯、豆類、牧草等が作付けられている。収量は高い。

C 地力保全上の問題点

肥沃な土壌であるが更に地力維持、増進するために有機物、石灰を施用しつつ漸次深耕して行くことが大切である。

D 分布

広尾郡大樹町石坂

調査及び記載責任者 菊地 晃二 (北海道立中央農業試験場)

昭和41年3月31日

日 方 川 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15~18 cm、腐植含量4~5%、土性はLである。色は2.5 Yで彩度2、明度3~4である。巨、大円礫の存在するところがある。発達弱度の粒状構造と細塊状構造の複合構造を呈し、ち密度8~12で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)5.9~6.3。下層との境界は直線明瞭である。

第2層は厚さ10~13 cmで、腐植含量2%内外、土性はLのところとSLのところがある。色は10 YR~2.5 Yで彩度2~4、明度2~6である。細孔を含み、発達中度の粒状もしくは細塊状構造を呈するところと、発達弱度の粒状構造のところがあり一定しない。ち密度12~18で疎である。pH(H<sub>2</sub>O)6.3前後。下層との境界は波状もしくは不規則漸変である。

第3層は厚さ10~30 cmで、腐植含量2%以下、土性はSLが主である。色は5 Yが主で彩度4、明度5のものが多い。単粒構造を呈し、ち密度13~16で疎である。下層との境界は不規則漸変である。

第4層は地表下33~70 cm以下で、未風化円礫層のところがある面積の半ばを占めている。円礫層でないところは、腐植を欠き、土性はSLである。色は5 Yで彩度4、明度4~5であり、単粒状構造を呈している。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 広尾郡大樹町日方 試坑 No.21

第1層	0~18 cm	腐植を含む黒褐色(2.5 Y <sup>3</sup> /2)のL、発達弱度の細粒状構造、未風化巨、大円礫の散在するところあり、ち密度12で疎、pH(H <sub>2</sub> O)6.3、調査時の湿り半乾、層界直線明瞭。
第2層	18~33 cm	腐植を含む黒褐色(2.5 Y <sup>2</sup> /2)のL、礫なく、発達中度の粒状構造と細塊状構造の複合構造、ち密度18で中、pH(H <sub>2</sub> O)6.3、調査時の湿り半乾、層界波状漸変。
第3層	33~67 cm	腐植を欠く暗灰黄色(5 Y <sup>5</sup> /4)のSL、礫なく、発達弱度の細塊状構造、細孔を含む、ち密度16で疎、調査時の湿り湿、層界波状漸変。
第4層	67 cm~	腐植を欠く暗灰黄色(5 Y <sup>4</sup> /4)のSL、礫なく、単粒状構造、ち密度14で疎、調査時の湿り湿。

代 表 的 断 面 の 分 析 成 績

層位	深 さ cm	水分 %	粒 径 組 成 %				土 性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			細砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-18	3.3	16.6	4.62	23.5	13.6	L	81.2	2.55	4.93	0.49	11
2	18-33	3.5	7.7	51.7	21.6	18.9	CL	102.7	2.63	1.44	0.18	8

層位	腐 植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換性塩基 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽 和度%	燐酸吸収 係 数	有効態燐酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	4.6	6.3	5.3	1.25	14.4	11.9	1.3	0.9	82.7	6.21	24.5
2	2.7	6.3	5.1	0.25	12.8	10.6	1.6	0.8	82.3		25.5

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接又は類似する統としては芽武南統、芽武西統があるが、芽武南統は最表層が火山灰に被覆されており、芽武西統とは腐植層序、礫層の有無により夫々本統と区分される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積(河成堆積)

B 地形

標高20~40mの平坦な河岸段丘

C 気象

農期間冷涼で、春夏海霧の襲来あり、秋季は比較的好天になるが、同時に気温が低下し、農業上不利な気象条件下にある。

D 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大豆、菜豆、小豆、馬鈴薯、ビートその他の作物が栽培され、収量は比較的高い。

E 農業上の留意事項

最も新しい沖積地で地味は良好である。

土層の堆積状況が比較的乱雑で、下部の礫層の出現位置が不規則で一定しない。地表に巨、大円礫の出現するところがあり、このようなところは除礫が必要である。

F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡略分級式
日方川統一日方川区	II t d g f i

② 土壌区別説明

日方川統一日方川区

示性分級式

土	表	有	表	耕	(	(	(	土	(	(	(	自	(	(	養	(	(	(	障	(	(	傾	(	(	侵	(	(	耐			
壤	効	土	表	表	表	透	保	湿	保	固	土	置	有	酸	化	物	学	理	的	的	然	斜	為	水	風	耐	耐	耐			
生	土	土	土	土	土	地	然																								
産	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土	土		
力	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の		
可	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の		
能	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の		
性	厚	含	難	土	着	硬	乾	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃	沃		
等	深	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性		
級	さ	さ	量	易	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一		
II	t	d	g	p	w	f	n	i	s	e																					
II	II	II	I	1	1	1	I	1	2	1	II	2	2	1	I	1	1	1	2	1	II	1	2	I	1	—	—	I	1	1	1
簡略分級式	II t d g f i																														

## A 土壌区の特徴

この土壌区は日方川既に属する。作土の厚さは12～18 cmで中庸、礫層の出現が一定せず、有効土層は概ね50 cm以下であるが、30 cm前後の浅いところも存在する。

表土は中粒質で、粘着性中庸～弱で農具の使用は左程困難はない。

保肥力中庸であるが、一部に保肥力の稍々小さいところがあり、燐酸固定力中庸、塩基状態は良好である。

養肥分は中庸もしくは良好である。

特殊の障害性はないが、地表に巨、大円礫の散在するところがあり、農業上支障を来している。

## B 植生及び利用状況

大部分耕地として利用され、大豆、小豆、菜豆、馬鈴薯、ビート等が作付されており、収量は比較的高い。

## C 地力保全上の問題点

巨、大円礫が地表に散在し農耕上支障となつているところがあるから、このようなところは除礫が必要である。

一部礫層が浅く、土性は粗粒質で且つ腐植含量の少ないところがあり、早魃を呈するところがある。かかるところは埴質土壌の客入又は緑肥の栽培、堆厩肥の施用等によつて保水力、保肥力の増大を図る必要がある。

## D 分布

広尾郡大樹町更正、芽武

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌（北海道立中央農業試験場）

昭和39年3月31日

# 当 録 川 統

## (1) 土壌統の概説

### A 土壌統の特徴

#### A-1 断面の特徴

第1層は厚さ10～15 cmで、腐植含量8%内外、土性はL～Cである。色は2.5 Y～7.5 Yで彩度2、明度4～6のものが多く、発達弱度の細粒状構造を呈し、膜状、斑状の酸化沈積物に富むものが多く、ち密度7～15で頗る疎～疎である。pH (H<sub>2</sub>O) 5.3。下層との境界は直線明瞭である。

第2層は厚さ10～20 cm 腐植含量2～3%、土性はCL～Cである。色は5 Y～7.5 Yで彩度2、明度4～6である。疎なく、発達弱度の細塊状構造を呈し、斑状の酸化沈積物に富む～頗る富む。細小孔を含み、ち密度14～18で疎である。pH (H<sub>2</sub>O) 5.5 前後。下層との境界波状漸変。

第3層は厚さ5～15 cmで、腐植含量5～8%、土性はCが主である。色は7.5 Yのものが多く彩度1～2、明度3～6である。疎を含まず、均質連結状構造のものが多く、ち密度10前後で疎である。pH (H<sub>2</sub>O) 5.3。ヨシの分解不良の根を含んでいる。下層との境界波状明瞭。

第4層は厚さ10 cm前後、腐植を欠く粗粒火山灰層となつているものが多く、色は暗灰、淡黒色の混合色である。単粒構造を呈し、下層との境界は直線明瞭である。

第5層は地表下約30～50 cm以下、ヨシ、スゲ、ハンノキからなる亜泥炭のところが多く、色は5 Y～7.5 Yで彩度1～2、明度2～4である。pH (H<sub>2</sub>O) 5.3 前後である。

一部は泥炭を含まない鉾質土壌からなつており、このようなところは、土性Cで、膜状、斑点、脈状の酸化沈積物に頗る富むかもしくはグライを呈している。

代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町字美成 試坑 No.118

第1層	0~13 cm	腐植に富む黄褐色(0.25 Y <sup>6</sup> /2)のSiC、疎なく、発達弱度の細粒状構造、と密度1.5で疎、膜状、斑状の酸化沈積物に富む、pH(H <sub>2</sub> O) 5.3、調査時の湿り湿、層界直線明瞭。
第2層	13~35 cm	腐植を含む黄灰(5 Y <sup>4</sup> /2)のCL、疎なく、発達弱度の細塊状構造、細小孔を含む、膜状、斑状の酸化沈積物に富み、ち密度1.8で疎、pH(H <sub>2</sub> O) 5.5、調査時の湿り潤、境界波状漸変。
第3層	35~40 cm	腐植を含む(泥炭を僅かに含む)、黄灰色(7.5 Y <sup>5</sup> /1)のC、均質連結状構造、ち密度1.6で疎、調査時の湿り潤、層界波状明瞭。
第4層	40~50 cm	粗粒火山灰層、腐植を欠く。
第5層	50 cm~	黄灰色(5 Y <sup>4</sup> /2)の亜泥炭、均質連結状構造、pH(H <sub>2</sub> O) 5.3、調査時の湿り潤、60 cmで湧水。

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0-13	6.4	0	10.3	55.9	33.7	SiC	85.0	2.30	4.93	0.49	10
2	13-35	4.6	0.2	4.18	3.62	21.8	CL	105.8	2.57	1.44	0.18	8
3	50-63	7.9	0.3	4.3	51.8	43.6	SiC	—	—	—	—	—

層位	腐植 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	磷酸吸収 係数	有効態磷酸 mg/100g
		H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	8.5	5.3	4.1	21.69	30.7	6.7	1.4	1.2	22.0	1.090	tr
2	2.5	5.5	4.1	18.90	18.7	5.4	1.5	0.3	2.92	—	tr
3	—	5.3	4.1	15.25	22.6	10.0	2.2	0.4	44.2	—	—

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接又は類似する統としては、崩和統、当緑統、ベタン等があるが、何れも堆積様式が異なるので本統と区分される。

A-3 母材 非固結水成岩(凝灰質砂岩主体)

A-4 堆積様式 水積(河成堆積)

B 地形

標高10m~50m前後の低平地

C 気候

農期間の気温冷涼、春夏は海霧の影響を受ける。秋季比較的好天となるが、同時に気温が低下する。農業上不利な気候条件下にある。

D 植生及び利用状況

半ば近く耕地として利用されているが、開墾後日の浅いところが多い。大豆、菜豆、馬鈴薯、えん麦、牧草等が栽培されているが、排水不完全と熟畑に至っているところが多いため収量は低い。耕地以外は山林原野又は牧草地となつている。



### C 地力保全上の問題点

計画的な明渠、暗渠排水の実施により、又伏流水の影響のあるところは排水渠の設置も加味した排水が必要である。

酸性を呈するから炭カルを施用(10a当り400~450Kg)して矯正する必要がある。

有機物が少々少く、燐酸含量少いから、堆厩肥、緑肥等有機物を施用し、燐酸、苦土等を中心に施肥し、作土の熟畑化を図ることが望ましい。

### D 分布

広尾郡大樹町生苗、当緑、美成。

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

## 当 縁 統

### (1) 土壌統の概説

#### A 土壌統の特徴

##### A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15cm前後。主としてヨシ、スゲからなる分解少々不良な泥炭。pH(H<sub>2</sub>O)5.2。下層との境界は直線明瞭。

第2層は厚さ10mm前後、灰白色と黒色の混合からなる粗粒火山灰。単粒構造pH(H<sub>2</sub>O)5.8。下層との境界は直線明瞭。

第3層は厚さ17cm前後、ヨシ、ホロムイスゲを主とする分解少々不良な泥炭。pH(H<sub>2</sub>O)5.1~5.3。下層との境界は直線少々明瞭。

第4層は厚さ15~20cm、ホロムイスゲ、ヨシ、ハンノキからなる分解不良な泥炭。pH(H<sub>2</sub>O)4.9前後。下層との境界直線明瞭。

第5層は地表から概ね60cm以下で、ヨシ、ホロムイスゲからなる亜泥炭。

### 代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町字美成 試坑 No115(未耕地)

第1層	0~15cm	ヨシ、スゲからなる泥炭、分解少々不良、pH(H <sub>2</sub> O)5.2、層界直線明瞭。
第2層	15~28cm	灰白と黒の混合色からなる粗粒火山灰、pH(H <sub>2</sub> O)5.8、単粒構造、層界直線明瞭。
第3層	28~45cm	ヨシ、ホロムイスゲからなる泥炭、分解少々不良、pH(H <sub>2</sub> O)5.1、層界直線少々明瞭。
第4層	45~63cm	ホロムイスゲ、ヨシ、ハンノキを主材とする泥炭、pH(H <sub>2</sub> O)4.9、層界直線少々明瞭。
第5層	63cm~	ヨシ、ホロムイスゲをかなり含む亜泥炭。

代表的断面の分析成績

層位	深 さ cm	水 分 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽 和度%	磷酸吸取 係 数	有効態磷酸 mg/100g
			H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	M <sub>2</sub> O			
1	0—15	8.2	5.2	4.4	13.11	29.0	3.6	1.6	0.4	12.4	1,306	tr
2	15—28	0.9	5.8	4.9	15.0	5.4	0.3	0.4	0.0	5.6	520	tr
3	29—45	6.6	5.1	4.1	21.25	34.2	6.5	2.5	0.2	19.1	—	—
4	45—63	5.3	4.9	4.1	16.73	—	4.5	3.1	0.1	—	—	—

A-2 他の土壌統の関係

本統に隣接又は類似する統としては、美成統、更正統、萌和統、アイボンマ統等があるが、美成統、更正統、萌和統とは堆積様式が異り、又アイボンマ統は中間泥炭なので、夫々本統と区別される。

A-3 母材 ヨシ、スゲ

A-4 堆積様式 集積(低位泥炭)

B 地 形

標高10m前後の低平地及び標高40m前後の低平地。

C 気 候

夏季の気候冷涼で、春夏海霧の影響を受ける。秋季は比較的良好となるが、気温が低下する。

D 植生及び利用状況

殆んど原野として放置されているが、一部家畜の放牧に利用していることもある。

原野には谷地坊主が存し、ヨシ、スゲ、ヤチヤナギ、ワレモコウ、ゼンマイ等が繁茂し、ヤチンノキが散在して群生する。

E 農業上の留意事項

農地として利用する場合は、基幹となる幹線大明渠の堀さくをし、計画的な明渠排水、暗渠排水工事を施行して土地の排水を図ることが最も必要である。

酸性を呈するから、排水施行後酸性矯正をしなければならない。

尚、谷地坊主が多く存在するので、開墾に当つては機械力等による排除が好ましい。

磷酸、加里の含量が比較的低いから開墾当初は多肥が必要である。

D 分 布

広尾郡大樹町

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
当縁統一当縁区	IVw IIIfn II t

② 土壌区別説明

当縁統一当縁区



示性分級式

土	表	有	表	耕	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—							
壤	効	土	表	表	表	透	保	湿	保	固	土	缸	有	酸	化	物	自	傾	—	—	—	—	—	—		
生	土	土	耘	土	土	地			然		層	分	換	"	"	効	学	理	斜	為	水	風				
産	土	の	の	の	乾	の	水	水	潤	肥	定	塩	の	石	苦	加	燐	害	的							
刀	の	層	の	の	粘	土	の	乾						基	灰	土	里	酸	障	障	傾	方	傾			
可	厚	の	含	難	土	着	硬	乾		沃		基	状	豊	含	"	"	"	害	害	傾	方	傾			
能	深	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	斜	向	斜	反	性	性
等	さ	さ	量	易	—	—	湿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	斜	向	斜	反	性	性
級	さ	さ	量	易	—	—	湿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	斜	向	斜	反	性	性
	t	d	g	p		w		f		n				i	s		e									
Ⅳ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
簡略分級式	Nw Ⅲfn Ⅱt																									

A 土壌区の特徴

この土壌区は当緑統に属する。表土は15cm内外で稍々浅く、有効土層は1m以上で深い。最表層近く粗粒火山灰層が存在する低位泥炭で、主材はヨシ、スゲ類から構成されている。最下層は鉍質土壌を混ざる重泥炭である。

保肥力大、燐酸固定力中庸で、塩基状態は不良である。

養肥分は燐酸、加里含量が少ない。

B 植生及び利用状況

殆んど原野のまま放置されているが、一部家畜の放牧に使用している。

C 地力保全上の問題点

アイボシマ川流域に広がる地帯は現在幹線大明渠排水工事がかなり進んでいるので、今後計画的な集水明渠排水と暗渠排水の実施が必要である。

次に酸性矯正が必要である。炭カル所要量は概ね600kg/10a前後である。更に落成燐肥等の投入(40~50kg/10a)が望ましく、土壌は燐酸、加里等に欠乏しているから、これらを中心に施肥を考えることが望ましい。

D 分布

広尾郡大樹町生苗、当緑、美成。

調査及び記載責任者 高尾欽彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

アイボシマ統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ8cmで、ヨシ、ワタスゲ、ヌマガヤを主体とする分解不良な泥炭。pH(H<sub>2</sub>O)5.5、下層との境界は直線明瞭。

第2層は厚さ10cm前後で、灰白色の黒色の粗粒火山灰。単粒構造を呈し、pH(H<sub>2</sub>O)5.8前後。下層との境界は直線明瞭である。

第3層は厚さ28cm前後で、ワタスゲ、ヌマガヤ、ヨシを主材とする分解少々不良な泥炭層。pH (H<sub>2</sub>O) 5.3前後。下層との境界は波状漸変である。

第4層は地表から概ね45cm以下で、ヨシ、スゲからなる泥炭層、分解程度中。

### 代表的断面形態

(所在地) 広尾郡大樹町字美成 試坑 No.116 (未耕地)

第1層	0~8cm	ワタスゲ、ヌマガヤ、ヨシからなる分解不良な中間泥炭。pH (H <sub>2</sub> O) 5.5、調査時の湿り潤、層界線明瞭。
第2層	8~17cm	灰白、黒色の混合色の粗粒火山灰、単粒構造、pH (H <sub>2</sub> O) 5.8、調査時の湿り湿、境界直線明瞭。
第3層	17~45cm	ワタスゲ、ヌマガヤ、ヨシからなる分解少々不良な中間泥炭、pH (H <sub>2</sub> O) 5.3、調査時の湿り潤、層界波状漸変。
第4層	45cm~	ヨシ、スゲを主材とする低位泥炭、分解中程度、調査時の湿り潤。

### 代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度%	磷酸吸収 係数	有効態磷酸 mg/100g
			H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1	0-8	4.8	5.5	4.7	5.42	20.8	3.1	1.5	0.3	14.6	1.419	tr
2	8-17	0.9	5.8	4.9	1.50	5.4	0.3	0.4	0.0	5.6	5.20	tr
3	17-45	9.6	5.0	4.1	11.72	—	6.2	3.0	0.1	—	—	—

#### A-2 他の土層統との関係

本土層統に隣接又は類似する統としては、美成統、更正統、崩和統、当縁統があるが、美成統、更正統、崩和統とは堆積様式が異り、当縁川統は泥炭或は亜泥炭の上へ河川による氾濫土が堆積したものであり、又当縁統は本統と同じく集積土であるが低位泥炭のため夫々本統と区別される。

#### A-3 母材

ワタスゲ、ヌマガヤ、ヨシ/ヨシ、スゲ

#### A-4 堆積様式

集積(中間泥炭)

#### B 地形

標高10~20mの低平地。

#### C 気候

夏季は気温冷涼で、春夏海霧の襲来がある。秋は比較的好天となるが同時に気温が低下する。

#### D 植生及び利用状況

殆んど原野のまま放置され、一部家畜の放牧に利用されているに過ぎない。

#### E 農業上の留意事項

農地として利用する場合は、隣接する低位泥炭地も含めた計画的な排水工事が必要で、これには先づ基幹となる幹線明渠の実施が先決であり、その後明渠排水の施行を進めることによつて排水が効果的となる。

酸性を呈するので、排水後酸性の矯正が必要であり、養肥分は特に磷酸、加里が不足しているので、施肥に当つてはこの点の留意が必要である。

#### F 分布

広尾郡大樹町

調査及び記載者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

(2) 土壌統の細分

土 壤 区 名	簡略分級式
アイボシマ統一アイボシマ区	Nw III f m

② 土壌区別説明

アイボシマ統一アイボシマ区

示 性 分 級 式

土 壤 生 産 力 可 能 性 等 級	表 効 土 層 的 厚 深	有 効 土 層 的 厚 深	耕 耘 土 層 的 厚 深	表 土 層 的 厚 深	表 土 層 的 厚 深	表 土 層 的 厚 深	土 層 的 厚 深	透 透 透	保 保 保	湿 湿 湿	目 然	固 固 固	土 質 土 質 土 質	養 分 換 換 換	置 置 置	有 効 効 効	酸 性 性 性	化 学 的 的 的	障 碍 碍 碍	傾 斜 斜 斜	自 然 然 然	傾 斜 斜	人 為 為 為	侵 蝕 蝕 蝕	耐 風 風 風	耐 風 風 風	
	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	易 易 易	
	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	
	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	I I I	
簡略分級式	Nw III f n																										

A 土壌区の特徴

この土壌区はアイボシマ統に属する。表層近く10cm内外の粗粒火山灰層を挟む中間泥炭であり、泥炭の分解は不良である。酸性を呈し、石灰を始め各種養分含量が少い。

B 植生及び利用状況

ワタスゲ、ヌマガヤ、ヤチヤナギ等が主に生育し、殆んど原野のまま放置されている。

C 地力保全上の問題点

農地として利用する場合は、隣接する低位泥炭地も含めた計画的な排水工事が必要である。これには幹線明渠を設置し、その後明渠排水、更に暗渠排水を実施することによつて排水が効果的となる。酸性を呈するので、排水後、炭カルを施用(10a当400~450kg)して酸性矯正をしなければならぬ。又養分も少く、開墾当初は特に燐酸、加里を重点にした施肥(炭成燐肥40~50kg/10a改良資材として施用が望ましい)。

D 分布

広尾郡大樹町当縁

調査及び記載責任者 高尾 欽 彌 (北海道立中央農業試験場)

昭和39年3月31日

### 3 保全対策地区区分及び説明

#### 1) 保全対策地区の説明

土壌の性状及び主要な保全対策を検討の上、次の9保全対策地区を設定した。

保全対策地区名	該当土壌区	面積(ha)	主な特徴	重要な保全対策
更正	美成 更正 拓北	2,448	平坦 乾燥地 風蝕大 腐植含量少 作土層浅い 下層土の磷酸吸収力大きい	防風林の完備 緑肥作物の増加及び堆厩肥の肥用 磷酸肥料の多施 有機物を多用しつつ漸次深耕
崩和	崩和 松山東 晩成西 平和	1,172	平坦 排水不良 酸性を呈す 作土層が一般に浅い	河川改修の促進 暗渠排水の実施 炭カルの施用 漸次深耕
石坂	石坂 芽武南 振別 開進 野塚 日方	1,252	平坦 一般に腐植含量が少ない 酸性を呈す	有機物を施用しつつ漸次深耕 炭カル施用
東和	東和 尾張	693	平坦並びに一部緩傾斜地 適潤である 下層土の磷酸吸収力大きい	有機物、塩基を補給し漸次深耕 磷酸肥料の多施
日方川	日方川 上大樹	734	平坦 地表から巨大礫 有効土層が浅い 腐植含量少ない	除礫 緑肥作物の増加及び堆厩肥の施用
アイボンマ	アイボンマ 当縁 当縁川	922	平坦 泥炭及び泥炭質 排水不良 酸性を呈す	幹線大明渠 客土 酸性矯正 保全耕作
ベタン	晩成 崩和西 崩和東 ベタン	512	傾斜地 水蝕を受ける 一時的に過湿となる 有効土層が浅い	保全耕作 捕水渠の設置
松山	松山 尾田 大和 下大樹	2,448	平坦 風蝕大 乾燥地 腐植含量少ない 有効土層が浅い	防風林の完備 除礫 緑肥作物の増加及び堆厩肥の施用
光知園	光知園	413	平坦～緩傾斜地 排水不良 酸性を呈す 心土の磷酸の吸収力大きい	明渠、暗渠排水の実施 炭カルの施用 磷酸肥料の多施

2) 保全対策地区説明

<更正保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積(ha)	備考(該当土壌区名)
広尾郡大樹町	2,448	美成統一美成区 更正統一更正区 拓北統一拓北区

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

① 特徴と問題点

平坦もしくは波状性緩傾斜地で水蝕は軽微であるが、春季一時的な乾燥期に季節風の襲来によつて風蝕をうけ、かなりの被害をうける。表土は主として粗粒質の火山灰からなり、腐植含量少なく、養肥分の保持力は比較的小さく、流亡し易いものと思われる。一般に表土が少々浅く、風蝕によつて更に表土の薄くなつているところが多い。有効態磷酸が少ない、苦土にも欠乏している。

② 営農の方向

豆類を主とする穀菽経営が行なわれているが、最近乳牛を主とする主畜経営への転換を行いつつあることは気候的、土壌的に見て妥当であると思われる。牧草地を拡大して風蝕の防止を軽減すると共に堆厩肥、緑肥等の有機物の施用によつて保肥力の増大と地力の増進を図り併せて漸次深耕して作土層を深めて行くことが大切である。

3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象の面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械、器具の種類、型式、数量
防風林の完備	美成 更正 拓北 2,448	幹線防風林の整備 計画的伐採 耕地防風林の整備育成 牧草導入	カラマツ苗木 牧草種子の補助
牧草地の拡大 堆厩肥の施用	" "	主畜経営の推進確立	乳牛導入の助成 畜産施設の融資補助
漸次深耕	" "	緑肥作物導入 有機物を施用しながら漸次深耕	トラクター導入
施肥の合理化	" "	磷酸、加里、石灰、苦土 肥料の施用	石灰(200~300Kg/10a) 苦土(4~6Kg/10a)

<崩和保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積 (ha)	備考 (該当土壌区)
広尾郡大樹町	1,172	崩和統一崩和区 松山東統一松山東区 晩成西統一晩成西統 平和統一平和区

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

① 特徴と問題点

平坦～緩傾斜地で腐植層が深く、最表層は粗粒火山灰層で被覆されている。地下水位が高く排水不良である。また作土、心土共に塩基状態が不良である。従つて積極的に排水を行い、石灰、堆厩肥を施用して地力を向上させるように努めるべきである。

② 営農の方向

穀類経営、混同経営、主畜経営等が営まれているが、本地帯の気候的な影響で主畜経営の方向に進みつつあるが経営の不振な農家が多いようである。土地基盤整備、土壌改良によつて生産力の向上を計り家畜の増加を計ることが必要である。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象の面積 (ha)	実施方法	対策資材及び機械、器具の種類、型式、数量
排水	崩和 松山東 晩成西 平和 1,172	河川改修の促進 暗渠排水、一部捕水渠の設置	土管、工事費の補助
酸性矯正	" "	炭カルの施用	炭カル (200～300kg/10a)
深耕	" "		トラクター導入助成

<石坂保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積 (ha)	備考 (該当土壌区)
広尾郡大樹町	1,252	石坂統一石坂区 日方統一日方区 振別統一振別区 芽武南統一芽武南区 開進統一開進区 野塚統一野塚区

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

① 特徴と問題点

地力は一般に中庸である。腐植含量少ない。塩基の状態が悪く酸性を呈している。積極的に石灰、堆厩肥を増肥し漸次深耕して行くべきである。

② 営農の方向

豆類を主とする穀菽経営が行なわれているが最近乳牛を主体とする主畜経営への転換を行いつつあることは気候的に見て妥当であると思われる。

3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象の面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械、器具の種類、型式、数量
有機物の施用	石坂 振別 開進 野塚 日方 芽武南 1.252	堆厩肥、緑肥の施用	有畜経営の推進
深耕	" "		トラクター導入
酸性矯正	" "	炭カルの施用	

<東和保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積 (ha)	備考(該当土壌区)
広尾郡大樹町	693	京和統一東和区 尾張統一尾張区

(2) 保全対策地区の特徴

① 特徴と問題点

平坦もしくは波状性緩傾斜地で水蝕のおそれは少ない。しかし春季の一時的な乾燥期に季節風の襲来によつて風蝕を受ける。表土は粗粒の火山灰からなり、腐植含量は深いが養肥分の保持力は比較的弱く、流亡しやすいものと思われる。有効態磷酸は少ない。

② 営農の方向

豆類を主とする穀菽経営が行なわれているが、最近乳牛を主とする主畜経営への転換を行いつつあることは気候的、土質的に見ても妥当であると思われる。牧草地を拡大して風蝕の防止を軽減すると共に、堆厩肥、緑肥等の有機物の施用によつて保肥力の増大と地力の増進を図り併せて漸次深耕して行くべきである。

### 3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び 対象の面積(ha)	実 施 方 法	対策資材及び機械、器 具の種類、型式、数量
牧草地の拡大 堆厩肥の施用	東 和 尾 張 693	主畜経営の推進、確立	
施肥の合理化	" "	磷酸、加里、苦土、肥料の施用	熔 燐(30Kg/10a) 石 灰(200~300Kg/10a) 苦 土(4~5Kg/10a)
漸次深耕	" "	有機物を施用しながら漸次深耕	トラクター導入助成

#### <日方川保全対策地区>

##### (1) 分布状況

郡市町村名	畑面積(ha)	備考(該当土壌区)
広尾郡大樹町	734	日方川統一日方川区 上大樹統一上大樹区

##### (2) 保全対策地区の特徴と問題点

###### ① 特徴と問題点

河川の流域に分布する最も新しい沖積である。土層の状態が少々乱雑で有効土層が浅い。地表から巨礫が散在し農耕上支障を来すところがある。又一部過湿のおそれがある。地味はやゝ良好である。

###### ② 営農の方向

混同経営、もしくは穀菽経営が行なわれている。一般に腐植含量少なく、極端に巨礫層の浅いところもあるから、堆厩肥、緑肥等の有機物を施す必要がある。従つて家畜を加味した経営の推進が望ましい。

### 3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び 対象の面積(ha)	実 施 方 法	対策資材及び機械、器 具の種類、型式、数量
有機物の施用	日方川 上大樹 734	堆厩肥、緑肥の施用	有畜経営の推進
除 礫 一部客土	" "	礫層が浅く、旱害を被るところは埴質土壌を客入	

#### <アイボシマ保全対策地区>



(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積 (ha)	備考 (該当土壌区)
広尾郡大樹町	922	アイボシマ統一アイボシマ区 当 緑 統一当 緑 区 当 緑 川 統一当 緑 川区

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

① 特徴と問題点

泥炭、泥炭質土である。最表層に粗粒質の火山灰層が存在し、耕地として利用する場合はこの火山灰と泥炭の一部が混合している。泥炭の分解は不良で、当然排水は悪く酸性を呈する。燐酸加里等の養分含量も少ない。これが耕地化するためには計画的な明渠排水の施工、酸性矯正、燐酸資材の投入等多大の経費と努力を要する。

② 営農の方向

排水工専の施工については当初から計画的に実施することが望ましい。台地との境界は伏流水があるので排水渠の施工も合わせて考慮することが望ましい。海霧の影響をかなり強くうけるので牧草栽培を中心とした畜産経営が好ましいと思われる。

③ 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象の面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械、器具の種類、型式、数量
排水	アイボシマ 当 緑 当緑川 922	幹線大明渠排水 明渠暗渠排水	明渠、暗渠排水工事費の補助
酸性矯正	" "	機械刀使用 炭カルの施用	炭カル(450~600kg/10a) ライムソー導入助成
燐酸、加里の補給	" "	熔成燐肥の施用 加里肥料の増施	熔燐(40~50kg/10a)
客土	アイボシマ 当 緑 708	粘土の客入	

<ベタン保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積 (ha)	備考 (該当土壌区)
広尾郡大樹町	512	晩 成 統一晩 成 区 崩 和 西 統一崩 和 西 区 崩 和 東 統一崩 和 東 区 ベ タ ン 統一ベ タ ン 区

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

① 特徴と問題点

表層は一般に粗粒質で耐水蝕性に乏しく、融雪季、降雨時には水蝕をうける。又伏流水の影響により過湿になるおそれがある。また礫が表層から出現するので障害をうける。

② 営農の方向

本地帯の気候的影響で主畜経営の方向に進みつつあるが、経営の不振な農家が多いようである。土地基整備、土壌改良によつて生産力の向上を図り家畜の増加を計ることが必要である。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象の面積(㌧)	実施方法	対策資材及び機械、器具の種類、型式、数量
水蝕防止	晩成 崩和西 崩和東 ベタン 512	流水防止、明渠排水 牧草栽培、緑作帯の設置	指導の徹底
排水	" "	排水渠の設置	指導の徹底

<松山保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積(㌧)	備考(該当土壌区)
広尾郡大樹町	2,448	松山 統一松山区 尾田 統一尾田区 大和 統一大和区 下大樹 統一下大樹区

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

① 特徴と問題点

平坦地で水蝕の心配は少ないが春季一時的な乾燥期に季節風の襲来によつて風蝕をうけ、かなりの被害をうける。表層土は粗粒の火山灰土からなり腐植含量少なく春肥分の保持力は比較的小さく流失し易いものと思われる。一般に表土が少々浅く、風蝕によつて更に表土の薄くなっているところが多い。有効土層が浅く、表土に礫の出現している場合もある。

② 営農の方向

豆類を主とする穀菜経営が行なわれて来ているが、最近乳牛を主体とした主畜経営への転換を行いつつあることは気候的、土壌的条件から見て妥当であると思われる。従つて牧草地を拡大して風蝕の防止軽減を図るとともに、堆厩肥、緑肥等の有機物の施用によつて保肥力の増大と地力の増進を図り併せて漸次深耕して作土層を深めて行くことが大切である。

3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象の面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械、器具の種類、型式、数量
防風林の完備	松山 尾田 大和 下大樹 2.148	幹線防風林の整備 計画的伐採 耕地防風林の整備育成	カラマツ苗木の購入補助
牧草地の拡大 堆厩肥の施用	" "	主畜経営の推進確立	乳牛導入の補助 畜産施設の融資補助
除 稈	" "		
漸次深耕	" "	有機物を施用しながら漸次深耕	トラクター導入
施肥の合理化	" "	磷酸、加里の増肥 苦土の施用	苦土(4~6Kg/10a)

< 光知園保全対策地区 >

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積(ha)	備考(該当土壌区)
広尾郡大樹町	413	光知園統一光知園区

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

① 特徴と問題点

平坦～緩傾斜地で表層は粗粒火山灰土からなる。地下水位が高く不良地となっている。また塩基の状態も悪く酸性を呈している。有効態磷酸も少ない。従って排水を行ない積極的に石灰、磷酸肥料を投入し、同時に堆厩肥を施用しつつ漸次深耕すべきである。

② 営農の方向

最近黒毛和種、乳牛を主体とする主畜経営への転換を行いつつあるがこのことは気候的、土壌的に見ても妥当であると思われる。しかし経営の不振な農家が多いようである。従って土地基盤整備、土地改良などによつて生産力の向上を計り、家畜の頭数を増すように努力すべきである。

3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象の面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械、器具の種類、型式、数量
排水	光知園 413	暗渠、明渠排水	明渠、暗渠排水工事の補助
酸性矯正	" "	機械刀の使用 炭カル施用	炭カル(200~300Kg/10a) ライムソア導入
施肥の合理化	" "	磷酸、加里の増加	熔燐(40~50Kg/10a)

2) 土壤分析成績

保全 対策区	土 壤 区 号	地 点 番 号	層 位	深 さ cm	理 学 性													
					礫 (風 乾 物 中) %	風乾細 土中		細土無機物中					土 性	現地に於ける理学性100CC容中				
						水 分 %	腐 植 %	粗 砂 %	細 砂 %	砂 合 計 %	シ ル ト %	粘 土 %		容 積 重 %	固 相 容 積 CC	水 分 容 積 CC	空 気 容 積 CC	孔 隙 率 %
頁 正	美 成	110	1	0~14	27	59	27.6	45.6	84.2	114	44	SL	854	34.7	37.2	281	65.3	
			2	14~23	91	94	55	30.9	364	575	60	SiL	688	31.4	53.2	154	68.6	
			3	23~50	80	4.7	47	53.1	57.8	422	0	L	689	25.9	53.8	20.3	75.1	
			4	50~70	68	1.3	27	53.7	56.4	288	14.7	CL	917	34.5	49.9	15.6	65.5	
	更 正	75	227	1	0~18	3.2	—	30.5	46.3	76.8	141	9.2	SL	70.7	29.4	35.9	35.0	70.9
				2	18~25	8.2	7.9	12.3	50.1	6.24	37.6	0	L	64.6	26.7	51.9	21.4	73.3
				3	25~37	6.4	2.1	13.2	53.0	6.62	33.8	0	SL	74.2	24.6	45.2	32.2	75.4
				4	37~50	10.0	1.2	27.1	69.1	9.62	3.7	0	—	—	—	—	—	—
蒔 和	蒔 和	156	1	0~12	4.9	9.6	43.8	28.1	71.9	154	12.6	SL	640	27.0	35.8	37.2	73.0	
			2	12~20	3.7	5.8	53.1	27.2	80.3	130	6.7	SL	885	36.3	44.9	18.8	63.7	
			3	20~40	9.9	20.6	21	1.24	14.5	38.3	46.8	HC	54.2	24.6	49.9	25.5	75.4	
			4	40~80	7.5	5.9	1.3	19.5	20.8	31.5	47.7	HC	70.2	26.8	46.7	26.5	73.8	
	松 山 東	14	1	0~17	4.7	10.5	44.1	27.3	71.7	16.1	12.1	SL	57.5	23.3	37.1	39.6	76.7	
			2	17~32	12.8	23.9	8.7	22.5	31.1	50.3	18.5	Si CL	44.4	1.92	56.0	24.8	80.8	
			3	32~47	10.9	13.1	12.2	35.3	47.8	49.2	3.3	SiL	—	—	—	—	—	
			4	47~55	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	晚 成 西	210	1	0~18	3.7	5.6	40.4	36.6	77.0	17.6	5.4	SL	53.8	22.8	50.8	26.4	77.2	
			2	18~40	11.8	15.5	4.3	33.0	37.3	55.9	6.8	SiL	54.8	21.3	55.1	23.6	78.7	
			3	40~55	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			4	55~75	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
平 和	231	1	0~15	3.5	7.1	4.99	31.0	80.9	12.4	6.7	SL	62.1	1.98	4.98	30.4	69.6		
		2	15~26	10.3	32.2	9.5	19.0	28.5	34.5	37.0	LiC	45.4	15.0	58.6	26.4	73.6		
		3	26~40	8.6	16.8	2.2	31.3	33.5	27.2	39.3	LiC	53.1	11.0	64.0	25.0	75.0		
		4	40~	8.0	—	3.1	4.95	52.6	32.0	15.4	CL	—	—	—	—	—		
石 坂	石 坂	272	1	0~16	2.7	3.7	17.2	28.3	45.5	32.4	22.1	CL	110.3	1.10	40.5	48.5	51.5	
			2	16~40	3.3	2.5	0.5	25.4	25.9	44.2	2.99	LiC	103.6	20.6	37.7	41.7	58.3	
			3	40~60	2.4	—	3.8	3.84	42.2	37.6	20.2	CL	—	—	—	—	—	
	振 別	263	1	0~20	2.0	4.7	36.7	36.2	72.9	16.2	10.9	SL	10.27	21.0	29.9	4.95	50.6	
			2	20~30	3.9	6.1	25.3	2.66	51.9	22.7	25.4	LiC	87.0	25.8	39.5	34.7	65.3	
			3	30~48	2.0	—	5.24	3.33	85.7	7.2	7.1	LS	11.95	25.8	27.4	4.68	53.2	
			4	48~60	4.2	—	5.5	20.9	26.4	47.0	26.6	SiC	69.7	22.5	46.5	31.0	69.0	
			5	60~81	5.8	7.7	11.9	23.3	35.2	37.6	27.2	LiC	—	—	—	—	—	

化 学 性												
pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	有 機 物			塩置換容量 me/100g	置換性塩基・g/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸收係数	有効態磷酸 mg/100g
H <sub>2</sub> O	KCl		T-C %	T-N %	C /N		CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
62	51	0.38	3.45	0.24	14	10.0	117.3	6.0	283	422	737	52.3
59	43	12.9	6.02	0.43	14	266	35.9	2.0	209	100	—	0.9
60	5.0	0.25	2.73	0.23	12	19.0	50.3	11.1	86	9.7	—	—
59	40	1.93	—	—	—	14.9	20.0	23.1	121	6.4	—	—
62	5.2	0.50	2.93	0.21	14	10.6	95.3	10.1	58	22.0	84.2	2.8
59	4.9	0.75	4.57	0.32	14	19.0	67.3	8.1	86	12.6	—	tr
4.0	4.9	0.75	1.20	0.15	8	12.9	44.9	8.1	67	12.4	—	—
65	5.1	0.50	0.68	0.09	8	18.4	14.3	14.1	5.6	3.0	—	—
59	4.9	0.75	1.86	0.15	10	7.2	81.3	13.1	14.1	40.4	6.03	tr
59	5.0	0.50	4.56	0.36	13	17.9	95.3	10.1	23.6	1.92	1.975	0.6
57	4.6	1.50	1.50	2.20	8	14.1	30.3	10.1	18.8	10.1	1.709	tr
57	4.5	3.75	—	—	—	13.1	1.96	28.2	18.8	5.5	1.553	tr
5.4	4.5	4.97	5.58	0.41	14	17.5	112.2	12.1	12.5	22.9	9.52	1.54
5.4	4.6	3.84	3.38	0.26	13	11.3	44.9	10.9	11.0	13.8	7.85	9.5
5.2	4.2	12.43	11.93	0.88	14	35.5	238.3	16.1	32.0	24.1	—	—
5.6	4.4	6.33	3.44	0.30	11	26.5	72.9	10.1	20.5	9.8	—	—
5.5	4.6	2.71	6.09	0.43	14	25.7	190.7	20.1	26.9	26.5	1.139	8.1
5.3	4.6	9.04	3.88	0.85	16	52.3	8.7	207.6	13.0	6.1	—	7.1
5.3	4.8	3.62	7.62	0.53	14	33.2	1.68	8.1	11.9	16.9	—	—
6.2	5.2	0.25	3.26	0.30	11	16.0	274.8	14.1	5.4	61.0	88.2	9.1
6.0	4.9	1.00	9.00	0.60	15	37.6	280.4	22.2	5.1	26.5	—	tr
5.9	4.9	0.75	5.92	0.44	13	29.2	137.4	20.2	9.0	1.67	—	—
6.4	5.4	0.25	2.24	0.22	10	12.3	44.9	20.2	11.8	12.6	—	—
5.4	4.5	1.75	4.14	0.33	13	14.5	145.8	8.1	14.1	35.7	7.83	3.3
5.3	4.2	6.25	18.70	1.16	16	6.66	507.0	30.2	37.7	27.2	2.374	0.2
5.4	4.3	7.50	9.74	0.67	15	4.42	148.6	22.2	18.8	12.0	2.472	0.4
5.8	4.6	2.25	—	—	—	4.44	1.234	2.82	3.50	10.0	2.239	8.7
5.3	4.3	2.75	2.17	0.27	8	17.0	22.99	14.1	61.2	4.84	8.04	9.9
5.9	4.7	0.50	1.43	0.23	6	21.7	412.2	38.3	28.3	6.78	1.017	6.2
6.0	4.6	1.00	—	—	—	1.67	3.253	4.23	1.88	6.95	7.59	3.9
5.3	4.3	4.50	2.70	0.24	11	1.35	9.53	1.81	2.83	2.54	6.22	6.9
5.1	4.2	5.75	3.56	0.36	10	2.56	2.35.5	1.41	3.50	3.26	1.195	1.9
5.5	4.2	5.00	—	—	—	9.4	7.57	1.41	9.4	2.81	4.65	1.4
5.4	4.2	6.75	—	—	—	2.48	2.74.8	4.23	9.4	3.93	1.128	0.8
5.5	4.3	5.25	4.48	0.49	9	3.91	3.36	5.24	9.4	3.07	1.742	1.1

保全対策区	土壌区	地点番号	層位	深さ cm	理 学 性														
					風乾細土		細土無機物中					粘 土 性	現地100°C中						
					水分%	腐植%	粗砂%	細砂%	砂合計%	シルト%	粘土%		容積重 $\rho$	固相容積CC	水分容積CC	空気容積CC	孔隙率%		
					(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(g/cm <sup>3</sup> )	(cc)	(cc)	(cc)	(%)			
石坂	開進	269	1	0~15	29	85	314	312	626	198	176	SCL	—	—	—	—	—		
			2	15~25	59	139	40	250	290	319	391	LiC	87.4	17.4	43.2	393	60.2		
			3	25~50	5.0	8.7	0.6	291	297	41.9	28.4	LiC	81.2	14.0	50.0	35.0	64.0		
			4	50~65	4.9	4.6	0.4	32.6	33.0	45.2	21.8	SiC	—	—	—	—	—		
			5	65~	5.4	—	4.6	22.2	26.2	37.4	36.4	LiC	—	—	—	—	—		
	日方	273	1	0~16	2.4	5.8	21.0	44.8	65.8	22.3	11.9	SL	93.4	19.0	41.7	39.3	60.7		
2	16~40	3.0	2.6	0.5	51.0	51.6	32.3	15.7	CL	102.6	13.0	40.2	46.3	87.0					
3	40~60	1.9	—	0.9	72.4	73.5	15.2	10.5	SL	107.6	16.0	13.4	40.3	59.4					
京和	東和	217	1	0~20	3.7	8.2	6.0	60.8	64.9	23.1	10.1	SL	—	—	—	—	—		
			2	20~30	—	21.8	—	—	—	—	—	—	—	56.1	22.4	53.1	27.7	62.5	
			3	30~50	10.1	10.8	7.1	46.8	53.9	34.3	11.8	L	49.1	30.5	49.1	20.1	7.9%		
			4	50~70	8.0	—	34.2	52.5	86.7	3.9	9.4	LS	—	—	—	—	—		
	尾張	115	1	0~20	2.2	3.0	57.6	22.7	33.3	17.0	2.7	SL	68.3	23.4	20.0	51.6	71.6		
			2	20~30	9.0	14.3	5.1	31.6	36.7	44.8	13.5	CL	46.5	1.98	48.7	31.5	80.2		
			3	30~45	10.4	10.2	7.6	50.4	58.0	34.6	7.4	L	47.8	20.0	48.0	32.0	80.0		
			4	45~70	6.4	—	20.1	53.9	74.0	16.9	9.1	SL	59.7	23.1	45.4	31.5	76.9		
日方川	日方川	21	1	0~18	3.3	4.6	16.6	46.2	62.8	23.5	13.6	L	81.2	31.3	32.9	35.3	68.2		
			2	18~33	3.5	2.7	7.7	51.7	59.4	21.6	18.9	—	102.7	39.0	40.4	20.6	61.0		
	上天樹	261	1	0~12	1.9	3.8	15.0	54.9	69.9	17.9	12.2	SL	110.3	13.1	42.7	44.2	55.8		
			2	12~20	1.8	—	11.2	68.1	79.3	12.1	8.6	SL	111.3	18.1	39.8	42.1	57.9		
アイボシマ	アイボシマ	116	1	0~8	4.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			2	8~17	0.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			3	17~45	9.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	当緑	115	1	0~15	8.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			2	15~28	0.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			3	28~45	6.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			4	45~63	5.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
当緑川	118	1	0~15	6.4	8.5	0	10.3	10.3	55.9	33.7	SiC	85.0	36.9	53.6	9.5	63.1			
		2	15~35	4.6	2.5	0.2	41.8	42.0	36.2	21.8	CL	105.8	41.2	50.3	8.5	58.8			
		5	50~63	7.9	—	0.3	4.3	4.6	51.8	43.6	SiC	—	—	—	—	—			
ベタン	晩成	207	1	0~15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			2	15~23	8.7	11.4	4.8	36.2	41.0	48.6	10.3	SiL	—	—	—	—	—		
			3	23~30	9.2	6.0	5.4	51.8	57.2	40.4	2.3	L	57.0	21.5	52.5	24.0	78.5		
			4	30~45	6.3	—	7.3	26.7	34.0	44.6	21.4	CL	86.1	32.3	47.5	20.2	67.7		
			5	45~55	4.6	—	13.4	14.1	27.5	44.7	27.8	LiC	—	—	—	—	—		

化 学 性												
p H		置 換 酸 度 Y <sub>1</sub>	有 機 物			置 換 容 量 me/ 100g	置換性塩基mg/100g			石 灰 飽 和 度 %	磷 酸 吸 收 係 数	有 效 態 磷 酸 mg/ 100g
H <sub>2</sub> O	KCl		T-C %	T-N %	C/N		CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
5.6	4.5	2.00	4.95	0.39	13	1.93	207.5	20.2	18.8	40.2	9.11	3.9
5.3	4.2	6.75	8.06	0.63	13	38.9	309.0	22.1	37.7	38.3	1.586	1.3
5.2	4.2	13.25	5.07	0.44	12	28.0	123.4	14.1	23.6	15.7	1.710	1.1
5.2	4.2	17.25	2.65	0.25	11	21.8	70.1	28.2	9.4	11.2	1.485	1.1
5.1	4.1	23.25	—	—	—	27.9	70.1	24.2	14.1	8.8	1.674	0.4
5.5	4.4	4.50	3.36	0.30	11	14.2	8.69	4.0	23.6	21.7	7.87	3.3
5.5	4.4	7.50	1.51	0.20	8	12.6	33.6	10.1	14.1	7.5	1.144	0.4
5.6	4.4	5.50	—	—	—	8.5	28.0	4.0	14.1	12.6	7.74	tr
5.6	4.5	2.50	4.73	0.34	14	14.6	112.2	6.1	4.7	27.6	8.78	4.8
5.5	4.5	5.00	12.64	0.83	15	41.0	117.8	12.1	9.4	10.1	2.691	tr
5.5	4.7	1.75	6.29	0.50	13	23.1	53.3	12.1	9.4	8.0	2.540	tr
6.0	5.3	0.25	—	—	—	13.1	100.9	12.1	18.8	27.7	2.157	2.8
5.7	4.6	1.75	1.72	0.15	11	6.9	42.1	12.1	14.1	22.1	6.47	0.8
5.5	4.4	4.25	8.28	0.56	15	34.9	117.8	40.3	14.1	12.0	2.598	tr
5.6	4.6	2.00	5.93	0.46	13	28.2	5.2	18.1	14.1	3.3	2.730	tr
5.8	4.8	0.75	—	—	—	1.95	14.0	32.3	14.1	2.7	1.777	tr
6.3	5.3	6.25	2.65	0.25	11	14.4	333.7	26.2	24.1	8.27	6.21	24.5
6.3	5.1	0.25	1.59	0.19	8	12.8	28.60	32.3	22.3	8.23	7.47	25.5
5.3	4.4	3.75	2.20	0.36	8	12.0	120.6	10.1	18.8	35.4	7.05	5.9
5.6	4.5	3.00	—	—	—	7.8	67.3	18.8	18.8	30.4	5.29	3.1
5.7	4.4	3.01				2.90	8.69	30.2	8.8	14.6	14.19	tr
5.8	4.9	1.50				5.4	8.4	8.1	1.0	5.6	5.20	tr
5.3	4.2	11.60				—	173.8	60.5	2.8	—	—	tr
5.2	5.5	13.11				2.90	100.9	32.3	1.23	12.4	1.306	tr
5.8	4.9	1.50				5.4	8.4	8.1	1.0	5.6	5.20	tr
5.1	4.1	21.25				34.2	182.3	50.4	4.3	1.91	1.566	—
4.9	4.1	16.73				—	126.2	62.5	2.1	—	—	—
5.3	4.1	21.69	4.93	0.49	10	30.7	187.9	28.2	35.4	22.0	1.090	tr
5.5	4.1	18.90	1.44	0.18	8	18.7	151.4	30.2	9.2	2.92	1.164	tr
5.3	4.1	15.25	—	—	—	22.6	280.1	44.4	10.9	4.42	1.616	—
—	—	—	—	—	—	1.88	157.0	26.2	12.9	2.97	2.242	tr
6.0	4.7	2.36	6.60	0.47	14	22.8	72.9	24.2	21.8	11.5	2.363	tr
6.0	4.9	1.07	3.47	0.31	11	15.6	30.8	28.2	22.1	7.0	—	—
6.1	4.6	2.15	—	—	—	9.7	53.3	30.2	12.2	1.98	1.657	—
5.9	4.3	16.75	—	—	—	1.4	22.4	38.3	1.69	6.15	9.37	—

保全対策区	土壌区	地点番号	層位	深さ cm	際(風乾物中%)	理 学 性												
						風乾細		細土無機物中					土性	現地に於ける理化学性1000g容				
						土中	腐植	粗	細	砂	シルト	粘		容積重	固相容量CC	水分容量CC	空気容量CC	孔隙率%
						水分%	植%	砂%	砂%	砂合計%	ト%	土%						
ベ タ ン	蔚和 西	174	1	0~19		3.3	5.0	33.9	43.2	7.7	17.2	5.7	SL					
			2	19~40		10.2	16.1	2.9	33.3	3.65	50.6	12.8	SiL					
			3	40~55		5.5	3.8	4.0	50.9	5.49	35.4	9.8	L					
	蔚和 東	168	1	0~13		5.3	5.3	32.3	38.7	7.1	22.5	6.5	SL	7.46	2.21	2.66	4.23	7.09
			2	13~23		6.4	6.9	30.5	4.31	7.36	22.7	3.6	SL	8.50	3.17	4.07	2.76	6.03
			3	23~33		5.0	3.0	4.28	3.62	7.90	1.76	3.4	SL	—	—	—	—	—
ベ タ ン	181	1	0~14		5.8	7.3	33.3	19.3	5.26	2.24	2.50	LiC						
		2	14~21		6.3	10.7	2.16	2.35	4.51	25.3	2.95	LiC						
松 山	松 山	12	1	0~18		3.9	6.3	2.64	4.21	7.05	2.29	6.6	SL	7.72	3.01	3.54	3.15	6.99
			2	18~23		4.3	6.7	2.75	4.34	7.09	2.38	5.3	SL	8.29	3.13	3.62	3.00	6.82
			3	23~40		5.2	3.2	9.4	5.03	5.97	3.70	3.2	L	7.53	2.75	5.21	2.94	7.25
			4	40~50		3.7	—	1.63	3.71	5.34	3.19	1.47	L	11.17	4.04	3.73	2.23	5.96
	尾 田	230	1	0~18		2.8	5.5	4.10	3.58		1.61	7.1	SL	6.92				
			2	18~30		6.2	9.2	9.9	4.74	5.73	3.96	3.1	L					
			3	30~45		6.3	—	10.6	5.93		2.32	6.9	SL					
			4	45~56		2.8	5.5	4.11	3.58	7.68	1.61	7.1	SL	—	—	—	—	—
	大 和	221	1	0~14		2.8	5.5	4.11	3.58	7.68	1.61	7.1	SL	—	—	—	—	—
			2	14~23		6.8	4.7	8.2	4.58	5.40	2.89	1.72	CL	6.92	1.87	5.32	2.81	7.19
			3	23~35		5.5	—	7.5	5.75	6.50	2.16	1.34	SL	—	—	—	—	—
			4	35~56		4.5	—	6.1	6.51	7.12	1.63	1.25	SL	—	—	—	—	—
下 大 樹	19	1	0~18		3.0	5.7	4.85	3.10	7.95	1.71	3.4	SL	7.28	2.93	2.84	4.23	7.07	
		2	18~25		5.7	10.3	1.79	3.72	5.51	3.54	9.5	L	6.87	2.81	5.08	2.11	7.19	
		3	25~52		6.4	4.3	3.8	5.84	6.22	3.78	0	L	6.54	2.37	4.62	3.01	7.63	
		4	52~		3.3	—	2.4	4.56	4.80	3.71	1.49	L	11.59	4.30	4.20	1.50	5.70	
光 知 園	光 知 園	252	1	0~19		2.6	5.5	4.75	3.00	7.75	1.61	6.4	SL	8.17	1.97	4.40	3.63	6.37
			2	19~25		7.5	10.9	2.6	2.69	2.95	4.31	2.74	LiC	6.23	1.55	5.47	2.98	7.02
			3	25~32		7.9	3.8	10.8	5.39	6.47	2.13	1.40	L	7.86	1.50	5.27	3.28	6.77
			4	32~52		6.7	—	10.9	5.77	6.86	1.60	1.54	SCL	—	—	—	—	—



化 学 性												
pH		置 換 酸 度 Y <sub>1</sub>	有 機 物			鹽 置 換 容 基 量 me/ 100g	置換性塩基mg/100g			石 灰 飽 和 度 %	磷 酸 吸 收 係 數	有 効 態 磷 酸 mg/ 100g
H <sub>2</sub> O	KCl		T-C %	T-N %	C/N		CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
59	48	129	291	023	13	100	1206	222	31.6	433	880	57
56	44	9.66	9.36	056	17	21.2	906	359	279	153	—	tr
57	44	644	2.19	0.17	13	148	224	10.1	180	499	—	—
58	46	344	3.10	029	11	140	757	10.1	242	19.5	770	44
55	46	430	399	0.31	13	16.1	39.2	383	36.1	86	—	15
58	47	2.79	1.71	0.16	11	108	336	10.1	178	10.7	—	—
55	44	4.07	4.51	0.51	9	2.79	314.0	605	35.5	39.9	1,026	364
53	42	9.72	6.19	056	11	281	2636	685	553	335	1,063	156
60	49	1.25	3.65	0.25	15	129	953	8.1	104	266	982	162
59	48	1.50	3.86	0.27	14	13.9	89.7	20	83	233	1,318	66
60	49	0.75	1.86	0.17	11	136	44.9	8.1	13.1	11.5	1,770	—
61	46	2.50	—	—	—	104	365	8.1	7.3	134	1,067	—
61	5.1	—	3.17	0.24	13	103	—	—	—	52.1	745	tr
57	4.7	1.50	534	035	15	212	73.1	262	47.1	188	2,152	tr
57	4.7	—	—	—	—	156	—	—	—	106	1,991	tr
61	5.1	0.25	3.17	0.24	13	103	1458	6.1	9.4	50.1	745	tr
58	48	1.00	2.74	0.28	10	148	449	8.1	14.1	108	1,741	04
57	4.6	1.50	—	—	—	1.19	50.5	10.1	94	15.1	1,492	0.2
56	4.5	3.00	—	—	—	100	589	8.1	94	19.1	1,242	1.5
59	4.9	0.50	3.32	0.23	14	112	92.5	8.1	8.1	294	687	132
61	4.9	0.50	5.97	0.38	16	208	1402	6.0	20.1	240	2074	tr
59	4.9	0.75	2.50	0.18	14	148	70.1	2.0	6.0	165	1,859	—
65	4.8	1.75	—	—	—	9.5	589	2.0	4.7	21.7	924	—
56	4.8	0.75	3.20	0.29	11	123	1430	14.1	56.5	41.7	832	9.9
49	4.3	9.50	633	052	12	323	1122	14.1	424	82	2,248	09
52	4.4	5.50	220	0.21	10	17.9	365	16.1	37.7	7.5	2,174	tr
54	4.3	7.50	—	—	—	16.3	449	403	283	9.9	1,910	tr

# 大 樹 町

頁	行	正	誤
1	下から2行	粗 粒	租 粒
4	上から13、14行(表)	当 縁	当 縁
5	上から7行(表)	当 縁	当 縁
7	表	自然肥沃度	自然肥沃共
14	表(第4層)	pH(H <sub>2</sub> O)	oH(H <sub>2</sub> O)
28	上から5行	SL	SM
41	上から1行(表)	7.5 YR	7.5
52	上から5行	左 程	右 程
52	上から18行	Kg	km
91	表(当縁)	4.4	5.5